十五少年開拓記

pange

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十五少年開拓記

【Ｎコード】
Ｎ９８５５Ｈ

【作者名】
ｐａｎｇｅ

【あらすじ】
十五少年漂流記とはちょーっと違います（あしからず）。思わぬ飛行機事故に遭遇した少年少女は、奇妙な島に不時着する。そこで新国家を作ったり、島を探検したりして、一風変わった平凡な日常を築き上げるのだが、しかし！そこには奇妙な動物がいたり、変な遺跡があったりと、島を巡る謎は深まるばかり。かと思えば、仲間内でもきな臭い雰囲気が…。十五少年（少女含む）が中心となり、非現実的な無人世界に新たな世界を開拓していく。そんな物語です。

第1話　漂着

俺って不幸？

俺というより、俺たちと表現したほうが妥当なのかもしれないが、とにかく、なんで俺はこんな目に遭ってんだろうと思わずにはいられなかった。

前を見れば、果てしなく広がる大海原。ザザァと、先ほどからずっと、悲鳴のように泣き喚いている。

後ろを見れば、果てしなく広がる大樹林。葉と葉の擦れ合う音が、なんともいえぬハーモニーを奏でていた。

要するに、俺たちは見たことも、聞いたこともないような、いわゆる無人島ってところにいたのだった。俺にとっちゃ、明らかに非現実的（アンタジック）な異世界である。

ありえねーッ！

今時、地図にも載ってないような無人島なんてものが、本当に存在するのだろうか。いや、そんなものがあるとしても、ご都合主義的に、必要最低限の生活物資が揃い、ある程度の大きさを保ち、かつ人里から完全に隔離された世界なんてものが、本当にあるのだろうか。

漂流なんて言い出すと、ありふれた冒険小説でも読んでいる気分になる。そりゃ、俺だってそういうロマン溢れる小説は好きさ。何人もの少年たちが、名もなき無人島に漂着して、必死に生き延びていく話とか、ロビンソンクルーソーとか。けどさ、そんなものは、所詮、小説の中の話だろう。現実にそんなことがあり得るのか。

だだっ広い大海原にて儚く難破した船が、そう容易く無人島なんかに流れ着くものだろうか。普通、果てしなき海をひとしきり彷徨った挙句、救助されなければ、どす黒き海の底に沈むより他に仕方

ないだろう。大体、無人島なんて、この世の中にいったいいくつあるというのだ。だだっ広い海の上に、点々と散らばっているに過ぎない無人島に辿り着ける確率とはどれほどのものなのだろうか。

けれど、現実に俺たちは、無人島なんてところにいる。難破したわけじゃない。けれど、似たようなものだろう。何しろ、俺たちが乗ってきたジャンボジェット機は、見るも無惨な姿になって、近くの砂浜に打ち上げられていた。わが国を代表するフラッグキャリアの、割と著名なロゴマークが、変な風にひん曲がって、何とも言えず悲しげな顔をしているように見えた。

墜落したのだ。

簡潔に言い表すと、そうなる。そして、俺たちは助かった。助かった人数は、とりあえず三十人。けれど、ジャンボジェット機には、乗員乗客合わせて二百人近くが乗っていた…、らしい。余り詳しいことは知らないが、とにかく大勢乗っていたのに、生き延びたのはたった三十人だった。

ま、助かったのは奇跡のようなものだった。あと少しだけ座っている位置が左にずれていたら…？　あのとき、シートベルトが外れなかったら…？　おそらく死んでいたろう。隣に座っていた友人は、つけていたシートベルトが外れずに、怒涛の勢いで押し寄せてきた海水に飲み込まれて、そのまま溺死してしまった。俺は、運よくシートベルトが外れたので、散々濁流にもまれた挙句、外に放り出されてしまった。故に助かったのだ。かすり傷一つですんだのは、奇跡中の奇跡というべきかもしれない。まあ、心に大きな傷は負ってしまったが…。後に他の生還者に聞いた分には、皆、自分と同じように九死に一生を得ていたらしい。

俺は不幸だ。俺たちは世界で一番の不幸せ者だ。

なんて思いながら、いつものように昇る朝日を眺めていたけれど、考えてみれば、俺たちは世界で一番強運に恵まれていたのかもしれない。とりあえず命はある。これからどうなるかは知らないが、とにかく生きている。

海水に浸かった足は、確かにひんやりとして、気持ちがよかった。

普通なら、今頃はハワイでバカンス…、もとい御勉強に励んでいたろう。何せ、俺は高校二年生だ。修学旅行。我らが私立高校は、バカ高い学費の分だけ、こういう行事には、やたら無駄な大金を投じてくれることになっていた。他の高校に通った面子が、沖縄とか広島、あるいは長崎辺りに赴いている頃、俺たちは優雅にハワイを満喫しているはずだった。

けれど、そうもいかなくなった。

ガタガタガタガタッ。

機体が音を立てて揺れ始めたとき、俺は地震でも起きたのかと思った。

「地震？　上空だぜ？　んなわけあるかよ」

隣の友人は、そう言って笑っていた。初めのうちは、皆、この思いもよらぬアクシデントを大いに楽しんでいた。中には、ジェットコースターにでも乗っているかのように、高笑いしながら、堪能している馬鹿もいたぐらいであった。

雰囲気が変わったのは、それから二分ぐらいして後のことだ。

『現在、当機は乱気流の中に…』

なんてアナウンスが流れ始め、まず乗務員辺りの雰囲気がおかしくなった。そして、そうした雰囲気が伝染するかのように、乗客たちも、言いようのない不安に押し潰されるようになった。

けれど、機体はちっとも乱気流から突破せず、相変わらずガタガタと震えていた。パイロットが必死になって機体を維持しようとしているのだろう。上に下に、右に左。機体はいちいちダイナミックに揺れ動いた。

ゲェェェッ！

って吐き出す奴も中にはいた。…もとい、大勢いた。無理もない。咎める奴もいない。皆、はっきり言って、それどころじゃなかった。
すかさず十字を切っている奴がいた。両手を合わせて、「南無阿弥陀仏」って唱えている奴もいる。もしもの時の神頼み。揺れが酷くなるに連れて、そういう声はどんどん強く、大きくなっていった。

俺は見た。
突如、辺りがパァァァッと光ったのだ。
はじめ、雷かと思った。けれど、どうやらそういうわけでもないらしい。実際、雷らしい轟音が響かなかった。しかし、光ったことは光ったのだ。雷とは違う、真っ赤な光であったような気がした。
そして、その瞬間、ドンと機体が特大級に揺れた。そして、後はあっという間だった。どこかに吸い込まれていくかのように、飛行機は急降下し、そして墜落したのである。
全てが終わったと思った。僅か高校二年にして、一生が終わりを告げてしまうのかと思うと、怖かったし、辛かった。けれどそれ以上に俺は甚だしく後悔した。もっと、いろいろとやっておけばよかったと思う。勉強から、運動から、遊びや友人作り…。少なくとも、こんなところで死にたくない。
死んだらどうなるんだろう。ふと思った。三途の川なんてものが本当にあるんだろうか？　あるいは奇妙な神々の審判を受ける羽目となるのだろうか。天国があるんだとしたら、どんなものだろう。行ってみたい気もする。一方で地獄にも興味はあった。とにかく、俺はどっちに行くんだろう。悪いことをした気はないけれど、考えてみれば、何を持って悪となすのか、その辺りの基準がいまいち分からないので、あるいは俺も地獄行を宣告されることになるのかもしれない。
いずれにしても死ぬんだろう。漠然とそう思い、覚悟した。
…けれど、死ななかった。

奇跡は起きたのだ。
「死んでねぇ」
気がついたとき、俺は砂浜に打ち上げられていた。側を見ると、息をせぬ冷たき骸と成り果てた同級生たちの哀れな姿があり、俺はただ絶句した。

漂着から一日が明けた朝。
俺はぼんやりと砂浜に佇んでいる。
昨夜のうちに打ち上げられた遺体の大半は、きちんと荼毘に付した後、火葬した。このまま放置しておくのは、余りに酷い仕打ちのような気がしたし、何より、このままにしておいたら、そこから妙な病原菌が生み出されないとも限らない。
だから、砂浜は随分と綺麗なものである。俺はしばらくジッとそこに佇み、そして、何度目になるかしれない溜息を、もう一度大きく吐いた。
すると…。
「新井！」
何やら、大きな声が轟き、俺はぎょっとして振り返った。
「先生が会議を開くんだってよ！」
やってきたのは、親友の後藤大輔という青年だ。堂々たる体格、モデルのような背丈が特徴的な、鬱陶しいほどに格好いい男である。幼稚園時代から、高校二年の今に至るまで、同じ学校、同じ学年、同じクラスに通い続けた生粋の幼馴染なのだった。ちなみに、テニス部副主将。最強レギュラーの異名をとる、我が部屈指の強力選手でもある。俺はというと、テニス部主将だが、辛うじてレギュラーの座を維持しているに過ぎない、中の上という中途半端選手。
「会議？」
俺が大声を張り上げて、答えてやると、
「何でもリーダーを決めたいんだと」

後藤はそう言い、「ははは」と苦笑いした。

第2話　選挙

相沢修平。二十五歳。
我が高校における世界史担当教諭。
大学を卒業し、教師となってまだ間もない新米教師であるが、そうは思えぬほどの迫力と度胸、行動力で、いわゆる不良と言われているような生徒たちからも一目置かれている変な先生であった。ちなみに、俺の担任にして、テニス部顧問。
常に人の上に立っていないと気がすまない性質らしく、なら、いっそのこと、会社でも作って、流行の若手社長なんてものに納まっていればよいのに、そこまでの度胸はないので、何となく教師になったらしい。まあ、学業優秀、有名大卒だから、別段就職には困らなかったろうが、教師となって以後の彼は、何やらうまい具合に立ち回って、今や学校経営の全権を牛耳っていた。
とまあ、上から下まで全部、変な男であったが、とにかく、彼もまた不幸な墜落事故における生還者の一人であった。ちなみに、生還者は三十人ほどいるが、そのうち、十五人が我が高校の生徒である（その中の十三人はテニス部員）。

ひとしきり顔を洗った後、後藤に催促されて、臨時キャンプに足を運んだ俺は、そこで行われている会議に参加した。
会議。
というよりは、漂流者たちのリーダーを選出するための選挙であり、今は、立候補者による演説が行われている真っ最中であった。俺はとりあえず、適当な石の上に腰を下ろすと、何やら医者らしい一人の男の、なんとも眠くなるような、ありがちな選挙演説に耳を傾けていた。
「我々は、不運にもかような事故に遭遇し、どこだか分からぬような島に辿り着いたわけであります。救助を待つにしても、既に飛行

機内の通信機能は壊滅状態で、ＧＰＳなど居場所を知らせる機械も駄目となっております。我らは絶海の孤島に追い詰められたわけで、即ち、長い間、この島に滞在しなければならぬことを覚悟しなければなりません。ゆえに、人生経験豊富な私が、とりあえず指導者となり、救助が来るまでの間、皆様を的確に指導したく存じます」

などと、くどくど喋っている。見れば、四十、五十近いおっさんだ。ぽっちゃりと太っているから、最近流行のメタボ体質なのだろうか。けど、そんな奴に、命を預ける気はおきない。自分の体型一つ管理できない奴に、三十人を管理できるわけねぇだろ。

続いて、とある大企業で部長職にあったというサラリーマンのおっさんが、名乗りを上げた。

「私は、○×自動車の開発部長で、それ以前は子会社の専務取締役などを務めてまいりました。えぇ、それ以前は…」

問題外。

俺は心の中で毒づいた。俺たちの命を預けるリーダーを選ぶための選挙演説で、こいつはいったい何を喋っているのか。お前の経歴なんて知っても、俺たちには何の利益もない。何か勘違いしている。見れば、後藤も、他の部員たちも、皆、あほらしそうに失笑していた。気持ちは分かる。許されるなら、「あほか」って言ってやりたい。

しばらく候補者がたって、これといった人間はいそうもなかった。そして六人目。

最後の候補者が、悠然と立ち上がり、そして皆の前に足を進めた。俺はジッとその候補を見つめている。最初から、彼こそが本命候補で、他はどうでもよい、いわゆる泡沫候補に過ぎなかった。彼、即ち相沢修平は、相変わらずニタニタと笑い、そして、居並ぶ二十九人をぎろりとにらみつけた。

「演説も糞もねぇ」

相沢はいきなりそう叫んだかと思うと、今度は近くに転がっている機体の残骸を指差して、
「あれをみろ！」
と、怒鳴った。
「とにかく、俺たちは助からん。要するに長い間、ここで暮らす必要性があるってことだ。暮らす上で必要なのはリーダーを選ぶこと。リーダーに必要なのは、若さと行動力、決断力だ。はっきり言って、知識だけあって頭が硬いおっさんや、昔の栄光に縋ってるおっさんなんかに、三十人の命を預かるリーダーになる資格はねぇ」
医者のおっさん、サラリーマンのおっさんをいちいち指差しながら、相沢は辛らつな言葉をずらずらと並べていった。名指しされた二人のおっさんたちは、真っ赤になって怒り出したが、そんなことにいちいち気を遣うほど、生易しい男じゃなかった。
相沢は再び三十人を睨み付けると、
「俺をリーダーにするのか、しないのか。イエスか、ノーか。どっちだ！　今選べ。手っ取り早い。ノーが多けりゃ、俺はやらねぇ」
答えなんて目に見えている。どうせ、相沢が顧問を勤めてるテニス部員十三人は彼にイエスと答えるに決まっているし、同様に同じ高校に通う二人も、相沢を支持するだろう。これで半分、十五人。そして相沢本人を加え十六人。過半数だ。
結果、イエス二十一人、ノー六人、棄権三人で、相沢修平がリーダーとなった。相沢を二十一人が支持した以上、他の候補者五人がいくらでしゃばったところで、勝ち目はない。第一、過半数を相沢派が占めてるんじゃ、他の奴がどれだけ頑張っても、過半数は取れやしない。どの道、相沢がリーダーになるのは、規定路線であった。
「そうだ。リーダーじゃ、ちょっとつまらん。これから、俺のことは…、そうだな。市長と呼べ！」
ひとしきり会議が終わった頃、相沢はそう言って嬉しそうにからからと笑った。
「市長？」

後藤辺りが、面白いぐらい素っ頓狂な声を張り上げて、相沢修平の下に歩み寄った。
「そう、市長。相沢市長！　面白いだろう」
何がどう面白いのか、いまいちよく分からなかったが、とにかくリーダーだろうが市長だろうが、どっちでもいい。とにかく、今は居心地よい寝場所を確保し、当面の水と食糧を手に入れることが先決だった。側に小川が流れているから、水はいいとして、食糧は喫緊の課題だ。相沢市長とやらには、まず食糧問題の解決を第一に実現してもらおう。
なんて思っていると、相沢市長は俺の下にやってきて、
「新井！　お前には副市長をやってもらうぞ」
と、唐突に切り出し、にこりと微笑んだ。
「ふ、副市長？」
後藤の裏声を笑っていた俺としては、心外なほどの裏声で、驚きの色を露にしていた。
「副市長だ。いい響きだろう。ま、要するに俺の補佐だな。どうせ、お前はテニス部主将だろう。俺は顧問」
「…は、はぁ」
「それと、後藤。お前は出納長（すいとうちょう）をやれ！」
矢継ぎ早に指示を出していく相沢に、俺も後藤も、ただ呆然と立ち尽くした。
「出納長？」
後藤が驚く。無理もない。っていうか、出納長って何だ？　確か、地方自治体の幹部職にそんな役があった気がする。
「要するに会計係だ」
相沢は淡々と言う。
「会計？」
後藤は相変わらず困ったような顔をしている。
「ま、金の出入りって言うより、水とか食糧の管理だな。お前は真面目だから、それぐらいはできるだろう」

「は、はぁ」
　これが相沢市長流の幹部人事らしい。あっという間に、おおよその役目を決めてしまって、異議は一切認めなかった。実際、十六、七のガキに、副市長だの、出納長だの、そんな大そうな役目を回し、主導権を自派で固めてしまった相沢のやり方に対し、肩書きだけ立派なサラリーマンや、プライドがやたら高そうな医者たちが猛反発したが、
「俺は市長だ。嫌なら、ここから出て行け！」
　これで終わりだった。既に相沢は崩壊した機内から回収した生活必需物資の全てを掌握している。放り出されたら、生きていけまい。満ち足りた文明生活に慣れきった我々が、たった一人、非現実的な世界で生きていけるはずがないだろう。
　サラリーマンや医者のおっさんは、渋々納得し、立ち去ろうとした。その哀れで、小さき背中に向かって、
「そうそう。あんたらには、これから、この新井副市長に従って、俺たちが長い間、生活できそうな場所を探してきてもらうよ」
　と、追い討ちをかけるように、市長として命令を下した。これまでは、医者とか部長とか呼ばれて、社会的ステータスの高さを誇りにしていただろうおっさんたちも、こんな若造に顎で使われるなんて哀れだな…、などと他人事のように思っていた俺は、ふと、「新井副市長に従って…」っていう相沢の言葉を思い出し、絶句した。俺も行くのか？　俺は、改めて相沢を見つめると、
「行け！」
　彼は無情である。そして、言い出したら聞かない。
「分かりました」
　俺は困ったように溜息を吐くと、とりあえず哀れな医者やサラリーマンの下に向かい、また、他に適当な人間を数人集めると、
「行きましょう」
　と言って、とりあえず見たことも聞いたこともない無人島の、さらに奥地へと足を運ぶことにした。

第3話　探索

俺は、副市長として、とりあえず偉そうなサラリーマンと医者、それだけじゃ明らかに心もとないから、同じ部員の遠藤と小林、佐藤、それとキャビンアテンダントの女性一人を伴い、大樹林の中へと足を踏み入れた。

無論、目印は残している。道筋を忘れて迷子にでもなったら、目も当てられない。とりあえず、当面の食糧と水は持った。後は、居心地のよい住処を探すのみ。

「なぁ、新井。これから俺たち、どうなると思う？」

言わずもがな、分かってんだろうが。今更なに分かりきったこと言ってやがんだ！　そう言ってやりたい気持ちを必死に抑えながら、俺は不安がる遠藤に対し、冷酷に答えてやった。知らん、と。

遠藤は、「そうか」とだけ言って引き下がった。不安そうな顔をして、しきりに溜息など吐いている。学校では随分と偉そうにしている割に、こういうときには全く臆病な奴だと、心の中に思いながら、けれど口には出さなかった。

鬱陶しいような大密林をすいすいと進むと、程なくして、だだっ広い野原に出た。雰囲気は悪くない。近くに小川が流れ、先ほど確認しただけでも、案外木の実などは豊富そうだった。

「ここなんて、よさそうだな」

佐川新平がそんな風に言うと、俺は、とりあえず静かに頷いてやった。

友人たちのことや、おっさんたちのことなど、ほとんど無視して、俺は辺りを歩き回った。とりあえず、この野原には、小川の他に何があるのか。いろいろ調べて、今後のことに役立てようと思ったわけだが、何のことはない。ひたすら野原が広がっていて、その中に、池のような水溜りや、その周りを覆うような背丈の高き草むらが、ところどころ点在しているようだったが、基本的にそれだけだった。

別段変哲もない、ただの野原である。
とにかく、住むならここしかない。近くの密林の木々を切り倒して家など作れば、三十人ぐらい収容できる村はすぐに出来よう。家作りに必要な工具のようなものは、既に壊れた機内より回収済みである。
「とりあえず、帰ろう」
余り長居しても意味はない。本当に迷子でも出したら、それこそ面倒である。第一、運動に慣れてないメタボおっさんたちは、既にへばって、近くの岩の上でハァハァと荒い息を吐いていた。
「あれじゃ、これ以上の探索は無理！」
と、俺が言うと、元気バリバリの少年たちも、「そうだな」と言って、あっけなく頷いた。

キャンプに戻ると、自ら市長と名乗っているけったいな相沢修平が、その辺に転がっていたであろう木の枝を使って砂浜に書き上げた組織図とともに、ニコニコ顔で待ち構えていた。
「なんです、それ？」
とりあえず、探索組を代表して、俺が尋ねてやると、
「市長たる俺を支える幹部と、その役割だ」
相沢は淡々と答え、にっこりと微笑んだ。
「とりあえず副市長は新井、お前だろ。けど、副市長じゃ何をやるのかはっきりしねぇ。だから、お前の下に探索チームをつけるから、引き続き、この島の探索を続けてくれ」
「…はぁ」
困ったように頷きつつ、俺は呆れたように苦笑いした。昔からそうだが、この男は、妙に組織作りというものが好きなようだった。テニス部時代も、キャプテンに代わる主将なんて役職を新たに設置したかと思うと、曖昧だった主将や、副主将らの役割を明確に定めた表を作って、全部員に周知徹底させていた。そこに記された権限以外のことをしたら、烈火のごとく怒り出し、逆にその権限を行使

しなかったら、やはり怒り出した。
今回も、市長、副市長、出納長のほかに、食料調達隊長、探索隊長、資材管理隊長なんてものを新設し、次から次へと任命していった。とりわけ食料調達隊は三個分隊編成になっていて、一番隊長には遠藤伸介、二番隊隊長に佐藤高次、三番隊隊長に小林太郎を充て、探索隊長は副市長たる俺の兼任、資材管理隊長は相沢自身が兼任して、実務は副隊長に指名した古谷亜子と近藤英二に委任した。
以上が主要幹部だが、キャビンアテンダントの古谷亜子を除けば、全員、相沢の息のかかったテニス部員であった。

いつの間にやら副市長兼探索隊長になっていた俺の指揮下には、テニス部員の佐川新平、上原勝正、上野浩一郎や同部マネージャーの平林めぐみのほか、女子大生の小沢愛理さんらがいた。佐川が筆頭副長、上原が副長って形になっているが、とにかく俺を含めた六名が探索隊員である。
そして、漂流から四日目の朝。
俺は相沢市長の命令を受けて、再度の探索に出かけた。

何でこんなことをしているんだろうね。
なんて、心の中で散々愚痴りながら、俺は草を掻き分け、大地を蹴って、圧倒的な大樹林の中を突き進んだ。
途中、奇妙な獣たちに出会った。ペンギンのような出で立ちをしながら、その肌を黄色と赤色に染め上げた奇妙な鳥を発見した時は、少々焦った。ペンギン同様、空は飛ばないらしい。群れを成して、俺たちの前をてくてくと横切っていく様は、なんとも言えず可愛かった。
他にもいろいろ、挙げだしたらきりがないのだが、二つほど例を挙げてみよう。では、まずその一！　鹿のような比較的大きめの哺乳類が小川の付近に群れを成して集まり、俺たちの接近に気づく風もなく、ぺろぺろと美味しそうに水を飲んでいた。ここで鹿のよう

なといったのは、鹿に似ているが、厳密には鹿でない…、要するに、毛の色が青色をしていて、形こそ鹿だが、明らかに鹿とは見えなかったからである。

続いて、その二！　鹿と近くの水場に集っていた鳩のような鳥が、俺たちの接近に気づいたのか、バサバサと飛び立ち、彼方へと消えた。鳩のような…、即ち、鳩であって鳩でない。普通白色をしているべきそれは、紅蓮のように真っ赤に染まっていた。

変な島だ。

それが俺の率直な感想。ガラパゴス諸島か！　なんて突っ込みたくなる気持ちを押さえ、とりあえず先へ進む。

「なぁ、この島っていったいどんだけ広いんだろな」

ふと、探索隊副長の佐川新平が呟くと、俺もまた、ぼんやりとこの島全体のことを考えてみた。…っていうか、俺たちは、ここが島だって思っているが、しかし、実際にここは本当に島なのだろうか。もしかすると、とてつもなくでっかい大陸だって可能性も否定できないわけで…。けれど、ハワイに向かっていて墜落したのだから、そんなことがありえるはずもない。太平洋上に、そんなどでかい大陸があるなんて、少なくとも俺は聞いたことがない。古のムー大陸とかが、突然姿を現したのか。んなバカな！

ま、おそらく島ばかりが連なっているミクロネシア諸島とか、その辺りに浮かぶありがちな無人島の一つに漂着しちまっただけなんだろう。あの奇妙な生物たちも、外界から完全に隔絶された世界にずっと過ごしていたんだから、外界のそれと全く同じじゃなくても、少しも不思議はあるまい。この島は、この島で独自の進化形態を辿ってきたのかもしれない。

ま、冷静に考えてみれば、所詮、現実なんてこんなものだ。俺は少しばかり誇らしそうに胸を張ると、

「ま、大陸じゃねぇことは確かさ」

と言って、相変わらず訝しがる佐川新平の肩をぽんぽんと叩いてやった。

第４話　開拓

俺たちが見つけた野原では、早速、相沢市長の指揮下で、開発工事が始まっていた。

どうせ、救助船なんてこねぇだろ。

そんな相沢の一言で、事業は始まった。まず機内から回収した工具箱の中に入っていたノコギリを使って木々をなぎ倒し、それを適当な大きさに加工する。男数人がそれを野原に運び、運ばれた材木は相沢の指示通りに組み立てられていく。固定する際に使用する紐は、樹海の中に大量に繁殖していた蔦（つた）を何十本、何百本と集め、それら四、五本を重ね合わせて、一本の紐代わりとした。

で、俺の仕事はというと、男衆五人ほどを束ねて、切り倒された木材の運搬及び組み立てが主であった。どうせ不器用だから、加工なんて面倒臭い作業ができるわけない。力は割りとあるほうだから、運ぶくらいはお手の物である。

後藤大輔は…、あいつは頭のいい奴である。相沢を補佐しつつ、設計図を作って、それにあわせて皆を指示したり、あるいは、木々の加工、組み立てなどを積極的に手助けするなど、オールマイティな能力を遺憾なく発揮して、大いに役立っているようだった。

既に漂流から一週間がたつ。

案外早いものだ。なんて思っている暇もなく、村の建設事業は急ピッチで進められていた。既に秋。この無人島が、いったいどこにあるのか定かではないが、やはり冬は厳しいだろう。それまでに、ある程度形だけは整えておきたい、ってのが相沢市長の考えで、彼がそう考えている以上、それは何としても実現させねばならなかった。さもなくば、あれは怒る。烈火のごとく怒る。ひとたび怒ると、手がつけられない。それを皆、ってのは要するに我が高校出身者のことだが、とにかく、皆知っているから、必死になって働いていた。

殊勝なのは、俺たちより遥かに年上のおっさんたちやお姉さんたちである。こんな若造の命令、指揮に、よくぞまあ、大人しく唯々諾々と従っていられるものだ。もし俺なら…、俺なら、こんな生意気なガキの言うことなんて無視して、勝手にやってるかもしれない。

医者がいるってのは、結構ありがたいものだ。

メタボ体型の中年男は、内科医の先生で、有名大学医学部卒業後、大学病院勤務を経て、町医者となった。大学病院じゃ、とりあえず助教授（今は准教授って言うらしいが）まで勤めて、教授の座も夢じゃないって言われてたらしいが、教授の座を巡って繰り広げられる無意味な権力闘争にあきれ果てて退職。その後、小さな町で、開業医をやっている。ってなことを彼は昨夜、俺に教えてくれた。

名前は大原宗雄。相沢から、市長付医務担当なんて妙な役目を拝領し、とりあえず、彼の側に侍(はべ)りつつ、怪我した者などがいれば、適当な処置方法を教えたりしていた。

漂流から一週間と二日が過ぎた日、後藤が怪我をした。運んでいた木材をうっかり落としてしまい、それが運悪く、彼の足指に直撃したのだ。痛そうにしているので、俺は後藤を大原医師の下に連れていってやり、診断させた。

「私は内科医だから、ちょっと専門外だが」

と、困ったように苦笑いしつつ、彼は後藤の足指を見た。親指辺りで、どうやら捻挫しているようだった。後藤は先ほどから、折れた！　って一人騒いでいたが、そこまで深刻なものではなかったらしい。

「とりあえず、こう固定して、一日安静にしてれば、よくなるよ。あんたたちはまだ若いしね」

大原医師はそう言って、羨ましそうにからからと笑った。俺は、大袈裟な後藤大輔の頭をぽんと叩くと、

「心配しただろうが！」

と、一言、小言を挟むことを忘れなかった。

一ヵ月半もすると、何となく村らしいものが、だだっ広い野原の中に生み出されてきた。村というより、キャンピング場にも似ている。あちこちから切り出してきた木材を重ね合わせて作り上げた、簡易的なログハウスがいくつか軒を連ねていた。屋根には、どでかい葉っぱをかぶせて、雨漏れしないよう細心の注意を払ってある。

そうしたログハウスが、とりあえず四軒ほど出来上がった。とりあえず、当面は、一軒辺り七人から八人が入居し、五軒目、六軒目と出来上がっていけば、順次、一軒辺りの数を減らし、最終的には一人一軒を宛がう、というのが相沢市長の基本方針となっていた。

そして、市長たる相沢の屋敷の建設計画も進んでいる。俺と後藤に、遠藤伸介、佐藤高次らテニス部員のほか、建設会社を営んでいたという渡辺護さんが、毎晩、顔を突き合わせて、ああでもない、こうでもないと議論を重ねていた。相沢市長は、いわゆる市役所みたいなもんだから、立派なものにしなければならんぞと、いちいち口煩く注文してくるのだった。

ま、市長の家なんてものが完成するのは、このペースなら、後、何ヶ月先のことになることやら。とにかく、如何に強権を誇る市長だとしても、四軒のログハウスのどれかに入居し、他の六人から七人のルームメイトと、雑魚寝する宿命から逃げ出すことはできなさそうだ。

俺はね、結構これはこれで楽しかったりしていたのだ。

何しろ、町を作ってるんだ。俺たちの手で！

思い返してみろ。小学校、中学校、高校と、とりあえず、与えられたレールの上を走り続けて、無難に人生のステップを駆け上がってきたけど、こんなに楽しかったことが他にあったか？　満ち足りた気分になったことが、他にあったか？

あるわけない。

俺は退屈だった。平凡で、何も変わらない毎日に飽き飽きしてい

たのだ。けれど、どうにもならない。どうせ変わらない。そう思って、俺は結局、大した努力をすることもなく、ただ何となく流れに身を任せ、平凡を甘んじて受け入れてきた。

運悪く…、いや、運よく、変化って奴は、俺の想像を遥かに上回る勢いと規模を持って押し寄せてきたが、とにかく、今のこの状況は、明らかに非日常すぎて面白かった。相沢じゃないが、副市長！

まあ、少なくともこんな地位に就くなんて、昔の生活からじゃ考えられなかった。

楽しい。面白い。

まあ、望郷の念がないといえば嘘になる。けれど、俺は別に、帰らなくてもよいと思っていた。ここにいつまでもいてもよいような気分でいたのだ。

開発は進む。

十二月になった。漂着から、二ヶ月以上が過ぎている。基本的に、外界からの音沙汰は一切ない。

まず今日を持って、ついに六軒目のログハウスが完成した。早速、相沢市長による部屋割りが発表されて、一軒辺りの入居数は五人に減った。七人、八人の同居では、やはり窮屈だったので、五人に減ったのは大いに喜ぶべきことだった。

また近くを流れる小川から用水路を掘り、その上で水をログハウス群まで引っ張ってくると、簡易トイレ、簡易風呂を作った。少しでも居心地のよい空間にしたいという思いが、この何もなかった世界に、一つの文明を作り出したわけであるが、そのために俺の払った労力は並大抵のもんじゃなかった。トイレに風呂、とにかく作れと五月蝿い女性陣の要求に耳を傾け、彼女たちを宥める一方、そんな暇はないと、ログハウス建設に全力を挙げる相沢市長の説得にも力を注がねばならなかった。

最終的に、相沢市長が許可を出し、俺と数人の男たちが、必死になって作り上げた。しかしトイレにしても、風呂にしても、いわゆ

る文明的な代物に慣れていた女性たちは、
「えぇぇ、これ？」
と、悲鳴のような不満を口々に漏らしていたが、俺たちの科学力では、これが限界だった。これ以上を望むなら、自分たちで作ってくれ！　俺がひとしきりそう叫ぶと、彼女たちは相変わらず不満そうな顔をしながらも、
「まあ、これでもないよりはマシだけど…」
なんて言って、渋々引っ込んでいった。

第5話　新入り

三ヶ月目。

もうそろそろ年末。っていっても、カレンダーがあるわけじゃないから、所詮何となくだ。別に律儀に一日、一日、俺が数えていたわけでもない。そろそろ十二月末ぐらいだろうと思っているに過ぎないが、まあ、まず間違ってはいまい。俺の体内時計は完璧だ。

しかしながら、よくぞまあ、これだけ長い間、こんな何もない世界で生き永らえてきたものだ。はっきり言ってサバイバル。もしも、俺一人だけこんな世界に辿り着いていたら、今頃は飢え死にしているか、さもなくば発狂して自殺していたかもしれない。

それにしても今頃、故郷の皆は、唐突にいなくなった俺たちのことをどう思っているだろう？　懸命に捜索でもしているのかな？　よもや喜んでいたりはしまいな。厄介者が消えた、なんて言って、シャンパンを開けているようだったら、俺はどうすりゃいい。

まあ、そんなこともあるまい。普通に考えて、親や兄弟たちは、あるいは友人たちは必死になって俺の行方を捜すべく方々を駆けずり回っているに違いない。そうだと思いたい。思わせてくれ！

俺はこの世界が好きだ。ロマンがある。スリルもある。平凡の中からは感じることすらできなかった生き甲斐のようなものも感じる。けれど、見つけてくれるなら、それはそれで構わなかった。故郷に対する愛着の念も忘れちゃいないからな。ただ、見つけ出すことが出来るのか？　はっきり言って、俺たちだって、ここの場所が分からないのだ。地球のどこかだろう、なんて大雑把なことは分かるけれど、それだけ。何の意味もない。

村のほうは随分と完成に近づいてきた。…と、俺が勝手に思っているだけなのかもしれないが、とにかく出来上がりつつある。相沢市長はまだまだ気に入った風もなく、ああしろ、こうしろといちいち五月蝿かった。なら、自分で勝手にやれ！　俺は疲れた。

相沢市長はこの島を、大和島と命名し、ついでに、この、なんだかよく分からない、ログハウスを連ねただけの村を新大和市と名づけていた。けれど、その『新大和市』は、海岸線からは少し離れた内陸部にあるので、万一、救助船なんかが近くを通りかかった際には連絡できるよう、海岸線に監視台を設置しておくことになった。

監視役は二人一組でローテーション。今日は俺と後藤のペアだった。副市長兼探索隊長だの、出納長なんて言ってみても、相沢市長から見れば、所詮雑用係の一人に過ぎないわけで、まあ、俺たちは幹部らしからぬことも散々させられてきたわけだが…。ま、嫌じゃない。どうせ、幹部然として偉そうにしているなんて、俺たちには…、特に俺には出来そうもない。

「なぁ、救助船なんてくると思うか？」

ふと、後藤がそんな風に尋ねてきたので、俺は少しばかり驚いた。

「来んじゃね」

来ようが来まいが、俺にとっちゃどうでもいい…、なんて本音はちゃっかりと押し隠しながら、淡々と答えている。ま、いずれにしても来ないだろう。俺は、心の中でニタニタと笑っていた。

「俺さ、来なくてもいいんじゃねぇか、なんて思ってるんだ」

と、後藤が言い出したので、俺はほぉと少し驚き、そして心の中で相槌を打った。

「考えてみろよ、楽しいだろ、今！　別に食べ物に困ってるわけじゃねぇ。水だってある。ま、多少不便だが…。けど、村を造り、島を切り開いて、俺たちの国を作ってる。国づくりなんて、小説だけの話かと思ってたのに、現に俺たちは今、それをやってる」

考え方は、どこまでも俺と一緒らしい。さすがは後藤！　いい奴だ。

ぽくりと木の実を頬張りながら、俺は少々いろんなことを考えてみた。このまま、この世界に取り残されたまま、一生を終えるのか。あるいは救助船に発見されて、昔の平凡に戻るのか。どっちがいい

っていわれたら、そりゃ、この世界に取り残されたほうがいいに決まっている。ここには、平凡に日々を生きていた頃には感じられなかったスリルがある。
「ま、俺もお前に同感だ！　けど、あんまし公言しないほうがいいな。帰りたいって思ってる奴だってたんまりいるだろうさ。もし俺たちがこんなこと考えてるってしれたら、そいつら怒るぜ、きっと」
そんな俺の言葉に、後藤は「ははは」とけらけら笑うと、
「お前らしいな。相変わらず、石橋を叩いても、渡らんほどに慎重な奴だ」
幼き頃からの幼馴染たる彼らしく、俺の事は百も承知らしい。そうさ。俺は慎重なんだ。石橋を叩いても叩いても、なお渡らぬ男。そうさ。俺はどこまでも慎重なのさ。

救助船が来る…、なんてことは、ほとんど夢想、妄想、夢物語に近い話だと思っていたのだが、何のことはない。俺たちが監視番をしていた昼頃、救助船かどうかは定かではないが、なにやらどでかい船が、ずっしりのっしりと、この島めがけて飛び掛ってきた。
『こちら監視台！　大型船接近中！　どうぞ』
さながら昔の通信兵のように、トランシーバーを手に、新大和市の相沢市長の下に連絡を行った。
『大型船？　規模は？』
すかさず相沢から返信が入る。後藤が双眼鏡を手に、ジッとそれを眺め、
「何か大型フェリーのようだ。速度は…、結構速い」
と言うので、俺はそのまま相沢に通信した。
『フェリーだと？　とりあえず、俺もそっちへ行く。監視を怠るな』
言われるまでもなく、離れる気はない。俺はトランシーバーを置くと、双眼鏡を手にとり、眺めてみた。
確かにでかい。そして速い。
っていうか、明らかに速すぎる。今から減速しても遅すぎるんじ

ゃないか？　もしかすると、島に激突する、なんて最悪なシナリオも考えられるわけで…。

そんな風に不安がっていると、そうした不安は、全く的中してしまった。

ドォォォォォォン。

まるで地震かと思うぐらいな轟音と地響きをあげて、フェリーは砂浜に乗り上げ、座礁した。いったい、何がどうなっているのだ？　っていうか、運転手は何をしている？　こんな下手な接岸の仕方があるだろうか。

すると、フェリー甲板より、人々がひょっこりと顔を出して、

「ここはどこだ？」

なんて、至極当たり前のことを呟きながら、呆然と立ち尽くしていた。そして、俺たちのことが目に入ったらしい。

「ここは、どこですか？」

ひときわ大きな声を張り上げ、大型フェリーの下で小さくなっている俺たちに向かって尋ねている。だから、俺としては、当然のことを答えてやるしかなかった。「無人島だ！」ってね。

フェリーの乗員乗客数は、予想通り半端じゃない数いるらしかった。副船長からの報告によると、乗員乗客五百名らしい。…いや、これだけの規模のフェリーにしては、少ない気もした。やっぱ、今は皆、フェリーなんて乗らないのかな？　そういや、俺だって大型フェリーに乗った記憶はほとんどない。なんて考えながら、それでもいきなり五百人なんて多すぎる。俺たち三十人と合わせて、五百三十人もの人間が、この島にいることになるのだ。

フェリーの乗員たちは、ここが無人島だって分かったとき、大いに青ざめ、絶句していた。そりゃ、そうだろう。必死になって海図を見、確認していたが、結局確認できなかったらしい。当然だ。ここは地図にも載らぬ、辺鄙な無人島なのだ。

フェリーの通信装置その他諸々は一切壊れていた。なぜか、理由

は不明。船員たちは皆、困ったような顔をして、
「なぜか途中でいかれたんだ。そのおかげで船も操縦不能になって、何がなにやらさっぱりだよ」
と言っていた。

しばらくして、相沢が数人の側近を伴ってやってきた。
相変わらず偉そうにしている。俺は市長だ！　なんて日頃威張り散らしている男だ。困惑の色を隠しきれぬ乗員乗客五百人の群れを見ても、なんら臆することなく、船長の下に歩み寄ると、
「ちなみに、この船に工具箱とか、食料とか、どれだけある？」
なんて聞き出し、以後しばらく、船長となにやらひそひそと密談を交わしていたようだった。
それが終わると、彼は何を思ったか、唐突に部下を船内に走らせ、重要そうな全てを片っ端から差し押さえてしまった。その上で、
「君たちも思いもよらぬところに漂着し、お困りであろう。俺たちも始めはそうだった。だが、俺たちには三ヶ月近い経験ってのがある。もしよければ、君たちには我が『新大和市』の市民になっていただき、君たちの生活についてはある程度保証しよう！」
と、高らかに言ってのけたのだった。

以後はまた開発と建設の日々である。
けれど、今度は五百人以上の人手がある。…正確には、五百四十六人だった。元からいた市民三十人に加え、乗員乗客が五百十六人である。
だだっ広いと思われた野原だけじゃ、五百人を超える人数を収容するには明らかに足りないので、相沢市長の号令の下、次から次へと片っ端から木々をなぎ倒し、土地を広げていった。無論、なぎ倒した木々は木材に加工し、その上で家の建設材料に充てていった。
町らしくなった。
道も出来、公衆浴場なんてものも出来上がった。まあ、大きめな

穴を掘って、床には平ぺったくした木板を張り、熱くした湯を注ぐだけの簡単な代物だが、お粗末なドラム缶風呂に辟易とした女性陣からは、えらく好評だった。無論、時間と労力だけはやたらとかかったが…。

そして、三月になった頃。春先だ。桜の木がそろそろ満開に美しき花を咲かそうかという頃、相沢市長のお屋敷が完成した。相変わらず木材を組み立てただけの簡易版ログハウスもどきだが、その贅沢さ、立派さ、巨大さは、他のそれとは比べ物にならない。

だから、

「これぞ市長に相応しいものだ」

なんて嬉しそうに騒いでいる相沢市長を見て、俺は、困ったように溜息を吐いた。

第6話　暴君

四月ぐらい？　春なんだから、それぐらいだろう。
俺の体内時計も随分といい加減である。けれど、桜は満開。気持ちよいほどの春日和を謳歌している、ここは大和島であった。
桜がある。ってのは、俺にとって、大きな驚きであったりした。というより、いったいここはどこなんだ？　漂着した始めのころは、熱帯地方に浮かぶ島なのかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。何しろ暑くないのだ。スコールのような土砂降りも、半年以上に渡り生活していても未だかつて経験したことがない。
とにかく不思議な島だって事は確かだ。いずれ、この島の全容解明に力を注ぐのも悪くないかもしれない。なにやら面白いことが、奇想天外な事実か何かが分かるかもしれない。

ここ、新大和市では、相沢市長様の力が強くなりまして、なにやら王様にでもなったかのように、市役所と号する邸宅の中で、偉そうにふんぞり返っていた。
人口総数は六百人に迫る勢いで、若干増えている。というのも一ヶ月ほど前の大型フェリー漂着事件に続いて、今度はセスナ機が二、三機ほど、この島に不時着したからである。奇跡的に死者はない。というわけで、めでたく三機に乗っていた乗員三十人ほどが、新たな住民に加わったのだった。
もしかすると、この島は難破船、あるいは難破飛行機が集まるメッカなのかもしれない。そういうものを悉くかき集める、さながらブラックホールのような力を持っているのかもしれない。そうでなくば、この半年間で、六百人が、こんな辺鄙な島に辿り着くだろうか。兎にも角にも、不思議な島である。

いや、そんなことはどうでもよいのだ。どうでもいい？　いや、

どうでもよくはない。けれど、日増しに力を強めていく相沢修平の暴君ぶりに比べれば、どうでもよい話だった。

相沢は暴君となった。しかも、実に合法的に。

それは二週間ほど前のこと。六百人近くにまで膨れ上がった住民たちを管理し、統御し、安全かつ文明的な生活を維持するには、法律が必要なのだと言って、彼は誰に相談するでもなく、自分で決めた法律を、自分の判断で勝手に公布してしまった。

新大和市基本法。

べたな名前だ。

いや、相沢の命名センスなんて、この際どうだっていいのだ。要は中身だ。…確かに俺だって、こんだけ膨れ上がった人間を纏めるには、ルールの一つや二つはいるだろうと思っていた。あれは駄目、これはいい。明確に定めておかないと、人間って奴は、必ず駄目になる。些細なことでいがみ合って、対立し、分裂して、しまいには戦争になる。

ルールを作る。そう相沢が切り出したとき、俺は、そして幹部に列しているテニス部員全員が異議を挟まなかった。そうすべきだと、誰もが思っていたからだ。

けれど、彼は誰に諮るでもなく、勝手に決めてきたルールを、法律だと言って勝手に公布し、守らなければ容赦なく罰すると言い出した。基本法の第三条にこうある。

基本法並びに条例に違反した者は、厳重な罰を受ける。

ここで言う罰とは、とりあえず厳しい順に上、中、下と分かれていて、上は鞭打ち二十発の上に三ヶ月から一ヶ月間の投獄。中は鞭打ちなしで、三ヶ月から一ヶ月間の投獄。下は一ヶ月以下の投獄らしい。しかし、特上ってのが他にあり、これは、市長の判断に任す

というひどく曖昧なものだった。
そのほか、市民軍や市民警察なんてものが結成されて、彼らが基本法並びに条例の徹底を図るのだという。言わずもがなではあるが、市民軍と市民警察の頂点に立っているのは、相沢修平大市長様であった。
えぇと、構成員は、市民軍が五十人で、市民警察が三十人。占めて八十人。全人口の一割以上が軍、警察関係者…。どんな国だ。
後、条例って言うのは、基本法第二条に定められた、いわゆる政令みたいなもんらしい。第二条にはこうある。

市長は基本法の範囲内で条例を定め、公布することができる。

基本法ってのが憲法で、条例が普通の法律だと言えば分かりやすいかもしれない。いずれにしても、制定権も公布権も全部市長に集中しているなら、もはや独裁以外の何者でもあるまい。議会があるわけじゃないから、市長の立法権を阻止する手段なんてどこにもない。
ちなみに、第一条並びに第四条、第五条にはこうあった。

第一条　市長は住民の選挙によって選ばれ、任期五年、再選制限なし。
第四条　違反者への罰則の軽重は市長の裁量に拠るべきこと。
第五条　市民軍、市民警察を組織し、基本法並びに条例の徹底を図るべきこと。なお、市民軍、市民警察の統帥権は市長が掌握すべきこと。

簡単に言ってしまえば、第二次大戦前のドイツで、ナチ党を率いたアドルフ・ヒットラーが制定させた全権委任法のようなものであった。

市長が選挙で選ばれ、任期五年、再選制限なし…、云々はまあよい。普通だ。否定する理由はない。だが、基本法や条例の制定権（改定権も）は市長にあり、違反者への処罰権も市長にあり、挙句、軍や警察までも市長の指揮下にあるという。ありえない。

要は、相沢修平大先生は、モンテスキュー以来、民主主義の根幹になっている三権分立理論に真っ向から喧嘩を仕掛けたいのだろう。行政権も立法権も司法権も一手に握った者。それを人は、通常独裁者と呼ぶ。

はてさて、どうしたものかと、俺は悩んだ。いや、俺だって反論した。俺自身の名誉のために付け加えておくと、俺は必死になって反論したのだ。しかし、聞くような相沢じゃない。それに、彼はいつの間にか、数十人の忠実なる部下を従えていて、逆らえば容赦しないと言わんばかりの殺気を漲らせていたから、俺としては、それ以上反論するわけにはいかなかった。

で、結局、俺は市民軍大佐の称号と、副司令なんて妙な役職を与えられることになった。副市長兼市民軍副司令？　妙なもんだ。

ちなみに、後藤大輔は市民警察副署長となった。その他のテニス部に所属していた十一人と、俺と同じ高校に通ってた二人の友人たちは、揃って新設された市民軍か、市民警察の幹部に列していた。相沢にとって、俺たちはやはり依然として信頼できる、使い勝手のよい手駒なのだろう。

また、妙に役職好きな相沢市長様は、市長のほかに、市民軍元帥、市民軍上級大将、市民軍最高司令官、市民警察署長なんて地位を新設し、全部兼務した。ご自分で定めた基本法に、軍も警察も市長の指揮下に入るって事にしたんだから、泰然自若としていればよいものを、彼はいろんな地位を身に纏うことで、自分の地位をさらに磐

石にしたつもりでいたのだった。ま、それだけ自信がないのだろう。いつも大いに威張り散らして、神仏だって踏みつけていきそうな、天上天下唯我独尊を地で行く相沢修平の弱味を垣間見たようで、俺は少し面白かった。

とにかく、全権を合法的に握ってしまった相沢修平市長は、もうやりたい放題である。

それなりに町らしくなった新大和市には、市民軍の憲兵部隊、警官隊が毎日のように徘徊して、法律・条例違反者がいないか、いちいち目を光らせるようになった。如何に治安を守るためといっても、これでは明らかに窮屈だ。

しかし俺は黙って見守っている。いや、そうしたかった。けれど、実際そういうわけにもいかなかった。

何しろ苦情は絶えず俺の下にやってくるのだ。はじめのうちは、俺の知ったことじゃない。俺は副市長兼市民軍副司令であって、相沢市長のスポークスマンでも、苦情受付係でもないのだ。文句があるなら、独裁者気取りの市長様にじかに言えというのだ。なんて思っていた。けれど、つくづく思う。俺って、お人よしだなって。

「先生、やりすぎですよ」

言わなくてもいい。言ったって仕方ないだろ。そうは思うのだが、口から出てくるのは、正反対の言葉ばかりだった。人から頼まれると、断りきれない性格を、このときほど呪ったことはない。よく言えば面倒見がいい。悪く言えば、ただのお人よし。

「皆、先生の定めた法律に違反したりはしませんよ。それなのに、監視みたいな物騒な真似をして…。これじゃ窮屈すぎます」

あーあ。俺は何を言ってんだろう。

相沢市長は面白くなさそうな顔をして、俺をぎろりと睨んでいる。反論されることが、何より嫌いな人なのだ。典型的なワンマン。周りをイエスマンで固めなければ気がすまないのである。

「不満か？　不満なら、この町から出て行って構わんぞ」

相沢は困るといつもこう言って突き放す。彼自慢の伝家の宝刀らしい。けれど、その切れ味はいつも抜群だ。毎日手入れでもしているのだろうか。

だから俺は困りきって、仕方なく何も言わずに退出した。あーあ。これじゃ、全く独裁者だ。無駄に贅沢で、大きな市長屋敷を眺めながら、俺は何度目になるかしれぬ溜息を吐いて、とぼとぼと去っていった。

第7話　サル合戦

おサル様が人間並みに知能を持っていた。なんて与太話を信じるほど、俺も子供じゃない。つもりなんだが、どうやら、この島のおサル様は、人間ほどではないにせよ、高度な知能を持って君臨しているらしかった。

とにかく、いろんな事情が重なった挙句、知能を持ち、さらに獰猛で、圧倒的な戦闘力を誇っているサル軍団と、出来立てほやほやの市民軍が激突する破目となったのは、七月も終わって、八月の空が、天高く広がっていた頃のことだった。

勝てるわけねぇ。って思いたくなるぐらい両軍の戦力格差は歴然としていたわけだが、とりあえず、市民軍及び市民警察の合同作戦本部には、俺の他に、後藤大輔・警察副署長、佐川新平・市民軍北部方面隊隊長（中佐）、遠藤伸介・南部方面隊隊長（中佐）、佐藤高次・東部方面隊隊長（中佐）、小林太郎・西部方面隊隊長（中佐）はじめ、幹部に列している十五少年（少女含む）と、軍医総監の大原宗雄氏（大佐）、総司令付作戦参謀の古谷亜子さんなど数人の大人がいて、ああでもない、こうでもないと、議論を重ねていた。

まあ、まず冷静にならんといかん。相手はサルだ。何匹いるのか、ドンだけ強いのか、さっぱし分からん。少なくとも、動物園にいるサルたちを連想し、彼らの力を基準にしちゃ、俺たちの敗北は決定的だろう。少なくともその二倍、いや三倍は強いと見るべきだ。

ちなみにこちらの戦力は、市民軍が六十人で、警察隊が四十人。占めて百人。かつてより増やしたが、けれど、俄仕込みの、お世辞にも精鋭とは言い難い寄せ集めの雑軍だ。

勝てるわけねぇ。

再び俺は心の中に叫んでみる。

ちなみに、総大将は俺だ。俺？　そう、俺なのだ。相沢市長はと

いうと、難しそうな戦いにすっかり匙を投げてしまって、
「俺には仕事があるから、とりあえずお前に全部任す」
と言って、逃げてしまった。これじゃ、何のための市民軍総司令官なのかさっぱり分からん。

俺だって戦は初めて。っていうか、一年前まで普通の高校生だった男に戦争経験なんてあるわけねぇだろ。そりゃ、俺は歴史小説が大好きで、戦争映画は欠かさず見るほどのマニアであったりするが、映画と現実は全く違うわけで、実際に軍を指揮して、敵と命がけの戦争をするなんてこと、できるわけもなかった。
代わってくれ！　俺は指揮権とか、そんな小さいことに拘らん。いっそ、市民軍副司令とかいう地位も譲ってやる。代わってくれ。しかしながら、こういう難局にぶち当たると、決まって「俺がやる」なんて手を上げる殊勝な奴はいないのだった。皆、度胸がないのである。
だから俺がやる羽目になる。ほとほと、お人よしの上に、無駄に責任感が強い俺の性格が嫌になる。
「サルたちは、少なく見積もって二百匹はいるでしょう」
親友の後藤大輔は、本物の上官に話しかけるかのような丁寧語を駆使して、そう言った。
「しかも、一匹辺りの力は、我々の比ではない。こちらが武器を使えば、ある程度太刀打ちできるかもしれませんが、武器と言っても、即席の弓矢と、警棒、猟銃が五丁ほど。余り頼りにはなりませんね。他には照明弾とか、お飾り用の日本刀が三本ほどありますが、はてさてどうしたものでしょう」
後藤は絶えず俺を見て、俺の意思を確認しようとする。総大将はお前だ！　って言わんばかりの顔に、俺は困ったように目を背けた。
相沢市長が全指揮権を放棄し、市長御殿に引篭もった挙句、大型フェリー辺りからくすねて来たワインで自棄酒をかっくらっている

とき、俺は後藤とともに、善後策を討議していた。
俺と後藤はともに、総大将たる相沢の出馬を望んでいたのだ。とにかく大将が前線に出向かずして、戦に勝てるわけがない。俺たちは、大坂夏の陣において、豊臣秀頼の出馬を待ち望んだ真田幸村・大助親子のような心境で、相沢の下に赴いたのだが、けんもほろろに断られ、挙句、
「お前がやれ！」
なんて命令を受け取って撤退せざるを得なくなった。
だから二人で討議したのである。
「こうなったら、お前が総大将で危機を乗り切るしかない」
後藤は至極淡々と言って、俺の肩をぽんと叩いた。
「俺が総大将？　やめてくれよ」
形は市民軍副司令。だが、形だけだ。実際に副司令的役割を果たせといわれても困る。
だが後藤の目は、有無を言わさず、俺にやれと言っているようだった。それ以外、道はない。そういわんばかりの顔をしている。
「これから、俺はお前を新井とは呼ばない。閣下と呼ぶ」
「か、閣下？」
「これ以後、俺はお前に語りかける時は、丁寧語を使う。だからお前も俺を呼びつけるときは、横柄に呼びつけろ！」
言いたいことをひとしきり言い終えたらしい後藤大輔は、俺の反論など一切受け付けることなく、ただ、
「閣下、さあ、作戦会議が始まります。お急ぎを！」
なんて、歯の浮くような台詞を淡々と吐き、そしてにっこりと微笑んでいた。

ってな事情があったりする。
後藤が俺を『閣下』と呼び、やたらと丁寧語で呼ぶので、皆もいつしか俺を『閣下』と呼ぶか、あるいは『副司令』と呼び、少なくとも『新井』と呼びつけることはなくなった。言葉遣いも丁寧にな

っていた。大人たちも、自分が総大将はやりたくないものだから、率先して、俺を『閣下』『閣下』と呼んでいた。そう呼ぶことで、俺に全責任を押し付けるつもりらしい。

「閣下、作戦があります」

作戦参謀の古谷亜子が、その可愛らしい顔を真面目色に染めて、キッと俺を睨み付けた。

「作戦？」

俺は随分と素っ頓狂な顔をしていたんだろうと思う。我ながら恥ずかしい。しかし古谷さんは全く気にする風もなく、自らの作戦とやらを堂々と披露していった。つい一年前まで客室乗務員をなさっておられたうら若き美女も、たった一年で、女自衛官と言われてもそれほど不思議ではないぐらいの存在感と迫力を持つようになっていた。そこに驚きを抱きつつ、いや、考えてみれば俺も一年前まではただの高校生だったのだと思い直し、改めて一年という月日の重さを感じずにはいられなかった。

作戦ってのは実に簡単単純明快で、サルたちを町の中に誘きだし、その上で一網打尽にするというものだった。

古谷さんが言うには、

「森林の中では、どうしても地の利のあるサルたちが有利です。なら、サルたちをそこから引き剥がし、我々にとって有利な場所に誘き出せばよいのです」

なるほどと、俺は情けなくなるほど素直に頷いていた。

問題は、如何にしておびき寄せるか、であるが、これも古谷さん曰く、「囮を使えばいい」らしい。

まあ、これ以上の名案が出てこないなら、考えていても仕方がない。基本方針はこれで行くとして、後は詳細を詰めないといけない。どうやってサルたちを町に誘きだすのか。囮を使うにしても、囮ってのは非常に難しい役どころである。その上、町に誘きだした以上、市街戦は覚悟しなきゃいかんが、町が焦土と化すようなことになっ

てはたまらない。
いろいろと考え、そして最終的には総大将たる俺がゴーサインを出した。作戦は明日決行！

サルたちはおよそ三百匹ほどで、森の中に勢揃いしていた。
どうやら彼らは自分たちの縄張りを荒らす俺たちを、この際、一網打尽にするつもりで、その総力を大結集させていたらしい。即ち、サルと俺たちの全面戦争。なんとも滑稽だが、笑ってなどいられない。命と命を賭けた、これは正真正銘の実戦なのだ。
囮部隊は俺が率いている。これは、俺が志願した。
ほとほと、俺って変な奴らしい。妙なところで責任感が強いのだ。今回も、一番大変な役なら、総大将がやるのが基本だと、誰も求めたりしないのに、自分から名乗りを上げて、囮部隊の指揮官の座を掴んでいた。
これは歴史小説、戦争映画マニアたる俺の持論だが、大将とは命を張るものだ。命を賭けぬ大将に、大将たる資格はない。古代マケドニアのアレクサンドロスなどは、自ら先頭に立ってペルシャ軍と戦い、そして奇跡的勝利を掴んだ。織田信長だって、桶狭間のときは自ら今川軍に斬りこんだ。源義経だって、木曾義仲だって、皆、全軍の先頭に立って戦い、死に物狂いで勝利をもぎ取ったのだ。
兵士たちが実戦で命のやり取りをしている間、大将がぬくぬくと安全圏で惰眠を貪っていたら、兵たちの気持ちはどうだろう。そんな奴の下で働けるかって不満を抱き、士気は下がる。俺だったら、そんな奴の言うことなんて聞かない。
「総大将が実戦に出向くなんて、戦死したらどうするんです」
なんて諫言もないわけじゃなかった。特に後藤あたりは、大将が前線に出向くなんてとんでもないと、言わんばかりの顔をしていた。しかし俺は聞かなかった。なんせ、俺は総大将だ。俺が出向くといったら出向くのだ。

囮部隊を率いてサルたちの縄張りに出向く。
何やら殺気が漲っていた。怖くないといえばウソになる。っていうか、滅茶苦茶怖かった。許されるなら、一目散に逃げ出したい。しかしそんなことが許されるはずもなく、俺はゆっくりと足を進めていた。
しばらくして…。
突如、キィィィィって甲高い叫び声が聞こえてきた。
サルだ。
何匹いるんだって首を傾げたくなるぐらいいっぱいいた。あちこちから、キィィィ、キィィィと喊声が響き渡っていた。
「や、矢を放て！」
俺は作戦通りにそう命じ、そして俺自身も弓を構えて、別段狙いなど定めずに、ぶっ放した。
ピュンピュンピュンピュン。
分かりやすい音が響く。そのうちの何本かは外れ、そして何本かは見事にサルに命中したらしい。キャンッ、なんて可愛らしい悲鳴を張り上げていた。
それを見て、俺は一息つく。そして、
「撤退！　撤退！」
って叫ぶのだ。
兵たちは、それに続く。囮部隊の兵は十五人。余り多くても駄目、少なくても駄目。十五人ぐらいが妥当な数だろうというので、市民軍、警察の中で強そうな精鋭を抽出して編成した。途中、待ち構えていたサルの二個小隊が俺たちの脱走を阻止しようと襲い掛かってきたが、辛うじて突破すると、一目散に町目指して駆けつづけた。
サルたちは案の定追いかけてくる。逃げた敵を逃がすまじと、必死になって追撃してきた。
思う壺だ。
俺は必死になって走り、そして町に着いた。どうやらサルたちには追いつかれなかったらしい。

サルたちが町に殺到した。
彼らは基本的に何もないところで、うろうろと歩き回っている。人間を探しているのだろうが、生憎そこには誰もいない。
なんて思っていると…。

ダァァァァァン。

一発の銃声が轟き、サルたちは慌てだした。
猟銃の音だ。そして、止めのもう一発。ダァァァァァン。
俺たちにとっちゃ聞きなれた音（映画の中とかで）。しかし、外界から完全に隔離され、人間と接したことすらないサルたちには、初めて聞く大轟音なのだ。さながら、火縄銃をぶら下げて種子島に漂着したポルトガル人のような気分で、俺は驚き慌てるサルたちを見つめていた。
「矢を放て！」
副官の後藤大輔の大号令が響き渡った。
すると、無数の矢が宙を舞う。あちこちに隠れていた、我らが弓兵が、空に向かって放った矢は、混乱の極みにあったサルたちに直撃した。
そして、混乱が極限に達した頃合を見計らい、総大将たる俺は側に控えていた側近の平林めぐみに目配せした。彼女は軽く頷くと、マッチに火をつけ、予め用意してあった枯葉の山に灯した。もくもくと煙が上がり、それが合図になって、あちこちに潜んでいた歩兵が、ドッと町めがけて押し寄せた。

勝ったな！
俺はそう思い、フゥと溜息を吐いた。さっき森の中を全力疾走した際に出来た傷からは、じわりと赤い血が滲み出ていた。ちょっと痛い。

任務を終えた平林が俺の下にやってきて、
「傷ね。手当てしないと」
なんて言って、ポケットにしまってあった消毒液と絆創膏を取り出し、躊躇う俺を無視して、強引に簡易治療を施した。

勝った。戦果としては、サル十匹を殺害、四十匹以上に瀕死の重傷を負わせたほか、捕虜三十匹。
大勝利なわけだが、しかし、凄惨な戦いって奴を前にして、俺はちっとも喜べなかった。もしも負けていたら、結果は逆転していたろう。俺だって、あそこでひっそりと横たわっているサルのようになっていたかもしれないのだ。
その後、サルたちとの間に停戦協定が結ばれた。頭のよいサルで助かる。言葉こそ通じないが、ある程度のジェスチャーで意思疎通は可能らしかった。
結果、俺たちは無闇に森を焼いたり、伐ったりしない。それで、サルたちも俺たちを無闇に攻撃することはないそうだ。考えてみれば、このところの俺たちは、農業用地を確保すべく、片っ端から森林を焼き払っていたし、施設を作るには木材が必要だといって、やはり片っ端から木々をなぎ倒していた。文明社会を作るには不可欠な自然破壊を、案外大規模に推進していたのである。この島の自然界に君臨するサルたちが怒るのも無理はない。

ただ、やっぱりこの島は不思議な島だと、改めて思わずにはいられなかった。
黄色と赤色をしたペンギンや、青い色をした鹿、赤色の鳩。極めつけは、やたらと賢すぎるサルだ。
なんかある。
俺の中で渦巻いていた疑問は、確信に変わりつつあった。しかし、そのなんかが、いったい何なのかはさっぱり分からなかった。ただ、何かある。必ず、この謎は解明してやるぞと思いながら、俺は疲れ

た体を癒すべく、自宅となっているちんけなログハウスのベットに寝転んだ。

第8話　遠征（前編）

変な島だ、島だとは思っていたけれど、こうも変な島だと、俺としては、一刻も早くその謎を解き明かしたい気分になった。

どうやらサルばかりではないらしいのだ。まだ、沿岸部しか開発していない俺たちであるが、内陸部へ行けば行くほど奇妙な生物、世界が広がっているらしい。ってなことをサルたちから教えられたとき、俺は妙な気分になった。

全くサルと話しているとは、何と非現実的（ファンタジック）な世界であることよ。サルはサルらしく、木にでも登って、バナナでも喰らっていればよいのだ。喋る能力は、同じ哺乳類でも、ヒトにのみ備わっていればいい。霊長類は、ヒトに近い存在ではあるが、ヒトじゃないんだからな。

このところ、その威信に翳りが見えてきた感のある相沢修平市長は、地の利に通じたサルたちと同盟関係を結んだことをよいことに、自分たちの勢力範囲をさらに広げようと、奥地へ、奥地へと軍を進める計画を立てていた。

ま、要するに対外遠征を強行することで、自分に対する不満を逸らそうというありがちな手法である。実際、先の戦いで、軍を率いることなく引篭もった臆病なリーダーに対する不審の声は大いに高まり、市民の中には、デモ隊を組んで街中を練り歩き、市長退陣のシュプレヒコールを繰り返すというチャレンジャーもいたのだった。無論、そうした人たちは皆、市長直属の親衛隊によって排除され、弾圧された。ご愁傷様である。

「…やっぱ、新井さんが市長になるべきだろう」

佐川新平は、元テニス部員。けれど、今では俺のシンパになっちまったらしい。さっきからずっと、相沢退陣、俺の登板を主張して

いる。一年前までは、『新井』と呼んでいた男が、今や『新井さん』になっている。公的な場では、もっと大仰に『新井閣下』『新井先生』だ。世の中、変われば変わるもんさ。

俺の下には、同じ高校に通っていたという誼で、十五人の少年少女が集まっている。どれも新大和市内で、中核を成している面子だ。その筆頭に俺がいて、その隣には後藤がいる。なんでかね。俺は別にトップに立ちたいわけじゃない。ないのに、皆、俺をトップと崇めてくる。俺ってそんなに大そうなことでもしたのかな？

「いや、とりあえず基本法には市長は五年ってことになっている。相沢さんが辞めない限り、俺たちに辞めさせる方法はないよ」

全く、人間ってのはどうしてこうバカなんだろうな。サルのほうがよっぽど利口だ。仲間同士でいがみ合って、対立して…。もし俺が相沢を倒し、市長の座を目指す、なんて言ったら、俺の勢力と相沢の勢力で、新大和市は真っ二つじゃないか。せっかく軌道に乗りつつある町を、自分からぶっ壊してどうするんだ。

「けどさ、このまんま相沢先生が市長やってちゃ、この町は崩壊するぜ。新井さんだって聞いたろ！　住民たちが市長退陣のシュプレヒコールをあげてんの」

佐川は相変わらずしつこく俺に迫ってくる。どうも過激な男だ。こんなところを親衛隊に見つかったらどうするつもりなんだ。あの疑り深い暴君が、どこにスパイを差し向けているか分からん以上、軽挙妄動は厳に慎むべきなのだ。

俺はとりあえず過激な友人たちを宥めておくと、これからどうすべきなのかということを真剣に考えてみた。

相沢修平の権威が低下し、それを挽回すべく、彼がいろいろ手を打ち始めたことは、俺だって知ってる。ってか、俺を警戒しているのか、最近、俺を見る目が随分と冷たい気がする。冷たいだけならまだしも、殺気が篭っているような気がした。刺客でも送り込まれたらたまらんな。

それはそうと、相沢としては、威信回復策のつもりだったんだろうが、俺たちの失笑を買った政策が一つある。即ち、大和共和国の創設と、市長たる自身の大統領就任だ。その上で、大統領親衛隊（シークレットサービス）や情報機関ＹＣＩＡなる実力組織を作り上げ、逆らう奴らには、これまで以上の弾圧を加えるようになった。

九月に入り、相沢大統領肝煎りの対外遠征が本格化した。

総大将は俺！

また俺かよ…。

ま、相沢にしてみりゃ、何かと五月蝿く、厄介な俺を体よくお払い箱にするには、遠征軍の司令官を任すのが一番手っ取り早かったんだろう。戦死してくれりゃ儲けもの。なんて思ってんじゃないかな。ふん、そう簡単に死んでたまるか。

けど、元々この島の秘密が知りたいとかねがね思っていたぐらいだから、遠征って名の探索に参加できることは悪くなかった。しかも俺が大将だ。責任はあるけど、俺の行きたいところに行ける。

探索隊…、もとい遠征軍メンバーは総勢六十。先導してくれるサルたちが五匹。俺たちと散々凄絶な戦いをしておきながら、今やこうして仲良くしている。昨日の敵は今日の友。なんて言葉は戦国時代だけのものかと思っていたが、いつの世も共通らしい。

遠征って言ったところで、別に誰かと戦うわけじゃなくて、探索の延長版のようなものだった。この島はどれだけの大きさで、何があって、かつこの島に隠された秘密を探る。本当に無人島なのか？とか、どういう生物がいるのか、ってことも調べるつもりだった。

ここで遠征軍の面子を発表しよう。主だった幹部だけだが…。

大将・俺。副将・後藤。

以下佐川新平、佐藤高次、遠藤伸介、小林太郎、近藤英二、上原勝正、上野浩一郎、江戸川慎三、石田勝也、平林めぐみ、井上愛子、福島夏美、上村はるか。十三名。それぞれ部隊長とか、参謀なんて肩書きを持って従軍している。

要するに同じ高校に通ってた奴らだ。皆、二十歳以下である。そして、このところ相沢大統領閣下様の横暴極まる独裁政治に反発していた人々でもある。ま、俺たちは昔のノリで、相沢に文句をつけたりしていただけなのだが、どうやら暴君が様になってきたらしい大統領閣下様は、そうした諫言すら耳に痛いらしい。俺たちは次第に遠ざけられて、挙句、こうやって遠征軍の幹部って形で、町から放り出されてしまった。

島の奥地に突き進む。

案外いろいろあるらしい。

一日目から、早くも奇妙な動物を見つけた。まあ、ここではあえて挙げまい。二日目には、ゼロ戦を発見した。

「おそらく旧日本軍の戦闘機がここに漂着したんだろう」

って、後藤は言った。世界的に著名なゼロ式戦闘機が、その原型をとどめたまま、そこにあったことは俺にとって大いなる驚きであり、喜びでもあったが、とにかく無視して先へ進む。

三日目には、人が住んでいたろう痕跡を見つけた。けれど、何十年も前のものだ。缶詰の空き缶もあった。ほんの僅かに残った中身が、完全に干乾びて化石のようになっている。

「あの戦闘機の乗員が、墜落しても生きてて、生活したのかもしれないな」

相変わらず後藤はそう言って一人納得している。

三日目は、他に盛大な滝や、それなりに大きな湖を見つけたりして、この島の自然の素晴らしさに感動したりした。

そして四日目。

四日目。俺たちは驚くべきものを見ちまった。

神殿。そう、神殿だ。

なんだこりゃ。そう思い、中に入る。整えられた石が、ピラミッドのような形を作っている。これが自然に出来たものだというなら、

俺は自然の力に感動するね。明らかに人為的に作られたものだ。そうでなくば説明がつかんだろ。例えば、綺麗に直角に切り分けられた石とか。

神殿かどうかは知らない。ただ、何らかの遺跡であることは間違いないようだ。俺たちは、インディジョーンズにでもなったかのような気分で先へ進んだ。

ところどころ、奇妙な絵が描いてある。真っ暗な遺跡内では、松明(まつ)の火も随分と明るく見えた。

「人間、じゃねぇな」

絵を見ると、人間のようで、そうでない。背中には蝙蝠のような羽が生えているし、両腕両足はゴリラのように逞しく、毛むくじゃらだ。しかし、顔は確かに人間なのだ。しかし頭からは角が生えている。

所詮絵だ。しかし奇妙…、ってか不気味。

もしかすると、この島も、今でこそ無人島だが、古代には人が住んでいて、彼らが描いたのかも知れない。詳しいことは分からないが、絵は随分昔に描かれたものらしい。少なくとも数百年は昔だ。

神殿はさらに奥へと繋がっている。

俺たちは先へ進む。

見れば、どこまで行っても、先ほどの絵がずらずらと描かれているようだった。どれも、俺たちを睨み付けているようで、何やら怖かった。

第9話　遠征（中編）

神殿の内部は、もはや迷宮である。とりあえず迷わぬように、俺たち神殿内部探索隊は細心の注意を払っていた。

突然、

「きゃッ！」

なんて、如何にも甲高い悲鳴が上がり、俺の体に誰かが寄りかかってきた。見れば、平林めぐみだ。同じ高校出身。テニス部マネージャー。今では俺の側近ってことで、いつも側にいる。

「なんだよ、臆病だな」

俺は淡々と言い放つと、平林はムッとしたように、

「仕方ないでしょ」

なんて叫んで、プイッとそっぽを向いてしまった。

しばらく、俺たちは先へ先へと進んだ。しかし暗いうえに、右に左、上に下。これでもかってくらいに行ったり来たりするので、もはやどこをどう移動しているのかさっぱり分からなくなった。とりあえず目印は残しているが、本当に帰れるのかどうか、俺は少しばかり不安になった。

それでも先へ進むしかない。戻ろうって主張する奴もいないわけじゃなかったが、俺の中に渦巻く知的好奇心は、ここで引き返すことを容易く認めなかった。この神殿の奥深くに潜入して、この島の様々な謎が解明されるかどうかは分からない。しかし少しは分かるかもしれない。少なくとも、この神殿を作った奴らは、この島に住んでいたのだ。島に関する何らかの情報を残していても不思議ではない。

「帰ろうよ」

平林はさっきからずっとそう言って、隊長たる俺の判断を仰いできた。帰りたきゃ、勝手に帰ればよいのだ…、なんて無責任なこと

は言わない。だからといって、「はい、戻りましょう」と答えるつもりもないのである。こんなところで引き返したら、何のための探索なのかさっぱり分からないではないか。
いずれにしても、ホラー映画や肝試しが嫌いな人にはお勧めしない場所である。これで本当に幽霊かなんかが出てきたら、心臓と目玉が一挙に飛び出して、卒倒してしまいそうだ。俺もホラー映画は余り好きじゃないので、知的好奇心さえ満たすことが出来たら、一目散に撤退するつもりでいた。
すると…。
カラン！
変な音がした。
何だろう。俺の脚にも、それと同時に妙な感触があった。何かを蹴飛ばしてしまったかのような感覚。俺は手に握っている松明（たいまつ）を前方にかざして、何があるのか、確認しようとした。しかしよほど遠くに蹴飛ばしてしまったのか、とりあえず、そこには冷たい灰色をした地面が広がっているだけだった。
「きゃッ」
突然、平林の甲高い悲鳴が響き、直後、彼女は俺の肩に抱きついてきた。
女子に抱きつかれるってのは、結構気持ちいい。…なんてバカ言っている場合じゃない。平林は何を見て驚いたのだ？　俺は彼女が指差す方向、即ち俺自身の足元に眼をやった。
「…」
俺は何と言えばよいのか分からずに立ち止まり、そしてしばらくたってゆっくりとしゃがみこんだ。
そこにあったのは、白骨だ。何年、いや何十年とここにあったのだろう。ばらばらになった、見るも無惨なかつての人間の跡がそこに転がっていた。
「おい、新井さん。これを見ろよ」
遠藤伸介が慌てて駆け寄ってきたかと思うと、彼はその右手に、

錆びてとても使い物にならないと思われる小さな拳銃を持っていた。
言っておくが、俺は拳銃マニアじゃない。が、その拳銃がいったい何と呼ばれているのかは知っていた。
「「二十六年式拳銃」」
奇しくも俺と遠藤の声が重なった。
二十六年式拳銃。
そう。旧日本軍の兵士が常備していた拳銃で、戦前の日本国内でかなり流通したらしい。二・二六事件において、トチ狂った陸軍将校が鈴木貫太郎侍従長（後に首相）を殺害しようとした際に使った拳銃もこれだという。ま、鈴木侍従長の体に数発命中させておきながら、致命傷を与えられなかったのだから、よほど威力が低かったのだろう。今ではアメリカかなんかで、アンティークとして重宝されているらしいが、そんなことはどうでもいい。
要は、この拳銃が旧日本軍のものだとすると、持ち主であろう白骨死体もまた、旧日本軍の関係者である可能性が出てきたというわけである。そこで思い出すべきは、昨日辺りに見つけたゼロ戦だ。この白骨死体様は、ゼロ戦の乗組員と考えて差し支えあるまい。あの位置から、ここまではあまり遠くない。妙な神殿を見つけ、妙に思って入った挙句出られなくなり、かくの如き末路となった。
「おい、ここになんか書いてあるぞ」
佐川新平が己の持つ松明の明かりで照らし出された壁を指差して、そう言った。
「なんだ？」
俺たちは不思議そうな面持ちで彼の下に歩み寄り、そしてそこに記されている文字とやらに目をやった。記されているというより刻まれているといったほうがいい。石の壁の上に、ナイフか何かを使って書いたであろう白い文字が浮かんでいた。
薄れている上に、随分と汚い。何十年もここにあったのだから、無理もないだろう。

『これ以上、進むべからず』

まず、そうあった。以下の文字はなかなか解読できず、しばらく目を下に向けていって、ようやく読めそうな文字にぶつかった。

『この島、奇妙なり。神殿より東へ進むべからず。死あるのみ』

東？　俺たちは西から来て、東に向かっている。要するに、神殿から外に出た場合でも、それ以上先へ行くなという意味なのだろうか。しかし、東側は内陸部で、できればそちらにも行きたい。

他に何か書いてあるのだろうかといろいろ探したが、それ以上は全く読めなかった。他にもいろいろ書いてあったのだろうが、何分数十年間、こんなところに放置されていただけあって、悉くかすれ、全く読めなかった。復元する機械か何かがあれば読めそうだが、少なくとも、こんな辺鄙な島で、そんな高等機械にめぐり合えそうもない。

問題は、これより先に進むか、否かだ。白骨軍人の警告を信じるなら、先に進むべきではないだろう。わざわざ『これ以上、進むべからず』なんて書いてあるんだ。俺だって、知的好奇心を満たすためだけに、部下たる仲間の命を危険に晒す愚は冒さない。駄目というなら行かない。

そのつもりだった。

そうとは知らぬ平林めぐみが、禁断の第一歩を踏み出しちまった。この文字より先に、足を踏み入れてしまったのだ。

その瞬間である。

ガラガラガラッ。

って音がしたかと思うと、途端、ガッシャーンッ。なんて轟音が響き渡った。

「なんだ？」
俺たちは不思議がる。
きぃ、きぃ、きぃと、案内役のサルたちも慌てている。
「壁が出来てるぞ」
青ざめた顔をして、様子を見に行った佐川新平が戻ってくると、俺の顔は極地に聳え立つ壮大な氷の山よりも冷たくなった。
「閉じ込められた」
遠藤が、言わんでもよいことを呆然と呟いている。退路を絶たれた。要するに、閉じ込められたのだ。
この瞬間、俺は何でこの軍人が死んだのか、きらりと分かった。おそらく、この軍人さんも足を踏み入れたのだ。退路を絶たれ、進退窮まり、餓死しちゃったんだろう。ご愁傷様…、なんて他人事のように思っている場合じゃない。今度は俺たちの番なのだ。出口がわかんなきゃ、どの道、俺たちもこの軍人と同じ末路を辿る。後、何十年かして、新たにやってきた来訪者が、何人分かの白骨死体を見て驚いている光景を思い浮かべ、それだけは嫌だと、俺はぶんぶんと頭を振った。

とりあえず、先へ進む。
先と言っても、ほとんど先はない。ほんの少し歩くと、行き止まりにぶつかった。行き止まりには、仏像のようなちっぽけな像が、ちょこんと飾られている。しかし、それはよく見ると仏像ではない。先ほど散々見てきた、あの奇妙な気持ちの悪い絵を立体化したものだった。頭からは角が生え、人間の顔をもち、ゴリラの手足、挙句蝙蝠の羽を持った、異形の像である。
「…この島の古代人は、こんなクソ気持ち悪い像を神と仰いでいたんだな」
ま、人の感性にケチをつけても仕方がないのだが…。こんな気持ちの悪い像でも、古代人にしてみれば尊き神なのだろう。
問題はそんなことじゃない。古代人の神がどんな能力をもってい

て、古代人はどういうことを祈ってきたのか。そんなことも、この際どうだっていい。今は考古学者気分に浸っている場合ではないのだ。俺の個人的趣味のために、命の危機に追いやってしまった仲間たちのことを第一に考えねばならない。どうやってここから脱出するのか。

俺はしばらく考えた後、一番この島のことに精通しているだろう者たちに尋ねてみることにした。しかし、人語は通じないので、落ちていた石ころで地面に絵など描きながら、身振り手振りのジェスチャーで会話せざるを得ないのだが…。

「この神殿を知ってるか」

そう言いながら、俺は何とか彼らにも通じるような表情をして尋ねてやった。どうやら通じるらしい。利口な奴らだ。

答えはＹｅｓ。

「どうやったら出られるか、分かるか？」

これも表情だけで勝負だ。案外通じるらしい。

答えはＹｅｓ。

「教えてくれ！」

これも表情。

サルたちは腕組みながら、しばらくジッと考え込んでいる。その一挙手一投足が、実に人間らしい。知能を持ちすぎたサル。これで人語を喋ったら、間違いなく、新大和市の特別市民に迎え入れられるだろう。

サルたちは数分の会議を経て、俺の要求に応じる決意を固めたようだ。っていうより、何を悩んでいるのか、俺にはさっぱり分からなかった。脱出する術があるなら、出し惜しみせずに教えてくれればよいのに…。なんて思っていたのだが、実際に彼らの案内に従い、その場所に赴くと、その脱出方法とやらが、そう簡単に出来るものではないということを俺たちは改めて思い知らされることになった。

第１０話　遠征（後編）

出口は明らかに小さかった。
サル一匹が通過するには、辛うじて足りるが、人間となると…。十歳以下の子供でもない限りは無理だろう。況や十七歳以上の大人には無理！
しかし、外に待機している面子を呼び出すことぐらいは出来るかもしれない。後藤大輔以下数人が、俺たちの帰還を待っているはずだ。
「おーい」
ま、無駄だろう。実際無駄だった。
どれだけ大声で叫んでも、全く届かない。おそらく後藤たちが待機しているところは、もっと遠くなのだろう。それでも俺たちはしばらく大声を張り上げていたわけだが…。しかし、これほど無意味なこともあるまい。やたら喉を痛め、声を枯らし、体力を使っただけで、俺たちの献身的な努力が報われることはなかった。
ここで少々俺たちはマヌケなことをしていた。ひとしきり大声を張り上げ、全く効果がないことに、揃いも揃ってうんざりとしていたとき、遠藤伸介がこんなことを言った。
「サルたちを伝令にすればいいじゃないか」
ってね。

かくてサルたちを伝令に送り込んで、何分たったろう。俺の体内時計じゃ、一日以上は軽く過ぎている。しかし、サル一匹辛うじて通る分だけ開いている脱出路から見える外の世界は、さっきから余り変わっていなかった。
「本当に脱出できるのかしら」
平林めぐみは、さっきからそんな風に呟いて、不安そうな面持ちを隠そうともしなかった。

「出来るに決まってる」
俺としては、こう答えて皆を安心させるしかないのだが…。肝心の俺自身、本当に脱出できるのか、結構不安であったりした。万一、こんなところに閉じ込められたまま、あの軍人の如き最期を遂げねばならぬのだとしたら…。やだよ！　まだ死にたくない。この世にはいっぱい、腐るくらい未練を残している。
「助かるさ」
それは、平林に対して、というよりは俺自身に言い聞かせるように呟いた言葉である。とにかく、助かるのだと、念仏でも唱えるかのように呟いていなければ、頭の中がどうにかなってしまいそうだった。

とまあ、それからさらに数十分が過ぎた頃、伝令として後藤たちの下に向かっていたサルたちがキィ、キィと騒ぎながら、慌しく戻ってきた。そんな彼らはその右手に一枚の紙を持っていて、そこには後藤が書いたと思われる文字が記されていた。
『壁に、爆薬を仕掛けて吹っ飛ばす。それ以外、俺たちにはお前たちを脱出させようがないが、どうだ？　イエスか、ノーか。この紙に記して、送ってくれ』
実にぶっきら棒な字で書いてある。如何にも後藤らしい。単刀直入で、無駄なことが一切書いてない。
しかし…。爆薬だって？　爆薬っていうと、おそらくは大型フェリーの中になぜか載っていたダイナマイトのことだろう。近頃のフェリーは随分と物騒なものを積んでいるんだなと、感心した記憶がある。
しかしダイナマイトなんかで吹っ飛ばしたら、神殿そのものが崩れ落ちないとも限らない。無論、量を調節すればよいのだろうが、後藤たちがダイナマイトの使い方に精通しているとは思えない。万一、使い方を誤ったりしたら…。壁はほとんど無傷のまま、俺たちと外界を引き続き隔絶し続けるか、あるいは壁のみならず神殿全部

吹っ飛ばして、ついでに神殿の中にいる俺たちをも吹き飛ばしてしまうかもしれない。しかし、今のところそれ以外に方策はないように思えた。
「後藤は、あの壁をダイナマイトで吹っ飛ばすって言ってる。お前たちはどう思う？」
異議があるようだったら、作戦を考え直そう。さすがに、俺一人で決めるのは気が引ける。俺は独裁者じゃないからね。こういうときは民主主義的に多数決だ。まあ、少数派の意見は黙殺する破目となるが…。
「異議なし！」
幸い、異議なしが全員で、皆、ダイナマイトを使った非常脱出方法に全面的な支持を与えてくれた。
めでたく全員一致を見て、俺は後藤に返書を出した。書いた言葉はたった一言。
オーケー。

ドォォォォォォォン。
大地が切り裂かれ、天地がひっくり返っちまうんではないかと思われる大轟音とともに、俺たちを神殿内に閉じ込めていた壁は一瞬のうちに粉々となり、外界と神殿は再び一つの世界に戻った。
懸念された神殿の崩壊は食い止められたようだ。俺たちは、何ということもなく悠々と下界に戻り、なんだか随分と久しぶりのように思える日差しを、その全身で思い切り浴びた。助かったのだという実感がじんじんと体の中に染み渡っていく。
「助かったんだ」
平林なんて、さっきからそう呟いて、がっくりと腰を落としている。
「助かったのか」
遠藤や佐川たちも、どれもへなへなと崩れ落ちて、今にも泣き出しそうな顔をして笑っていた。

「や、とりあえず助かったな」
後藤は、そんな風に言いながら俺の下にやってきた。相変わらず格好良く笑う奴だ。もしも故郷に戻れるようなことがあれば、こいつはモデルか、芸能人にでもなればいい。薬物でもやらない限り、それなりの地位まで出世しそうだ。
とりあえず、俺は、今回の脱出劇において最大級の活躍を示してくれたサルたちにひとしきり感謝の意を表明すると、続いて神殿の中から運び出してきた白骨死体となった元軍人さんを改めて埋葬し、その儚くも必死だったであろう人生を勝手に連想しつつ、頭を下げた。

さて、これからどうすべきか。
さすがに、東へ進む気はない。せっかく命がけで、あの軍人様が遺してくれたダイイングメッセージを無視して、無謀な探検を続ける勇気は俺にはない。
「戻りましょう」
平林がそう言うので、これまた全会一致で承認を見ることとなった。俺にも基本的異議はない。副リーダー格の後藤も、俺が異議を唱えない以上は黙っている方針らしく、ニコニコと笑いながら、小さく頷いていた。
かくして、とりあえず神殿を去り、来た道を戻って、相沢大統領の待つ大和共和国に戻ることになった。途中、あの軍人さんのものと思われるゼロ戦跡地に立ち寄った。中島飛行機製と思われるゼロ式戦闘機には、発射されることなくその役目を終えて休眠中のミサイル（魚雷？）と思わしき代物が、二、三個ほどぶら下がっていた。これぞまさしく不発弾！　なんてね。ってか危ない。しかし不発弾の処理方法なんて自衛隊にでも入ってなければ分からないので、下手にいじくって、万一誤爆するようなことにでもなれば大変である。触らぬ神に祟りなし。俺たちは、見なかったことにして、町へと急いだ。

とにかく、俺たちはおっちらおっちらと共和国への帰路につき、そして九月の中頃になって、ようやく共和国に戻ったのだった。結果としてみれば、七日間の遠征である。得たものといえば、神殿があり、それ以上東へ進むと危ないということと、古代には、この辺りに人が住んでいたのだという事実だけだった。

「…それだけか？」

大統領閣下様は相変わらずムッとしたような顔で、俺をぎろりと睨み付けた。僅か七日間留守にしていたに過ぎないのに、その間に、相沢は随分と変わったように見えた。というより、彼を取り巻く人たちの反応も随分違うように見える。

その後、大統領が「帰ってよい」と言ったので、俺はすごすごと大統領官邸（ホワイトハウス）から逃げるように立ち去った。どうも、居辛い。

その後分かったことである。

どうやら、相沢修平大統領は、俺たちの居ぬ間に、大幅に軍を増強し、その上で、国民に対し、全権力の掌握を宣言してしまっていたようなのだった。具体的には、大統領任期を五年から無期限とし、かつ口煩い幹部たちから権限を奪い取り、政府の要職をイエスマンで固めてしまった。

馬鹿馬鹿しい。

俺は呆れたように溜息を吐くと、宿所に戻り、寝転がった。権力闘争なんてしている暇はないのだ。この島には腐るくらいの謎と、溢れんばかりの秘密がある。何とかして解き明かしたい。俺の中に渦巻く野望なんて、それだけだ。権力なんてどうだっていい。相沢も、基本法を改正したり、側近で周りを固めるなんて姑息な手段を使わず、正々堂々政治をすればよいのだ。俺は別にお前に取って代わりたいわけじゃない。俺は、島の探索がしたいのだ。それだけだ。なのに、なぜわざわざ皆の反感を買うような真似をするのだ。

俺はうんざりだった。元は俺たち皆仲間じゃないか。なぜにいがみ合う？　サルを見ろ。人間に次ぐ知性をもっていながら、彼らは皆、仲良しじゃないか。少なくとも仲間内でいがみ合ったりはしな

いぞ。
しかし…。
時の流れというべきか、なんと表現すべきなのだろうか。一度発生した津波は、地上を悉く洗い流さない限り、鎮まらないのと同じように、相沢への不信感、不満、反発は、彼を倒さない限り、鎮まりそうもないようだった。当然、相沢の対抗馬、反相沢グループの盟主には、俺が座った。俺自身はこれっぽっちも望んじゃいないというのに…。
ハァ。
もう何度目の溜息だろう。喧々諤々、議論を重ねる血気盛んな同志たちを見るにつけ、俺の溜息はどんどん深く、濃く、悲しみの満ちたものとなった。

第１１話　回想

なんだか知らぬうちに、この島に一年以上居着いちまったわけだが…。うーん。一年前まで、俺たちはどんな生活をしていたんだったかな？　考えてみるまでもない。ありふれた、どこにでもある、至って普通の、平凡な高校生活だった。

俺の高校はのどかな田園風景広がる田舎の町の外れにぽつねんと突っ立っていた。俺が十八期生だから、今年で創立十九年目ってことになるのかな？　先生たちは来年の創立二十周年記念日には、盛大なことをやろうと企画立案しているらしいが、生徒たる俺たちにとっちゃどうでもよいことだった。

若いだけに、校舎も綺麗だ。私立校だけに、全てが全て、不必要なぐらいに贅沢だった。まあ、硬式野球部の部室や設備に比べれば、月とすっぽんぐらいの差はあったが…。

俺の高校で誇れる点は、甲子園常連校ってことだけ。我が校を運営している学園の御偉方は、とかく野球に力を入れており、全く違う都道府県の中学校から、有力と思しき選手を片っ端からかき集めていた。いわゆる野球留学校って奴だ。その甲斐あって、ここ十年、連続で夏の甲子園大会に出場し、春のセンバツにいたっては、十五年連続という偉大な記録を樹立していた。しかしながら、優勝回数は余り多くなく、春夏一回ずつ。準優勝は春二度、夏一度と聞いた。ベスト４は…。ゴメン。知らない。ただ初戦敗退は夏に一度しかないってことを、野球部の先輩から聞いたことがある。それが去年のことで、俺は先輩たちが悔し涙とともに凱旋帰校した姿を今も覚えている。逆に言えば、去年以外は全部初戦突破を成し遂げているわけで…。さすがに恐れ入った。

今夏の甲子園では、ベスト８までいって、準々決勝で敗れた。相手は野球よりは勉学のほうで有名な公立高校。そんな学校に、コールドに近い負け方をしたので、野球部に多額の資金を投じてきた名

門野球校の面子は丸潰れとなった。
ま、そんなことはどうだってよいのである。とにかく、我が高校は野球が強い、という以外は、実にありふれた私立高校の一つでしかなかった。偏差値は高くも低くもなく、東大進学者は創立十九年たって、たった一人。毎年、旧帝大に五人ぐらい送り込む力はあるが、それだけ。
平凡な高校って奴を、まるで絵に描いて表したかのような、典型的平凡校に通いながら、俺自身も、これ以上ないくらい平凡な毎日を過ごしていた。

二年三組。
それが俺のクラス。ありふれた普通の教室の中に、大そう立派なクーラーと、最近話題の地デジのテレビが飾ってある。テレビなど、滅多に使わないので、所詮教室を彩るインテリアの一つに過ぎなかったが、細長い、まるで板のような液晶テレビをぼんやりと眺めていると、人間の科学力って奴は素晴らしいものだと思わずにはいられなかった。
ちなみに俺の席は、窓際後方二番目。まあまあな位置である。後藤は俺の前に座っていて、平林めぐみが俺の後ろ。遠藤伸介は廊下側前方二番目の席なので、俺とは全く正反対の位置であった。佐川新平は、ど真ん中の最前列。先生のまん前という、一番最悪な席である。
テニス部のメンバーが都合よく集められたクラス。俺は別に嫌いじゃない。どころか楽しかった。皆とバカやりながら、くだらないおしゃべりに励んだり、先生たちの授業能力を比較してみたり、女子の美人度格付ランキングに精を出してみたり…。
「見ろよ、これ！」
なんて言って、バカな友達が、コンビニかなんかで買ってきたエロ本を見せ合いっこするのも、始めは慣れなかったが、慣れてしまえば、これはこれで楽しかった。先生に見つかったら、即アウト。

女子に見つかれば、１２０％嫌われる。しかし、そのスリル感がたまらない。

担任にして世界史教諭。テニス部顧問。

相沢修平はいつものように生徒たちの中心にいた。怒ると怖いが、怒らねば面白いというので、彼の人気はいつも高い。この界隈を縄張りにしているらしい不良たちも、彼には一目も二目も置いているようで、彼らは警察よりも相沢の名を怖れている、なんて噂が実しやかに流れていたほどである。

そんな相沢が、あるとき俺にこんなことを言った。

「面白い本があるんだ。読まないか？」

相沢が本を薦めてくるのはいつものこと。別に不思議なことじゃなかった。しかし、薦めてくる本の種類がいつもと違う。彼は常に歴史本ばかり俺に薦めてきた。俺が歴史好きだって事をよく知っているらしい。相沢も世界史教諭をやっているだけあって、俺に輪をかけたような歴史マニア。俺たちが読む本は、いつも決まって歴史だった。

それなのに…。

「冒険小説らしいんだ。俺はまだ読んでないが、面白いらしいぞ」

冒険小説？　相沢が？

ファンタジーとか冒険なんてものは大嫌いと、日頃公言していた相沢が、わざわざそんなものを俺に薦めるとは…。さて、明日は雪かな？　なんてバカなことを考えながら、俺は相変わらず激しく厳しい部活を終えると、薄暗くなった空の下を懸命に駆け抜けて、足早と家に帰った。

確かに冒険小説だ。

しかし、少し変。いや、かなり変だった。

修学旅行を明後日に控え、俺も親もそわそわとしている。既に荷造りは終わり、おおよその荷物が詰まったカバンを枕にして、俺は

ごろりと寝転がった。どうせ着替えだけだ。潰したって構わん。
聞いたことのないような作者名。外人のようだ。俺はしばらくすらすらと読んでいく。出だしは至って普通。平凡な高校生がいて、家族がいる。そして彼は旅行に出るのだ。単に旅行としか書いてないので、いったいどこに行くのか、その他詳細はほとんど載っていない。ただ飛行機で行くらしい。
墜落し、漂着。そこまでの経緯が具体的詳細に載っているかと思うと、以降のページが全部白紙だった。分厚い本なのに、四分の三ぐらいが全部白紙。手抜き？　出版社のミス？　さもなくば…。うーん、なんだろう。
もしかすると、普通には見えないようなインクで書いてあるのかもしれない。映画とかなら、暖めたりすると、字が突然噴出すものだ。だから俺はドライヤーを持ってきて暖めてみたが、しかし当然のように白紙ページは白紙のまま変わらなかった。ま、見えない字なんてあるはずない。本当に白紙なんだろう。
バカみたい。どうせ、相沢の悪戯だろう。そういうことが好きな先生だからな。なんて思い、俺は無性に腹立たしくなった。
「…ふん。明日覚えとけよ、相沢め！」
なんて呟きながら、部活のスケジュール日程が書かれたカレンダーを眺めた。
「あ…。明日はないんだ。そういや、相沢も出張とかで、明日は学校に来ないらしいし」
俺はがっくりと項垂れて、そして「仕方ないか」と呟いた。ま、修学旅行の際に渡せばいいだろう。そのときには、一日空いた分、めいっぱいの文句をお見舞いしてやるのだ。

それから一年以上が過ぎた。
結局、本は渡せずじまい。…っていうか、どこへやったかな。
とりあえずもってきたはずだ。俺は気になって、漂着地点（俺たちはそこをプリマスと呼んでいる）に急ぎ、そこでほとんど廃墟と

化している機体に近寄った。
機内はあらかた探し回ったはずだ。何か役に立つ道具か何かあるに違いないと思って、漂流直後に漂流者総出で探したときの記憶がまざまざと蘇る。ああ、あれから一年しか過ぎていないのか。しかし、随分と俺たちも様変わりしたものだ。
なんて思いながら機内に入る。
あれだけ立派だった室内も、今や地獄でしかなかった。あの席が、俺の座っていた場所だ。隣には友人がいて…。しかし彼らは皆死んでしまった。今ではプリマス近くの海岸に、揃って埋葬されている。
「…うーん、やっぱねぇか」
郷愁に浸っている場合じゃなく、俺はしばらく機内を探し回った。まあ、あるわけねぇ。あったとしても、一年間が過ぎているのだ。水浸しにもなったろうから、ふやけて、腐って、本としての形態を維持していないだろう。
諦めるか。
俺はゆっくりと立ち上がり、そして歩き出した。
そのときである。

何かを蹴ったような感触。少し重い。
もしかして、と淡い期待を抱いて下を見ると、そこには、茶色をしたカバーに包まれた、懐かしき、お目当ての本がこれみよがしに転がっていた。さっきまでは全く見つからなかったのに…。
俺は本を手に取り、ぱらぱらと開いてみた。まず、綺麗だ。一年以上、こんな環境の悪いところにほったらかしにしておいたわりには、新品同然の状態を維持していた。海水にも浸っていただろうに、なぜ…。
だが、それ以上に俺を仰天させたのは、本来白紙だったはずのところに、文字が浮かんでいたことだった。即ち、飛行機が墜落した後の出来事が、事細かに記載されていたのである。
「…ど、どうなってるんだ？」

俺は困惑した。
慌てて機内から飛び出し、近くに転がっていた大きめな岩に座り込むと、その文章を読んでみた。何が書いてあるのだろう。確かに一年前に呼んだ時は白紙だったのだ。
「なッ…」
またしても、俺は絶句した。言葉を失い、愕然となった。
そこには…。

「おーい、新井君！　こんなところにいたの！」
そこに、平林めぐみが駆けつけてきた。どうやら姿が見えない俺を探しに来たものらしい。
「全く。どこに行ってたのかと思ったら…。こんなとこに、何の用があったの？」
彼女は近くに転がっている無惨な機体をほんの少し見て、すかさず顔をそむけた。思い出したくない記憶。何しろ、友人が皆死んだのだ。彼女の気持ちは痛いくらいに分かる。
「ま、いろいろ事情があるんだ。んで、お前は何の用だ？」
と、俺は聞いた。すると平林はキッと俺のほうを睨みつけ、
「会議よ！　何でも、相沢せんせ…、大統領閣下さんが会議を開くんだって」
と、叫ぶように怒鳴っていた。
「会議？」
なんだろう。俺が不思議そうに首を傾げると、
「知らないわよ」
平林は素っ気無く答えた。
「とにかく急いで。あの人、怒ると怖いのよ」
知ってるよ。
俺はとにかく、烈火のごとく怒っているだろう相沢の顔を思い浮かべながら、思わず苦笑いした。とりあえず急ごう。本のことは、また後で読み直せばいい。さっきのは、俺の勘違いかもしれないの

だ。

第12話　濡れ衣

会議冒頭。

「重大な発表がある」

相沢修平は重苦しい顔をして、そう言った。

会議室には、俺の他に、後藤、佐川、遠藤ら十五少年の主要面子の他に、軍医総監兼大統領専属医の大原宗雄氏、大統領首席補佐官兼大統領親衛隊（シークレットサービス）隊長の加藤卓（元会社部長だった人）、大統領首席秘書官兼国民軍参謀長の古谷亜子…。いろいろいる。

相沢はひとしきり、ぐるりを見回した後、

「この中に反逆者がいるのだ」

と、言った。

途端、辺りが騒がしくなる。

相沢はすっくと立ち上がり、親衛隊長を兼ねている加藤補佐官の下に向かって、彼に何やらひそひそと耳打ちした。そして、加藤はゆっくりと立ち上がり、退席した。

「反逆者とは、即ち誰か…。しかし賢明なる諸君なら、もうお分かりだろう。私を大統領の座から引き摺り下ろし、自分がその座に就こうとした。反逆者の正体は…」

そこまで言って、相沢はにやりと笑った。

会議室をぐるりと回り、そして、俺の後ろで止まった。

「新井君。君だ」

その瞬間、ドッと加藤隊長率いる親衛隊がやってきて、俺に二の句も言わせず拘束してしまった。

「あ、相沢さん、な、何を！」

後藤も狼狽している。佐川、遠藤も同様だ。

「相沢さん？　後藤君。君も逮捕されたいかね。相沢さんではなく、大統領閣下と呼びたまえ！」

相沢はにたりと笑い、そして、自らの席にゆっくりと腰を下ろした。
「新井君。君も大それた事を計画し、実行に移そうとしたものだよ。残念だ。君が謀叛を企むとは、夢にも思わなかった」
いったい、何の話だ。俺にはさっぱり分からない。
謀叛？　反逆？
俺がいつそんな阿呆なことを計画し、実行に移そうとしたというのだ。確かに相沢の暴政ぶりには頭を悩ましていたし、反発もした。だからといって、それをもって反逆とは、余りに飛躍しすぎだ。俺は、相沢を、そして、俺たちが作った新国家のことを思って諫言したに過ぎないというのに…。
「加藤君。連行しろ」
相沢は容赦なくそう命じ、そして相沢の忠実なる家来と成り果てた加藤卓補佐官は、にっこりと微笑み、そして部下に合図し、俺を強制的に連行したまま、部屋を去った。

牢獄に閉じ込められてしまった俺は、しばらくの間、何が相沢の気に触ったのか考えてみた。
いろいろある。確かに俺はいろいろと相沢の方針に異議を唱えたからな。唱えすぎたのかもしれない。昔から、口煩い上に無駄に力を持っている老臣は、やがて粛清される定めにある。足利尊氏は弟の直義を殺害したし、織田信長だって、林秀貞（通勝とも）や佐久間信盛を追放したじゃないか。劉邦だって、韓信や英布を粛清した。朱元璋だって…。要するに、みんな、口煩い上に必要以上の力を持ったから、そんな憂き目にあったのだ。なら俺は…。
「…だが、理由としては、あれ以外考えられんな」
俺はフゥと小さな溜息を吐き、苦笑いした。
あれ、とは即ち、原住民を巡る一連の問題のことであった。俺と相沢が大喧嘩した、あの事件が、今回の粛清劇に繋がっているのだと考えれば、全てつじつまが合うのである。

原住民。
彼らが俺たちの前に姿を現したのは、一ヶ月前のことになる。俺たちが遠征から戻って間もない頃のことだ。

原住民は、自分たちを『神の民』と名乗っていた。なぜ、そんなことが分かるかって？　そりゃ分かるよ。何しろ、彼らは堂々と日本語を喋っていたのだから。
しかし、格好だけはアマゾンの奥地にでも潜んでいそうな、典型的原住民である。非文明的、未開…、そんな言葉がよく似合う彼らは、日本語を喋りながら、
「出て行け！」
と、俺たちと出くわすたび、しきりにそう叫んでいた。
叫ぶだけなら、まだいい。
原住民『神の民』の戦士たちは、時折俺たちの勢力内に乗り込んできて、畑の作物を奪い、家を壊したりした。住民に乱暴をふるい、大怪我を負わされた者も少なくなかった。彼らは実に好戦的、かつ暴力的で、野蛮な原住民…、と俺たちが思っても仕方がないほどの暴虐ぶりを大いに発揮していた。
しかし…。彼らとて訳もなく攻撃を仕掛けたりはしないのである。彼らにも俺たちを攻撃するに足る大義名分があったわけで…。結局のところ、入植地の拡大を最優先事項とし、森を焼き、木々をなぎ倒してきた俺たちがいけないのだった。森に住み、森と語らい、森の恵みを唯一無二の糧として、長らくこの地に生きてきたらしい『神の民』にとって、森を壊し、その上で新たに農地と家を作り上げ、また食用にするだけならまだしも、皮や角（つの）欲しさに必要以上の動物を際限なく狩っていく俺たちは、さながら悪魔のように思えたろう。
彼らは怒ったのだ。こんな罰当たりなことばかりしている俺たちに罰を与えるべく、神か仏か、とにかく超自然的存在が送り込んだ正義の使者に違いないのである。

兎にも角にも、おサルさんの脅威から解放されたかと思えば、今度は『神の民』なる原住民と喧嘩する破目となった大和共和国は、連日に渡り、上へ下への大騒ぎだった。
国民世論は、世論調査などするまでもなく、限りなく１００％に近い高確率で主戦論に染まっていた。まあ、中には原住民のために重傷を負わされた者もいたから、彼らは、
「俺たちの安全を維持するためにも、野蛮人は片っ端から蹴散らしてやれ！」
という強硬論が大勢を占めていた。
しかし…。
それでいいのか？　原住民だって人間だぞ。
彼らが日本語を喋るためか、妙に親近感を抱いていた俺は、共和国政府内における唯一といっていい慎重派に収まっていた。…いや、ちょっと語弊がある。唯一ではない。後藤も遠藤も佐川も…、要するに高校以来の友人たち、即ち十五少年（少女含む）は皆、俺を支持してくれていた。しかしながら、相沢大統領や彼を支えている側近連中は、強硬的な世論を背景に、原住民の徹底掃討を主張していたのだった。
「相沢さん、あんたは殺戮がしたいのか？」
会議室で、俺と相沢は果てしなき激論を交えていた。
「お前は、国民が殺されていくのを座して見ていろというのか？」
相沢はぎろりと俺を睨みつけ、そして勝ち誇ったような顔をした。しかし、俺だって、こんなところで引くわけにはいかない。
「殺し合いなんてせずに、話し合いで決着をつければいい。あいつらだって言い分があるんだ」
「言い分？　たわけたことを抜かすな。あいつらの言い分を一から百まで聞いていたら、俺たちの生活は成り立たん。共和国の更なる発展のためにも、やはり奴らは根絶しなければならんのだ」
いったい、こいつは何を言っているのだ。
俺の中で、相沢修平という男が崩れた。昔から奇妙な男ではあっ

たが…、しかしそれは許容できる範囲内の奇妙さであった。しかし、今の彼を許容することはできない。アドルフ・ヒットラー並、いや、ヨシフ・スターリン並の暴挙を成そうとしているのだ。共和国の利益のため、という実に手前勝手な大義名分を掲げて…。

しかし、俺の抵抗は全く無意味だった。国民世論は揃って主戦論に染まっているし、何より相沢は独裁的権限を完全掌握した大統領なのだった。彼の意は絶対であり、俺の抵抗など、強風に設定された扇風機の前に築かれた砂山よりも脆く、儚いものだった。

かくして戦いが始まった。十月初頭の頃だ。

秋も深まり、山の紅葉は、今がようやく見所といった感じに咲き誇っていた。

そんな幻想的空間で…。俺たちはいったい何をやっているのだろう。

相沢大統領の号令を受けた国民軍は、原住民『神の民』の勢力範囲内に侵攻すると、彼らを次から次へ、片っ端からなぎ倒していった。何しろ国民軍には、多量のダイナマイトや猟銃、猛毒を塗りこんだ鏃（やじり）を取り付けた矢など、これまでとは比べ物にならぬほど強力な兵器があった。最近では鉄なども生産できるようになっていたから、その鉄を使って作り上げた剣も、原住民相手には強力な武器の一つとなっていた。一方、『神の民』軍は弓矢こそあれど、鉄もなければ銃もない。ダイナマイトなど、あろうはずがない。比較的固めで大きな石を刃のように尖らせて、それを剣代わりとしているなど、実に原始的な武器を主力兵器として使用している彼らなのだった。

まあ、レベルが違う。兵力的には確かに若干国民軍が不利であったが、これだけ技術力が違えば、そんな差は、あってないようなものだ。

かくして、戦いはあっという間に国民軍の圧勝に終わって、原住民の村という村は、悉く焼き尽くされていった。何しろ、ダダダダ

ダダダン、なんてけたたましい銃声が響き、挙句の果てに、ドォォォォンと、ダイナマイトがこの世のものとは思えぬ轟音を張り上げて炸裂するのだ。そんなもの、見たことも聞いたこともないだろう『神の民』軍戦士たちは、そのたびに仰天し、混乱して、もはや戦いどころの騒ぎではなくなっていた。

俺は、全軍の副官という立場で戦に臨んでいたが、全軍の指揮権は相沢がじかに握っていたので、ほとんど果たすべき役割も権限もなく、繰り返される殺戮を、ただ見守っているしかなかった。

しかし…。

それでは、余りに情けないじゃないか。俺だって、俺だってやる時はやるのだ。そう思い、決意して、

「降伏を勧めるべきでしょう」

と、相沢に進言していた。

「降伏だと？」

相変わらず気に入らなさそうな顔をして、彼は俺を睨んでいる。彼としては、この際、原住民たちを根こそぎ殺害しようと思っていたらしかった。将来に禍根を残さぬためには、それが一番だと考えているらしい。

「彼らは、『神の城』とかいう要塞に立て篭もっております。あれを攻め落とそうと思ったら、こっちにも被害が出ますよ。既に、我らのほうでも死者が数人出ております。これ以上の被害の拡大は、防ぐべきかと思います」

死んだのは、かつて国家公務員だった男と、売れない芸人をやっていた男だった。その他、十数人の負傷者が出ており、圧勝をものにした国民軍といえども、決して無傷というわけではなかったのである。

そのことなど、総帥として、他の誰より承知している相沢は、ぐぬぬと悔しそうに唸りつつも、俺の主張の妥当性は認めないわけにもいかなかったようで、

「降伏させるにしても、全面降伏だぞ。無条件だ。もしも奴らがそ

れを呑まないなら、俺は容赦なく、奴らを皆殺しにする」
と言って、それまでの徹底主戦論を、渋々取り下げたのだった。
共和国政府全権代表は俺が勤め、『神の民』側は、わざわざ部族長が出張ってきた。
とりあえず、お互い、両陣営を代表する権限を身に帯びて、交渉のテーブルについたわけである。後は、如何にして血を流さぬよう、解決させるか。
俺は懇切丁寧に説得を重ねて、ようやく部族長の承諾を得た。
無条件降伏。
彼らも自分たちの置かれている立場は十分理解していたらしい。…まあ、無条件降伏とは言いながら、実際のところは、「降伏してくれるなら、あなたを含めて、全員の命は安堵する」という条件を提示していたから、決して無条件ではなかったのだが…。
とにかく、生命を安堵する以外の点で、俺は一切の妥協も許さなかった。そこを許せば、例え纏まったとしても、相沢が許さないだろう。実際、俺が取りまとめてきた苦心の無条件降伏ですら、相沢は「気に入らん」と漏らしていたほどだった。それでも必死になって相沢を説得し、辛うじて締結に導いたのである。
かくして戦いは終わり、降伏した『神の民』の住民三千人は新たに共和国国民に加えられることとなった（ただし市民権はなし）。

とにかく、そう言う事件があった。
相沢は事あるごとに反論する俺を鬱陶しいと思ったろうし、また、『神の民』を降伏させるなど、それなりに実力をつけてきた俺を目触りと思うようになったのかもしれない。
かくして俺は逮捕され、狭い牢獄の中に閉じ込められている。これがまた、結構辛いのだ。
「…はぁ。何で俺、こんなことしてんのかな？」
もしもあの墜落事故がなければ…、今頃は普通の高校三年生。大

学受験に追われながらも、別段変わり映えのしない普通にして平凡、しかし平和で満ち足りた世界に生きていたことだろう。少なくとも、殺戮の現場を直接見たり、こんな風に投獄されたりすることはなかったに違いない。

ハァ。

俺は何度目になるかしれぬ溜息を吐くと、困ったような顔をして苦笑いした。早く解放してくれないかな？　相沢の心の中に残っているかもしれない良心に最大限の期待を託して、俺はゆっくりとその場に寝頃がった。

第１３話　逃避行　―脱出―

投獄され、しばらくの間、薄暗く、狭い、文字通り檻の中にて暮らしていると、確かに辛いし、きついし、死にそうになるが、静かに物事を考えられると言う点においては、ここほどベストな場もないような気がした。

何しろ、気が滅入りそうなほど静かなのだ。音という音が死滅してしまったかのような、そんな無音の世界である。まあ、時折、監視のために配置されている守衛の兵が雑談など交わしていたりするから、全く無音というわけでもなかったのだが、とにかく、俺は政治犯として、ここ数日に渡り、ずっと獄中生活を過ごしている。いつ何時、相沢大統領閣下様が処刑命令を下すか知れたものではない。明確な死を待ちながら過ごす時間というものの辛さを、身をもって学んでいる哀れな俺であった。

ま、俺は投獄されているので、その間の共和国の動向も、仲間の動きもさっぱり分からなかったのだが…。

後で聞いた話である。

十一月に入った頃だった。

俺が逮捕されて以後、後藤大輔や佐川新平らは、時折例の神殿に同志たちを集めては、密議を行っていたらしい。主題は即ち、俺の奪回である。集まった同志は、俺を除く高校生十四名を中核とした二十人。やはり、いざというときに頼りになるのは友人だと、俺はしみじみ思う。

そして、十一月初頭、後藤は行動を起こした。この騒ぎは、俺も知ってる。何せ、あちこちで火の手があがり、喊声に絶叫、とにかくやたらめったら大騒ぎとなったからだ。

後藤の扇動により叛乱を起こした『神の民』過激派は、後藤たち

の手引きもあって、一時、大統領官邸（ホワイトハウス）を包囲し、相沢を窮地に追いやった。
その間、後藤たちは、かねて味方に取り込んでいた、反相沢グループの国民たちを指揮して、俺が閉じ込められている特別政治犯収容所（通称アウシュビッツ）に乗り込んできたのだった。

さて、俺はその頃なにをしていたのかというと…。
暢気に用を足していた。
無駄にたまっていただけに、一度しだすと、なかなか終わらない。これでもかというほど、じょろじょろと溢れ出す。なんともいえぬ脱力感が体全体を包み込み、そしてようやく終わったと思ったとき、
「新井！」
と、聞きなれた後藤大輔の声が聞こえ、俺はぎょっとして振り返った。
「なんだ、後藤か…」
もしも相沢の派遣した死の使者であったりしたら…。俺の精神状態は、結構大変なことになっていたのだ。
「新井…、いや、新井さん。これからここぶっ壊すから、逃げてくれ」
「…ぶっ壊す？」
「あぁ」
そう言っている間にも、後藤の周りには、数人の屈強な戦士たちがぞろぞろと集まっていた。見れば『神の民』の戦士たちと思われる。少なくとも、目の色、髪の色、体格…、その他全てが日本人とはかけ離れているからな。ならば『神の民』以外にないではないか。かつて戦った敵が、自分たちのために戦ってくれているという現実に不思議な違和感を覚えつつも、
「すまん」
と言って、俺は素直に頭を下げた。

簡素な鉄格子を叩き壊すなど、さしたる問題もなかった。大柄な男たちが、思い切り体当たりすれば、それだけで、鉄格子は大袈裟な轟音を張り上げ、壊れてしまった。

俺は後藤たちに伴われ、とるものもとりあえず牢獄を脱出すると、そこで初めて、国民軍（政府軍）と叛乱軍の間で繰り広げられている凄絶な戦いを目にしたのだった。

「これはなんだ？」

と、尋ねると、

「お前を助けるための陽動作戦だ」

後藤は淡々と答え、にっこりと微笑んだ。

「お前は俺たちのリーダーだからな。助けないわけにはいかんだろう。…ここで戦っている奴らは、皆、相沢のやり方に反発している奴らばっかだ。お前が逮捕されて以来、相沢は自分に仇名す人間に対して、片っ端から粛清の手を伸ばし始めた。もう、俺たちは、これ以上あの国に住み続けることはできない」

「…」

「だから俺は決めたんだ。お前をリーダーにして、もう一つの国を作ってやるんだと」

もう一つの国だって？　なんだそりゃ。

俺は心の中で不思議がりながらも、しかし、今はそんなことを尋ねたりしている暇はない。何しろ、圧倒的武力を誇る政府軍が、怒涛の勢いで、こちらに迫っているのだった。

俺を助け出すためだけの…、というより、俺を含めた政治犯全員を解放するために行われた一連の作戦は、規定通り、叛乱軍の敗北をもって幕を閉じた。

いや、幕は閉じちゃいない。これから俺たちには、国民政府軍に追い立てられて、江西省瑞金から撤退を余儀なくされた中国共産党軍の長征にも匹敵する大逃避行が待ち構えているのだった。

叛乱軍に加わった人たちは、『神の民』の人たちを含めて総勢八

百人。大した数である。うち、『神の民』が六割近い五百人となっているから、一般市民は三百人と言う計算になる。
武器らしい武器も持たない一般市民、総勢八百人が、街を追われて逃げ出す様は、さながら曹操軍のために新野を追われた、逆境時代の劉備たちにも似ている。
なんて考えている場合じゃない。国民軍を脱退してきた兵士たちを指揮しつつ、押し寄せてくる国民政府軍を蹴散らしながら、東へ東へと進まねばならない彼らの立場は極めて危険であった。追いつかれたら、確実に殺される。国民軍には多量の猟銃、爆薬、そして毒矢がある。攻撃されたら、ここは確実に血みどろの地獄と化す。

そして、俺たちは、木枯らし舞う秋風を抜けて、ようやく神殿までたどり着いた。
『闇の神殿』
我ながらベタな名とは思いながら、とりあえず、名づけたのは俺だ。かつてゼロ戦に乗ってこの島に辿り着き、あえなく死亡した兵士の臨終の地であり、そして、これより東へ行くなと指摘された境界線上に聳え立つ古代人の繁晶の跡でもあった。
しかし立ち止まっているわけにもいくまい。国民軍は既にすぐ側まで迫っているのだ。
「どうする？」
後藤、佐川、遠藤その他幹部たちが、俺の下に集まってきて、そんな風に尋ねてきた。
「構うもんか。行くしかない」
俺としては、こう答えるしかなかった。行くも地獄、引くも地獄。なら先へ進むしかない。少なくとも、戻れば必ず殺される。ならば、多分に危険かもしれないが、どうなるか分からない…、即ち少しでも助かる可能性のある道へ突き進む以外ない。
「いいのか？」
後藤が不安そうな顔をして尋ねると、

「構わん」
俺はきっぱりと、はっきりと言い切った。

大将は常に威風堂々。常に山の如く、でんと構えていなければならぬものだ。
なんて思っていても、やっぱりいざと言うときは怖いし、間違っていたらどうしよう、なんて不安も抱く。しかし、一度決めた以上、嘘でもでんと構えていなけりゃいかんのだ。上に立つ人間には、演技力もある程度備わっていなければいけないらしい。
神殿を超えて、先へ進む。
だが、実際のところ、神殿より東に進んでなにが起きるのか、そんなことは誰にも分からないのだった。ただ、先へ進んではならぬという、故人の遺言に怯えているに過ぎないのである。しかし、あの亡霊兵士が、おふざけであんな遺言を遺すとも思えず、それゆえに、東へ進む一行の足取りは、恐怖に怯えて、遅くなる一方だった。

第１４話　逃避行　ー神話ー

これより先、進むべからず。

なんて書いてあるから、どんな恐怖が待ち構えているのかと、びくびくしていると、案外普通だったので、俺たちは拍子抜けするような気分だった。

しかし、背後には国民軍が迫っている。果てしなく危険な逃避行であることに変わりはないのだ。

ってあれ…。

そういえば、先ほどからこれだけ遅く歩いているのに、国民軍の気配はこれっぽっちも感じない。

なぜだ？

もしも彼らがそれなりの速度で歩いているのだとしたら、既に追いつかれていてしかるべきなのだ。例え、彼らが自分たちと同スピードで進んでいるのだとしても、ここまで何の気配も感じないのは、明らかに不自然だった。

「変だな」

俺が呟く前に、後藤がそう言った。

「お前もそう思うか？」

俺の言葉に、後藤は静かに頷いた。

だから俺は、とりあえず佐川新平に数人の兵をつけて、様子を見てくるよう命じた。本当は俺自ら出張ってもよかったのだが、

「総大将は、動かざること山の如し！　お前にもしものことがあったらどうするんだ！」

という後藤の言葉に応じる形で、やむなく断念したのだった。

そして、その佐川たちはしばらくして戻ってきた。思った以上に無傷なようである。

「変だぞ。政府軍の姿が見えない」
少しばかり荒い息を吐きながら、そう言う佐川に、
「姿が見えないだって？」
俺の声は、驚きの余りに裏返っていた。
そんなバカな！
相沢が、俺たちの追撃を諦めたと言うのか？　バカな。ありえない。俺たちを逃がしたら、九州に逃れた足利尊氏の如く逆襲に転じてくるかもしれないことぐらい、歴史オタクのあいつなら百も承知しているはずだ。
しかし、実際にいないという。俺は再度確認のために、佐川ではなく後藤大輔、遠藤伸介両名に五人の兵をつけて向かわせたが、結果は同じだった。
誰もいない。もぬけの殻。

偵察から帰ってきた後藤は、ぼろぼろになった布の欠片を、その手に持っていた。
「なんだ、それは？」
俺が尋ねると、
「あの辺りに、無造作に散らばっていた」
後藤はそう答え、じろりとその布切れを睨み付けた。
布なんて、そう滅多にあるものじゃない。少なくとも、自然の力で生み出されるものであるはずがない。人為的に生産されたものだ。
俺たちがこの島に漂着して一年と何ヶ月かが過ぎた。その間に、俺たちの科学力も随分と進歩していた。例えば、数ヶ月前にようやく生産可能となった鉄と、それを加工して作り上げた各種工芸品。他には布に紙…。まあ、いろいろあるので、いちいち列挙していたらきりがないのだが、とにかく、一年前と比べ、俺たちの生活水準は劇的に変化していたのだった。
見れば、その布切れは、俺たちが作ったものとしか考えられない粗雑な代物だった。

「…何者かに襲われた、とか？」
遠藤伸介がそう呟くと、
「何者かって誰よ？」
平林めぐみがぶるぶる震えながら、彼の顔を睨みつけていた。
「とにかく、何者かさ。…こっから先は、ほとんど未知の世界だ。なにがいたっておかしくないし、なにが起きたっておかしくないんだ」
と、遠藤は吐き捨てるように言ったが、考えてみれば…、いや、考えてみるまでもなく、その通りなのだ。
少なくとも、国民軍は何者かの襲撃を受けて退却、あるいは壊滅したと見て間違いはないだろう。相沢が俺たちの追撃を諦めて撤退命令を出したとも思えない。現場の指揮官が、深入りを怖れて、独断で撤退を決断したのかもしれないが、まあ、いずれにしても、俺たちは国民軍の脅威から解放されたのである。
フゥ。
俺は、小さく息を吐き、力なく、崩れ落ちるようにその場に腰を下ろした。張り詰めていた緊張の糸が、ぷっつりと途切れてしまったかのような感覚。そんな俺の無様な姿に、
「なに、そのカッコ！」
と、平林などは、楽しそうにけらけらと笑っていた。それにつられるように、皆が笑い出す。そこには、つい先ほどまで精神的にも肉体的にも窮地にあった人とは思えぬ気楽さに満ちていた。

湖に出た。
仮に、ヤマト湖と名づけよう。
水質はやたらと綺麗。沖縄の海を見ているかのような錯覚に陥る。何しろ、水底が見えるのだ。堤防で固められ、挙句海岸線にはゴミばかりが所狭しと浮いているような日本のどす黒い海ばかり見てきた俺にとって、それは新鮮な驚きであった。
「ここ、神の池」

と、『神の民』の人々は言って、するとなにを思ったか、突然、拝みだした。深々と頭を下げ、なにやら奇妙な言葉を唱えている。
その後、彼らは、ヤマト湖、彼らにとっての『神の池』にまつわる伝承を教えてくれた。それは以下の通りである。

始祖神マダは、この湖より現れ、やがて大地の女神エウアと結ばれ『神の民』を作った。千年後、エウアは山に帰り、さらに千年たって、マダは湖に帰った。

要するに、『神の民』たちの創世神話というわけである。
この湖は、その創世神話に大きく関わるため、今でも神の代わりとして崇拝の対象となっているのだった。
ま、俺たちも否定する気はない。彼らがこの湖を神の如く崇めているなら、それはそれで構わない。ただし、湖は越えたかった。湖さえ越えてしまえば、さすがに相沢の手も及ばないだろう。そこで、今度こそ俺たちが理想とする新国家を作るのだ。
「湖を越えるにゃ、やっぱ、船とか必要だろうな」
そう呟きながら、俺は、ふと国にあった木舟を少しばかりかっぱらっておけばよかったと後悔した。国の南部くらいを緩やかに流れる大河、ヤマト川に浮かべてある小舟は、川魚釣りのために作ったものであるが、湖を渡るにはもってこいの代物だった。
「いや、舟は必要ない」
そう言うのは、『神の民』部族長の子たるアシタメという男だった。二十代半ば。青年。屈強な戦士であり、先の戦いでは、『神の民』軍の実質的指揮官だった。今も、実質的に『神の民』の人々を束ね、逃避行グループの中では、俺に次ぐ二番手的地位を確保している。
「夜。道開く」

アシタメは、この部族特有と思いたくなるような淡々とした、短い言葉で答えると、にんまりと微笑んで、俺の顔をジッと見つめてきた。
「道開く、ねぇ」
さて、どんなカラクリがあることやら。とりあえず、事情に精通しているらしい『神の民』の御意見は有り難く受け取っておき、そして従っておくべきだろう。何も知らぬ俺たちが勝手に行動して、散々な目に遭うのはごめんである。

夜までは、案外長かった。
既に日は傾き、空は紅蓮色に輝いていたが、しかし、まだ夜ではない。
「焦るな」
アシタメは、側にある大岩にもたれかかりながら、焦れる俺をしきりに制していた。
「それはそうと、一度聞こうと思っていたんだ。…あの『闇の神殿』…、いや、神殿だけどさ、お前たちの遺跡だったりするのか？」
俺は、不意に脳裏に浮かんだ疑問を解決すべく、アシタメの側に近寄って、そう尋ねてみた。
「神殿？」
アシタメは不思議そうに首を傾げている。
「今日、妙な黒岩のピラミッドに出くわしたろう」
「…あぁ」
「あれって、お前たちの遺跡か？」
ついでに俺は、あそこに描いてあった奇妙な絵こそ、こいつらの言う神なのかと尋ねてみたかった。顔は人間、頭に角（つの）、ゴリラのような体格、蝙蝠の如き羽を生やした不気味な絵。
「マダ神、角と野獣の如き巨躯を持ち、大いなる羽とともに、自在に空を舞う」
俺の質問に答えているのかいないのか、いまいちわからぬ答えを

返しながら、アシタメはにっこりと微笑んだ。
「あの神殿、我らの遺跡」

夜。
道、開かれし。
なーんて、要するに引き潮じゃねぇか。って、潮？　ここは湖だろ。海じゃない。しかし、湖でも比較的大きな規模があれば、潮汐は発生するらしいから、まあ、問題はないのかもしれないが…。
とにかく、引き潮だ。
湖から、奇妙な石の道が姿を現し、
「これ、神の道」
アシタメは誇らしげにそう答えて胸を張った。

第15話　逃避行　ー安住の地ー

ヤマト湖を越えると、比較的小さい野原があって、とりあえず俺たちはそこに野営キャンプを設置し、疲れを癒すことにした。既に八百人に及ぶ一行の精神的、肉体的疲労感は限界に達しつつあったのだ。

ま、よもやこんなところまで相沢も追撃部隊を送ってきたりはしまい。しつこい男だが、湖を越えてここまでやってくるには、それなりの時間がかかる。まあ、『神の道』を超えてくるなら別だが、この奇妙なる道は、引き潮にならなければ現れない。既に潮は満ちている。当分引きそうもない。

ざわざわと騒がしい。

八百人が悲鳴に似た安堵の溜息を漏らしている。あちこちに腰を下ろして、

「疲れた」

とか、

「寝たい」

なんて言い合っている。ま、これはこれで平和な姿な気もしたが…。ところで、俺は後藤をはじめとする主要幹部たちと、今後のことについて議論を重ねていた。俺だって、眠いし、辛いが、とりあえず肩書きが盟主（リーダー）である以上、文句も言ってはいられないのだった。

「この辺りに町を作るってのも悪くないと思う」

佐川新平がそう言い、

「そうだ！」

遠藤伸介が続いた。

二人はこれ以上の逃避行は、如何にも面倒くさいと言わんばかりの顔をしている。どうせ、湖だってある。相沢の手だってそう容易くは及ばないだろう。というのが、二人の考え方だ。昔からそうだ

が、この二人は随分と楽観的な考え方をする。
「だが、暮らすには、少々狭い」
逆に、至極冷静沈着なのは後藤大輔である。
確かに、この辺りは確かに野原が広がり、数十人が暮らすには快適な空間かもしれないが…。しかし、ここには八百人がいるのだ。そして、さらに増える可能性もある。となると、やはり手狭な感じは否めない。
「そんなの、森とか切り倒せばいいだろ」
佐川はきっぱりと言い切って、自信満々に胸を張った。
「そういうことばっかしてるから、おサルさんのお怒りを買ったんでしょ」
そんな彼に、平林めぐみが反論を加え、
「でも、いっそ森の中に家を作ったりして、生活するのも悪くないんじゃない。あえて、平地にするんじゃなくてさ」
なんて言っている。
ま、いずれにしても資材を確保するためにも、木々はなぎ倒さなければならないわけだが…。それに、農地も確保しないと、恒久的な食料調達が難しくなる。農地ってのは、やはり土地を使うもので、だだっ広い平地が必要不可欠だった。…ただ、この前のように際限なく伐採し、あるいは焼いたりすると、サルあるいは、わけのわからぬ動物たちによる襲撃を受けかねない。相沢だけでも厄介なのに、さらに別の敵を抱えたくはない。
ハァと俺は溜息を吐く。
問題は山積み状態だ。あれをすれば、これが駄目。これをすれば、あれが駄目…。なら、どうしろと言うのだ。神とやらが本当にいるのなら、具体的解決方法を俺に啓示して欲しいね。さすれば、俺はその神の熱烈な信徒になったっていい。あるいは、教祖にでもなって、その神の存在、ありがたみを教え広めてやる。だから、教えろ！
「まあ、いずれにしてもこれ以上の逃避行は難しいでしょう。人々の体力的、精神的負担は限界を超えています。副司令閣下がどう御

判断なさるかは分かりませんが、私としては、この辺りで腰を落ち着けるのが最上策と心得ます」
やたら丁寧口調で進言するのは、テニス部マネージャーであった井上愛子。同級生なのに、誰に対してもこの調子なのだ。特に、盟主（リーダー）となった俺に対しては、敬語しか使わなかった。
「それもそうだなぁ」
俺はしばらくいろいろと考えてみた。これ以上どこぞへ行ったところで、これ以上の場所があるとも思えなかった。ちなみに、この島に最も詳しいだろうアシタメにも聞いてみた。しかし、
「神の池より東、知らない」
という答えが返ってきただけである。
そのアシタメも主要幹部の一人として会議に参席しているのだが、先ほどから一言たりとも喋らない。ぴくりとも動かない。しかし、彼は五百人に及ぶ『神の民』御一行様を束ねている実力者。無碍に扱うわけにもいかんだろ。
ってなわけで、
「アシタメさん、あんたはどう思う？」
俺は尋ねてみた。まあ、彼を持ち上げるために尋ねたというより、本当に彼の考えというものを聞いてみたかった。少なくとも、俺たちよりは確実にこの島に精通しているのは確かなのだから…。
「深入り危険。ここ、安全」
彼はそう言って、にっこりと微笑んだ。
なるほど。俺は小さく頷いて、
「よし。じゃ、ここに新国家を作ろう」
と、言った。

新国家建設が始まる。それに先立つ形で行われた選挙により、俺は改めて正式にリーダーに選出された。まあ、選挙を提唱し、実現させたのも俺なら、立候補したのも俺だけだったので、選挙結果など投票する前から誰の目にも明らかだったのだが…。要するに信任

投票。ここで注目すべきは、俺にどれだけの信任票が投じられたかである。
開票結果。
信任八百余。不信任ゼロ。棄権数票。
棄権ってのは、投票のやり方をいまいち理解していなかった『神の民』たちの間違いによるもので、基本的に全員が俺を信任したって形になった。即ち、俺の現時点の支持率、お見事１００％ってわけだ。
それに伴い、リーダーの称号は首相に変わった。相沢が大統領なのに、こちらのリーダーが、『リーダー』では釣り合いがとれないだろう。かといって彼と同じ大統領じゃ癪だ。なので、首相。プレジデントじゃなく、プライムミニスター。ま、いずれにしてもリーダーであることに変わりはない。
「総理閣下」
そこに、井上愛子がやってきた。こいつは、常に『〇×閣下』と呼ぶ癖でもあるのか、必ず俺を『閣下』と呼んでいる。
「何だ？」
このとき、俺は『総理大臣』として、新国家建設の陣頭指揮…、もとい力仕事に精を出していた。切り倒された木々を運び、加工して家を作る。平林のアイデアも採用されて、住宅街は、森の中に作られている。そうすれば無駄に自然を壊さずにすむし、何より、いざ相沢らに攻められたとき、森が天然の要塞となってくれるだろう。ってなわけで、俺たちは先ほどから随分と難しい家作りを強いられているわけだが…。
「後藤閣下がお呼びです」
相変わらず誰に対しても『閣下』と呼ぶ不思議な女であった。ま、後藤は俺の副官みたいな存在で、八百人の団体様の中では、俺、アシタメに次ぐナンバー３的位置にいるから、彼女的には、後藤も『閣下』と敬称すべき対象の一人なのだろう。
「後藤が？」

俺は仕方なく作業を、側にいた『神の民』青年たちに委ねると、急ぎ足で後藤のいる場所へと走っていった。

後藤が指し示したのは、一つの法案だった。

「今、んなこと言ってる場合じゃないだろう」

俺が抗議しても、後藤は聞く耳一つ持たない。

「規律の維持は不可欠だ。八百人を束ねるなら、なおさらだ」

彼は一枚の紙に、小さな文字で何条かに及ぶ条文を記していた。

えーと、

一つ、物を盗んだ者、国外追放。壊した者、死刑。

二つ、放火した者、死刑。

三つ、他人を傷つけた者、死刑（殺した者は鋸挽（のこぎり）き）。

四つ、喧嘩両成敗（喧嘩の程度により、上・下とわけ、上は死刑。下は国外追放）。

ってか、厳しい！

刑罰が死刑か国外追放しかないってどういうことだ。と、俺が厳しい口調で抗議すると、

「これぐらいしないと、規律は維持できない。無論、これに違反した者は、誰であろうと例外なく罰する」

後藤はきっぱりと言い切った。

「なら、俺やお前が違反してもか？」

俺の問いに対しても、

「当然」

そう答える後藤だった。

いやはや、まるで土方歳三だ。…というより、こいつは土方に徹するつもりなのかもしれない。なら、俺は近藤のようにでんと振舞っていればいいのか？

「ちなみに、鋸挽きって何だ？」

ふと目に付いた条文の中の一文に、俺は首をかしげた。…いや、実際には知っている。知っていてなお、こう尋ねたのは、正気かと後藤を糾弾するためでもあった。

「鋸挽きとは、即ち、罪人の首から下を地中に埋めて、地上に出ている首に、鋸をあてる。その上で、罪状を記した高札を掲げ、通行人に鋸を引かせて殺させる刑罰だ。江戸時代まで運用されていたらしい。これで殺された主な人間には、織田信長暗殺を企んで失敗した杉谷善住坊、徳川家康への反逆を企んで失敗した大賀弥四郎…」

「わかっている」

冷静に説明を始める後藤を制して、俺はハァと溜息を吐いた。

「正気か？　こんなおぞましい刑罰、薄気味悪い独裁国家だってやらねぇぞ」

「規律の維持には不可欠だ。ただし、滅多に適用しない。ゆえに殺人者のみに適用するとした」

「…」

こいつは本気だ。マジだ。そう感じて、俺はそれ以上の反論を諦めることにした。

ちなみに鋸挽き。これは明治以前を代表する最悪処刑法の一つとされてきた。まあ、首から下を地に埋めて、地上に晒した首を、少しずつ鋸で掻き切っていくのだから、これ以上おぞましく、残忍な処刑もあるまい。しかも、鋸を引くのは、通行人、即ち一般民衆なのだ。実際、これで殺された大賀弥四郎などは、地の中に埋められながら、数日間生き永らえたという。当然、鋸が食い込んだ喉からは言いようのない激痛が走るし、人が来るたび、それがどんどん喉の奥深くに食い込んでくるのだから、恐怖もひとしおだろう。

「ちなみに、鋸を引くのは、通行人じゃない。遺族だ」

そう言ってのける後藤に、俺はハァと小さな溜息を吐いた。ハンムラビ法典の如き、『目には目を、歯には歯を』的精神には、もはや苦笑いするしかない。

ま、とにかく街づくりは順調だ。
年が明け、春が来ても、相沢の手勢が襲い掛かってくる気配はない。案外、俺たちの居場所が掴めていないのかもしれないな。ただ、いつ何時彼らが襲い掛かってくるかわからない。警戒の手を緩めるわけにはいかないのだ。
ちなみに、四月ごろになって、首相官邸が完成した。ま、名ばかりのちんけなログハウスだが…。しかし、比較的大きな大樹の上に作られている。なんともいえず、子供のころに作った秘密基地のような感じがして嬉しかった。

第16話　リーダーの悩み

ど、どうすりゃいいんだ…。
俺の悩みは尽きそうもない。
おろおろと落ち着きなく、総理官邸（といっているだけの、ただの小屋）内を動き回っている。ああでもない、こうでもない、そうでもないと、一人空しく騒ぎまわっていた。
「閣下、お早くお決めください」
井上愛子は、相変わらず冷淡な…、もとい丁寧な物言いで、俺に判断を迫ってきた。
お、俺にどうしろというのだ。
井上をジトッと睨みつけながら、俺はハァと大きな溜息を吐いた。

事の発端は三日前。
この頃、既に島内は五月を迎えようとしていた。あれほど満開に咲き誇っていた桜は、盛大ながらも、どこか寂しげに散り始め、穏やかだった風の中にも、どんよりとした湿り気が含まれるようになった。
その事件が起きたのは、そうした日々の中である。
「な、なんだって！」
後藤大輔から報告を受けた俺は戸惑った。呆然と立ち尽くしながら、「まさか」と、問わずにはいられなかった。
「上原が、『神の民』の一人を傷つけた」
後藤は淡々と答え、そして一枚の紙を俺に手渡した。そこには、

処刑執行承諾書

などと記されている。
「しょ、処刑？」

俺が素っ頓狂な声を上げると、後藤は静かに小さく、しかし確かに頷いた。
「法律違反だ。違反者は例外なく死刑に処す。そう決めた以上、如何に上原といっても、死罪に処すより他に仕方ない」
「ば、バカな！　しょ、正気か？」
俺は後藤をぎろりと睨み付けた。彼は淡々と頷き、最後に、
「正気だ」
と、付け加えた。

上原勝正は俺と同じ高校に通い、テニス部で苦楽をともにした親友であった。いわゆる十五少年（少女含む）の一人で、この亡命政府においても、中核的な役割を果たしてきた。
それが…。
傷害事件は死刑と定められている。それは後藤が決めた法律だが、承認し、公布したのは俺だ。そして、上原は傷害事件を起こした。即ち、些細な行き違いが重なった結果、『神の民』の若者を殴り飛ばしてしまったのだった。元々、原住民を快く思っていなかった少年でもあったから、その差別意識がなした業だったのかもしれないが、とにかく、被害者の若者が大怪我を負った以上、上原に対し、何の処罰も与えなければ、身内贔屓だとして、『神の民』たちが怒り出しかねなかった。
「死刑しかあるまい」
と、後藤は言う。彼としては、上原を殺すことで、綱紀粛正を図るつもりらしい。自分たちの仲間である上原でさえ容赦なく処刑したとなれば、今後、法律を軽んじたり、甘く見たりする者はなくなるだろう。さしずめ、彼はそう考えているに違いなかった。
気持ちは分かるのだ。何しろ、最近、俺たちは緩みきっていた。暴君相沢の支配下にあった頃は、皆、規律を守り、ギスギスとしながらも、きびきびと生活していたように思う。だが、今の彼らは違った。指導者である俺が、下手に甘やかしすぎたのが原因だったの

かもしれないが…。とにかく、法律違反すれすれのことを度々しでかし、そのたびに、
「あちゃぁ、やっちまった」
と、全く罪意識もなさそうに、けらけら笑っているだけなのである。
後藤がこうした状況を苦々しく思っていたのは当然だろう。せっかく定めた法律が、次第に有名事実化し、その結果、誰も守らなくなれば、定めた本人としては面白くあるまい。それに、そうした状況が続けば、今はいいとしても、やがて最悪の事態を招くことにもなりかねない。法律（ルール）というものは、人間が文明的な生活を維持していく上で、絶対に欠かすことが出来ないツールなのだから、その有名無実化は断固として阻止しなければならないのである。法律の有名無実化により、文明が崩壊したり、あるいは戦争状態に陥った事例は、枚挙に暇がないほど多いのだった。

上原勝正少年は逮捕され、収監された。
後藤の指揮下にある憲兵が常時監視下に置き、そして、俺の許可が下りれば、いつでも処刑執行が可能なように、準備まで整え始めたのである。
これに慌てたのは、俺や後藤を除く少年たちであった。彼らは怒涛のように後藤の下に押し寄せ、
「上原を殺すのはやめてくれ！」
とか、
「お前は本気で上原を殺す気か？」
なんて言って、彼を散々とっちめ、糾弾したという。しかし、後藤は気にしない。それが最善の処置なのだと言って聞かないのだ。暖簾に腕押しというべきか、とにかく、押しても引いてもまるで動かず、強情なまでに『処刑執行』に拘る後藤の説得は困難と見た彼らが、次のターゲットと定めたのが、俺であった。後藤が例え処刑に拘ったとしても、総理（リーダー）である俺が処刑命令書にサインしなければ、

処刑は執行されないからである。
だが…。
俺の悩みは深い。
後藤の気持ちも痛いほど分かる。しかし、友人たちの思いも十二分に理解できるのだった。出来れば助けたい。誰が好き好んで、無二の親友に、処刑執行を命じなければならないのか。
だが、八百人以上を束ねるリーダーとしては、組織の規律維持と、全体の繁栄のために、処刑を命じなければならない。
要は、理性と感情の板ばさみ。俺個人としては助けたいし、しかし、総理としては殺さねばならない。ほんと、どうすりゃいいんだろう。っていうか、なぜ俺はこんな地獄の決断を強いられているんだろう。つくづく、総理（リーダー）の座が憎らしい。それさえなければ、俺だって反対派の一人に加わり、デモ隊を編成し、『処刑反対』『絶対反対』と大書したプラカードでも掲げてシュプレヒコールをあげていたことだろう。
「新井君、本当に、上原君を殺すの？」
平林めぐみの悲壮感に満ちた声色に、俺の憂鬱はますます強まった。
「…知らん」
俺は苦りきった顔をして、溜息混じりにぼやいた。
「本当に、そんなこと、しなきゃいけないの」
今にも泣き出しそうな顔をして…、いや、既にその両目からは、溢れんばかりの涙がきらきらと光っている。
俺はどうしたらいい？　俺の精神的負担が極限にまで高まった頃、
「閣下」
そこに、井上愛子がやってきた。俺は救いを求めるように彼女を見つめ、そして彼女はこう言った。
「もしも閣下がそれほどまでに命令執行に躊躇なさるなら、それで構わぬと、後藤閣下は仰せです」

「な、なに？」
この女は、何を言っているのだろう。俺や平林は、揃って不思議そうに首を傾げながら、まじまじと井上愛子の極めて冷静な顔を見つめていた。
「法律を執行するのは総理閣下の仕事であり、権限です。閣下が執行したくないと仰せなら、そのまま半永久的に執行せずにいればよいと後藤閣下は考えておられるわけです。そして、何らかの吉事があった際に、特赦という形で、許せばよいのです」
井上愛子は相も変らぬ顔つきで、しかしはっきりと言い切った。そして、それは散々悩み、迷い、考え、苦しんできた俺にとっては、光明のような最良策であった。
「特赦、か…」
そんな手があるなんて、考えも及ばなかった。なんともあっけないようではあるが、しかし、世の中、案外、あっけないと思えるような手が、一番有効であったりすることが多いのだ。実際、今回も、冷静になってあれこれ考え直してみたが、これ以上の手があるとは思えなかった。少なくとも、後藤が頑強に処刑執行を主張している以上、人々は法律の絶対性を意識せざるを得なくなるだろうし、また彼が強硬に処刑執行を主張している限り、『神の民』たちの不満もある程度解消されるだろう。そして、どういう経緯であれ、最終的に殺しさえしなければ、処刑反対派の不満や反発も回避することが出来る。そして、皆がこの事件を忘れた頃に特赦を出し、問題の全解決を図る。
要はこれ以上ないほど八方美人的解決策ではある。しかし、今回の事件は余りにデリケートなので、下手な手を打てば、八百人の団体が一挙に空中分解することにもなりかねないのだ。
「後藤、お前、元々こうするつもりだったのか？」
それからしばらくたったある日。
俺は相変わらず忙しなく働いている後藤の下を訪れ、そう言った。

「知らん」
彼の態度も相変わらずである。
「ふん。相変わらず分かりにくい奴だな」
昔と比べ、こいつは随分と変わった気がする。皆、それなりに変わったような気がするが、こいつが一番変わったんだろうな。少なくとも、悪役に徹するつもりなのだ。どれだけ嫌われても、殺されそうになっても構わないと思っているに違いない。なら、俺はどうすべきなんだろう。
俺も変わるべきなんだ。いつまでも、高校生の精神状態のままではいられない。総理（リーダー）となった以上、その覚悟を以って事に臨まなければならないのだ。再びこういう事件が起きたとき、今回のようにおろおろとしてはいけない。毅然として、「こうだ」と方針を示すのもリーダーの仕事だ。冷酷無情な判断を下すのも、リーダーの責務だ。
なんて考えながら、俺は静かに後藤の下から立ち去った。
フゥ。
リーダーなんて、好き好んでなるもんじゃないな。俺は満天に輝く夜空を眺めながら、ひときわ大きな溜息を吐いて、困ったように苦笑いした。

第17話　深刻化する脅威

六月になったある日。
総理官邸は俺の下に、アシタメ、後藤大輔、佐川新平、遠藤伸介の四名がやってきた。ちなみに俺の隣左右には、首席秘書官の井上愛子と、次席秘書官の平林めぐみが律儀に控えている。だから、この実に狭苦しい官邸内には、合計七人もの人間がいることになるわけで…。はっきり言えば、暑苦しい！
アシタメ、後藤以下四名がわざわざやってきたのには、理由がある。理由がなくちゃ、やってきちゃだめなのか！　なんて突っ込みは入れないでくれ。俺たちはこれでもやたらめったら忙しい身の上なので、これといった理由でもない限りは、誰も俺の下に来たりはしないのだ…、っていうか、俺自身が滅多に官邸にはいないのだから、来ても仕方がないのであるが…。
とにかく、彼らは、ここ一ヶ月間に渡り行ってきた探索の結果を、総理たる俺に報告するべく、わざわざやってきたのだった。

「んで、どうだった？」
なーんて尋ねながら、俺は苦虫を噛み潰したような顔になった。
俺としては、出来るなら自分で探索隊を率いて、探検に出向きたかったのだ。しかし、後藤がそれを許さない。総理（リーダー）たる俺の身に万一のことがあったらマズい。というのが、彼の考え方であり、そのため、俺はこのところほとんど自由に行動できたためしがなかった。いわば、総理なる身分の中に閉じ込められた囚人とでも言うべきか。つくづく、人の上になど立つべきじゃないと、しみじみ思う。
それはともかく。
探検隊Aチーム隊長のアシタメ、同Bチーム隊長の佐川、同Cチーム隊長の遠藤は、それぞれに探索結果を報告したが、その中で特筆すべきは、Aチームを率いたアシタメの報告であった。

「神の池より西側、危ない」
相変わらず淡々とした口調で手短に呟くアシタメから、いろいろと聞き出すのは骨が折れたが、彼が担当した探索区域こそ、俺が最も調べたかった地域であるので、根掘り葉掘り、兎にも角にも、俺はいろいろと尋ね、聞き出す努力を怠らなかった。
「戦争」
不意にアシタメが漏らした、この一言に、皆、驚きの色を隠せぬように「は？」と首を傾げていた。
「要するに、アシタメさんが調べた地域…、神殿より東側だけどさ、今、そこで相沢が戦争を仕掛けているんだと」
すかさず補足説明を入れる後藤だが、それでも俺たちにとってはちんぷんかんぷん、いったい何を言っているのかさっぱり分からなかった。
「あー、後藤よ。もうちょっと詳しく説明してくれないか？　ってか、戦争ってなに？　あいつらが俺たち以外と、何で戦争なんてしてんの？」
俺が皆を代表して尋ねると、後藤はアシタメのほうをちらりと見て、ふぅと静かに溜息を吐いた。
「要するに、あの辺りには、世にも奇妙な猛獣がいるらしいんだ」
「猛獣？」
「そうだ。俺たちが、あそこから脱出する際、相沢の兵が追撃に出てきたけど、唐突に消えたって事件があったろう。あの際、相沢の兵を蹴散らしたのは、どうもその猛獣なんじゃないかってのが、アシタメさんの推測さ」
なんだそりゃ？
俺はすかさず突っ込みを入れたくなった。猛獣？　そんなの、本当にいるのか。第一、そんなのが本当にいるんなら、何で…。
「何で、その猛獣とやらは、俺たちを襲わなかったんだ？」
俺の疑問を代弁するかのように、佐川新平が尋ねると、
「知らん！」

後藤はきっぱりと答えた。
「運が良かったんじゃないのか」
「う、運？」
そんな説明があるだろうか。もっと具体的に、こういう理由だから、俺たちは助かったのだ。という説明を求めていたのに、後藤ははっきりと、淡々と、素っ気無く「運だ」と言い切った。
「運、ねぇ」
ま、そういう可能性がなかったわけでもあるまい。運が良かったのだ。要するに偶然。
「とりあえず、その猛獣退治に相沢が乗り出したってわけさ。それで戦争なんだが…。しかし問題は、こっからだ」
「こっから？」
俺の顔に、またもクエスチョンマークが浮かぶ。
「あぁ。アシタメさんが言うには…。何か、凄まじい武器がいっぱいあったそうな」
「凄まじい武器？」
「あぁ。想像するに、銃、大砲、爆弾…」
「…」
相沢なら、そんなものはいっぱい持っているに違いない。少なくとも俺たちが知っている限りでも、多量の猟銃、ダイナマイトを持っていた。
「いや、俺たちの想像を遥かに上回る量を持っていたそうだぞ。ライフル銃も、アシタメさんの話を聞く分には、百丁以上は確実だそうだ」
「ひゃ、百丁だと？」
「あぁ。それと、アシタメさんに随行していた小林の報告によると、拳銃のような小さい銃もあったそうだ」
「拳銃」
「まあ、それは将校クラスしかもっていないようだが…。だが、それら全てを勘案すると、相沢の武力は果てしなく強まっている。ど

うやって調達したのか知らんけど、武器のレベルアップは凄まじい。俺たちの比じゃない」
　んなアホな！　なんて思ってはみるが、しかしもし本当だとしたら、事は重大である。相沢がそれだけの軍力を手に入れた以上、彼は必ず俺たちの国に攻め込んでくるに違いない。
　相手方は、百丁以上は確実のライフルと拳銃、多量のダイナマイト、矢だって豊富だろうし、剣だって腐るほどあるだろう。それに対し、こっちは…。確かに剣や矢は量産しているが、だからって銃は、共和国から脱出する際に持ってきた三丁のライフル銃があるだけで、弾薬だって全弾合わせて四十発ぐらいしかない。
「それと、ちょっと気になって共和国に放ってあった間者（スパイ）から聞いたことなんだが…。奴ら、鉄の生産方法を変えたらしい」
「生産方法を変えた？」
「ああ。…俺たちのやり方、たたらに砂鉄をぶっこんで、還元して作る、至極単純な製鉄法だろう。しかし、あいつらは…、あんまし詳しいことは分からんのだけど、とにかく、俺たちのより格段にレベルアップした鉄が生産できるようになったらしい」
「…レベルアップした鉄、ねぇ」
「なんでも、格段に強度が上がったらしい」
　同じ鉄でも、作り方や原料次第、質のいいもの、悪いものが出来る。その程度は、いくら理系に疎い俺だって分かる。とりあえずこの島は砂鉄や鉄鉱石などの資源が豊富にあるので、資源面では俺たちも相沢たちも大した差はないだろう。しかし技術となると…。
「とりあえず、相沢の軍勢が猛獣たちを蹴散らしたら、次は俺たちが攻撃されることになる」
　後藤の台詞に、誰もがごくりと息を呑んだ。そんな強力な武器で完全武装した相沢軍と激突して、勝てるとは思えない。
　さて、どうするべきなんだろう。これから俄仕込みで、武器の増強に励んでもよいが…、遅いだろう。しかし、万一敗北するようなことになれば、それこそ地獄である。勝手に脱出し、亡命政府を作

り上げた挙句、相沢と敵対した以上、徹底した弾圧を受けることは間違いない。
「…とりあえず、総力戦体制を敷いて、いざというときに備えましょう。総理閣下、許可を」
結局のところ、それが言いたかったのだろう。後藤のしたり顔を眺めながら、俺はハァと小さな溜息を吐いた。

その後、Bチーム隊長佐川やCチーム隊長遠藤らの報告を聞いて、俺はようやく一人になった。
問題は山積み状態。さて、これからこの世界はどうなるのだろう。
そこに、
「お茶だよーん」
平林めぐみがやけにテンションの高い声色を張り上げてやってくると、俺は何度目になるかしれない溜息を吐いて、「入れ！」と言った。
「大変ですね」
彼女はまじまじと俺の困惑顔を見つめながら、側にある簡易ソファーの上に、我が物顔で、ごろりと寝転がった。
「大変ってなぁ！　他人事みたいに言ってるが、もしも相沢に負けたらお前だって、大変な目に遭うかもしれないんだぞ。…そうだなぁ。昔だったら、女性は必ず敵の慰み者にされるなぁ」
「な、慰み者！」
「そ！　従軍慰安婦みたいな」
俺としては、どこまでもおふざけ。他人事のような顔をして、けらけら笑っている平林を脅かすためにそう言っただけなのだが…。彼女のほうは、真剣な顔をして悩んでいる。もしもそうなったらどうしよう…、なんて頭を抱えて、あぁぁぁと悲鳴を上げていた。
「気にすんな」
そんな彼女の様を見て、俺は「ははは」と笑った。そして、
「俺たちが…、いや、俺が守ってやるよ！」

第１８話　開戦

軍拡競争。

そんな言葉を、よもや自らの肌で感じる羽目になる日が来るとは思わなかった。世界史や現代社会の教科書の中にのみある言葉だと思っていたのに、気がつくと、俺たちと相沢は必死に、せっせと、お互いの軍事力増強に励んでいた。これが軍拡競争でなくてなんだろうか。

ちなみに、国勢調査の結果、俺たちの国の人口は１３６８人ということになっている。相沢国より逃げ出してきた亡命者がそれだけ多かったってことだが、しかし相沢国側には、依然として四千人以上が居住しているとされている。やたらと増えているが、とにかくスパイたちからの報告によれば、四千人以上は間違いないというのだった。

そして、俺たちの軍隊は、総兵力５６７人。これでも無理に無理を重ねた大動員であるのだが、スパイからの報告によると、相沢側の戦力は、少なく見積もって１４００人。さらに増やしているとすると、１６００～１７００ぐらいであろう。まさか二千人とはいわないだろうが、しかし、相沢のことだ。それぐらいの超軍事国家を築き上げているかもしれない。

兵力だけじゃない。武器だって必要だ。

ってなわけで、ここ数ヶ月、後藤が主導する形で武器生産に拍車がかかっていた。剣や矢、あるいは投石器など…。はっきり言って、近代兵器って意味では、俺たちに全く勝ち目はないので、後藤は開き直ったかのように旧式兵器の量産に励んでいた。ハイテクに立ち向かうにはローテクしかない、ってな考え方である。

「勝てんのか？」

必死になって大型の投石器を作らせている後藤の下に歩み寄り、

ふと浮かんだ疑問をぶつけてみる。
「勝てるさ」
後藤はきっぱりと言って、にやりと不敵な笑みを漏らした。
既に投石器は四台ほど完成している。今は五台目の建設にかかっているわけだが…。秘密倉庫には、弾丸となる大岩などが多数収納されている。
「ふーん。けど、投石器ねぇ。…なんか、映画みたいだな」
古代の戦争を描いた大作映画だと、必ず登場する投石器。火薬とか大砲とか、そんなものがない時代における唯一無二の大量破壊兵器。城壁を叩き壊したりするときに、これほど有効な武器もない…、とでも言わんばかりに映画内でフル活用されているが、その圧倒的迫力シーンを思い浮かべながら、
「ま、頑張ってくれ！」
後藤の肩をぽんと叩いた。

七月、八月。月日が流れるように過ぎていって、九月。
漂着して、丸二年が過ぎた。もちろん、救助船なんて来る気配さえない。このまま半永久的にこの島に暮らし続けねばならないのだと、誰もが思っていた頃。
島を二分する大戦争の幕が切って落とされた。
それは、暑苦しかった真夏が終わりを告げて、秋風が大地をなめるように吹き抜け始めた頃のこと。あれだけ青一色に染まっていた空が、紅蓮にも似た紅色に染まり始めた初秋の季節。相沢修平自ら率いる国民政府軍の大艦隊が、ヤマト湖全体を覆いつくすかのように、怒涛の如く、猛然と、俺たちの国に押し寄せてきたのだった。
「敵艦隊、およそ四百隻！」
湖を覆いつくす大船団を、双眼鏡にて呆然と眺めていた俺の下に、冷酷極まりない急報が届く。
「よ、四百…」

側に控えていた平林めぐみの顔が、一瞬にして青ざめる。
「基本的には小船が主だが…」
双眼鏡から見える敵の艦隊は、まあ、艦隊って言葉がべそかいてしまいそうなほど貧相な代物ではあったが…。しかし狭い湖とはいえ、湖全部を覆いつくすほどの数は凄まじいというべきだろう。
「報告ッ！」
物見櫓から降りて、本陣に戻った俺の下に、斥候として敵情視察に出向いていた佐川新平とその部下数人が戻ってきた。
「どうした、佐川？」
俺に代わり、副官の後藤が尋ねる。
「敵軍の総司令官は相沢で間違いない。あいつ自身が先頭に立って全軍を率いている」
「…相沢自らが？」
あいつのことだ。軍の指揮なんて面倒くさいことは部下に任せて、自分は贅沢極まりない官邸でのんびりワインでもかっくらっているに違いないと思っていたのに…。それが、あいつ自ら出張ってきたという。真意なんてわかるはずもないけれど、まあ、それだけあいつも本気なのだろう。四百隻もの艦隊を繰り出し、ほとんど総力戦に近い兵を繰り出してきた以上、奴は間違いなく本気で俺たちを叩き潰すつもりなのだ。
「報告、報告ッ！」
またしてもやってきたのは、味方の戦闘態勢が整ったか否かを確認すべく前線視察に出向いていた上原勝正であった。かつて、重大なる法律違反をしでかして、俺にやたら精神的負担を強いた元凶であるが、今は俺の忠実なる側近として、何をするにも精力的に働いていた。
「わが軍の戦闘配置、完了いたしました！」
上原の報告に、俺ではなく、後藤が真っ先に「よし！」と頷き、
「投石部隊の準備はどうだ？」
立て続けに、そう尋ねていた。

「御命令があれば、即、発射できるとのこと」
「そうか」
後藤はふぅと静かに頷き、そして、俺のほうをまじまじと見つめてきた。攻撃命令を出せ！　とでも言いたげな顔を見て、俺はゆっくりと観念した。
「後藤！　お前に全て任せるよ」

戦いが始まった。
俺はずっと双眼鏡から状況を確認している。
えーと。戦力は、こっちが約六百。敵は少なく見積もって千五百。まともに戦えば、勝ち目などない。しかし、戦いは数じゃない。作戦次第だ！　かつて織田信長は今川義元の大軍を撃破したじゃないか。アレキサンダー大王だって、圧倒的なペルシャ軍を撃破したではないか。旧日本軍の栗林中将だって、圧倒的な米軍を硫黄島で食いとどめ続けたじゃないか…、って、栗林さんは最終的に負けちゃったか。いや、それはともかく、古今東西、寡兵でもって大軍を撃破したって事例は多いんだ。だから、俺たちだって、兵力で劣っているからと確実に負けるわけじゃない。
しかーし、はっきり言って、作戦なんて決めたかな。総大将であるはずの俺は、全てを後藤に任すとしか言っていない。後藤がどういう作戦を考えているのか知らないが、はてさて、こんな状況で俺たちは本当に勝てるのだろうか。
なんて思っていると、不意に、

ドォォォォォォォン。

凄まじき轟音が響き渡り、俺はぎょっと飛び上がった。
これは、砲撃？
「申し上げますッ！　敵艦より一斉砲撃を浴びております」
無垢な顔をした少年が、ひょこひょこやってきて、そう告げた。

床机の上にでんと構えながら、如何にも大将です！　と言いたげな格好を保っていた俺は、そんな少年の言葉に、思わずハァと小さなため息を漏らした。
「閣下」
そこに、井上愛子の糾弾するような言葉が飛ぶ。俺は慌てて口を閉じ、顔を整え、如何にも大将っぽい、堂々たる表情を作った。
何も言わない。何もしない。笑わず怒らず、騒がず、泣かず…。大将ってのは辛いものだ。特に、全ての指揮を部下に委ねて、完全な象徴に収まっている大将というものは実に辛い。任せてしまった以上、余計なことを言うわけにもいかないし…（そんなことをやったら、指揮命令系統は乱れ、軍は空中分解することにもなりかねない）。うーん。宰相管仲に全権を委ねちまった斉国の桓公もこんな感じだったのだろうか。諸葛孔明に頼りきった劉備玄徳や、桂小五郎や高杉晋作ら家臣に藩政の実権を委ねてしまった『そうせい侯』こと毛利敬親なんかもこんな気分だったのだろう。
とにかく、何も言わぬ大将ほど辛く、大変なものはないと、しみじみ痛感させられている俺なのだった。

戦いは…。
熱戦、激戦、超激戦。
少しばかり離れたところにある本陣に、置物の如く飾られている俺ですらわかるのだ。ならば、最前線は大変なことになっているに違いない。
ただ、今のところ、両軍ともに真っ向勝負になっているわけではないようだ。敵は砲撃に終始しているようだし、俺たちも、投石器による投石攻撃や弓矢などを使った遠距離攻撃に徹しているようだ。
そこに…。
「報告よ！」
平林めぐみが慌しく駆け込んできた。
「敵に動きありだって」

「動き？」
俺が、如何にもいかめしい顔をして尋ねると、
「え、えーと。じょ、上陸するみたい」
「上陸？」
「うん」
平林の報告に、俺は苦りきった。いよいよ戦いは本格化。これからが正念場なのだ。負けられない。負けるわけにはいかん。勝つしかない。
ふぅと息を吸い込み、ハァと吐く。俺って、なんて無責任な大将なんだろうな。これでも本当に大将なんだろうか。なーんて思いながら、
後藤よ！　お前に全てを託した。必ず勝ってくれよ！
と、心の中で、十字架を切るようにひたすら願っていた。

第19話　終戦

戦いが終結したのは、戦いが始まって四日ほどたった後のことであった。

結果は…、Ｄｒａｗ（ひきわけ）。

ま、激戦ではあったらしい。そりゃ、激戦地となった湖岸あたりを見れば、一目瞭然である。凄まじい砲撃をもろに喰らったためか、クレーターのような凸凹があちこちに生み出されているし、木々なんかも悉くなぎ倒されて、見るも無惨な、惨憺たる地獄が広がっていた。それに兵の半分以上は重傷を負っている。死者も数十人単位で発生した。

「まさにノルマンディー上陸作戦のようだったね」

後藤はそう言った。

「ただし、結果は逆だけど」

そう言う彼は、自信に満ちた、如何にも昔の後藤大輔らしい顔をしていた。でんと胸を張り、「はっはっは」と笑う。まあ、我々が蒙った凄まじき犠牲を考えれば、笑っていられるような暇などないのであろうが、それでも上陸すべく圧倒的勢いで押し寄せてきた敵軍を何とか防ぎきったのだ。前線司令官として、事実上全軍を仕切っていた後藤が高笑いしたくなるのも無理はなかった。

「ノルマンディー、ねぇ…」

もれるのは苦笑いだけ…。よもやそんな言葉を、己が肌で感じる日が来るなんて、夢にも思わなかった。けど、普通誰だってそうだろう。ノルマンディー上陸作戦って言っても、今から数えて六十年も昔の古典だ。俺たちにとっちゃ、歴史の中に渦巻く様々な用語の一つに過ぎない。それに似た光景を目の前に見せられて、何ら感慨を抱かない奴がいたらここにつれてきて欲しい。一度、そいつとさしで話し合ってみたい。

ちなみに、ノルマンディー上陸作戦とは、第二次大戦末期に行わ

れた戦争の一つであり、簡単に説明するなら、米英仏（この場合のフランスってのは、ド・ゴール将軍率いる自由フランス政府のことであって、ペタン元帥率いるヴィシー・フランスじゃないので注意）を主軸とした連合軍が、ナチス・ドイツに止めを刺すべく、フランス国内にあるノルマンディーって港町に場所に上陸しようとして、待ち構えていた独軍と激突した戦い…、だったはずだ。結局、独軍が敗北し、連合軍が勝った。その結果、無事にヨーロッパ大陸に上陸を果たした連合軍はナチス軍の支配下にあったパリを解放し、ついでドイツ本国に兵を向け、戦局不利を悟ったアドルフ・ヒットラー総統はベルリンの総統官邸地下室にて愛人と自殺する。かくして、第二次大戦は収束に向かうことになるわけだ。

って、そんなことはどうでもいい。とにかく、そんなノルマンディー上陸作戦にも似た、凄絶な戦いであったということが言いたいのだ。

俺は講和協定を結ぶべく、大本営を出、副官の後藤大輔以下二十名ほどの護衛部隊を引き連れて、ヤマト湖湖岸に出向いた。そこには既に相沢修平と、その親衛隊たる数十人が控えていたのだが、悔しそうに顔を歪める彼らの様に、俺はなんとも言えぬ優越感を覚えた。

形はＤｒａｗ。だが、実際はＶｉｃｔｏｒｙ（しょうり）と言うべきだろう。何しろ、俺たちの劣勢は誰の目にも明らかだったのだ。兵力も武装も、何から何まで圧倒的劣勢に立たされていた俺たちの敗北は、はっきり言って決定的だった。明治時代初期、関ヶ原の合戦における東西両軍の布陣図を見て、速攻で西軍勝利と断言したプロイセン王国の軍人クレメンス・ウィルヘルム・ヤコブ・メッケルがこの戦いを見たら、必ず俺たちの敗北と相沢の勝利を断言していたことだろう。

要するに、それだけ俺たちは誰が見ても不利な状況に追い込まれていたのに、引き分けに持ち込めたのだ。これを勝利といわずして

何と言おう。
そう。俺たちは勝ったのだ！　相沢に勝ったのだ！
それは、相沢修平の悔しそうな顔が何よりも証明していた。

「今後、両国はお互いの領土領海を侵犯しない」
ごく当たり前の条項ではあるが、とりあえず念押ししておく。でないと、この男は性懲りもなく、再び軍隊を編成し、攻め込んでくる可能性があった。いっそ賠償金…、もといそれに準じた何かを要求してもよかったのだが、形の上では引き分けってことになっているから、それはさすがに無理というものだった。
「そして、両国の国境は、この湖を境とし、湖の領有権は、それぞれ西半分を大和共和国が、東半分を大和国（俺たちの国の名前）が保有するものとする」
後藤大輔がそう言うと、相沢修平大統領閣下様は渋々、
「わかった」
と頷いていた。
それに合わせ、共和国政府側の書記官たる古谷亜子女史と、俺たち側の書記官井上愛子女史が、それぞれの協定書に、すらすらと内容文を書き記していった。
俺はそんな様をぼんやりと眺めている。交渉はほとんど後藤がやってくれているし、その内容は井上愛子が書いている。俺の役目は、全てが終わった後で大和国の代表として、和平協定書にサインするだけ。それまでは、ただじっと雛人形のように座っている。
空しいとは思わない。それが俺の仕事なのだ。実務は後藤が仕切る。それは彼の仕事。第一、頭の悪い俺が全てを仕切るより、後藤が仕切ったほうが遥かに効率がよいのだ。なら、後藤に全てを委ね、俺はその後押し役に回ったほうが組織的にはいいだろう。無能な俺がいらぬ口を出してかき乱すより、有能な後藤が全てを仕切っちまえば、何一つ問題はなくなる。
なら、リーダーは俺じゃなくて、後藤がなればいい…、いや、な

るべきだ。誰だってそう思うだろう。俺だってそう思う。しかし生憎、後藤という男は、自分が頂点に立つ気など更々ないらしかった。頂点に立ちたいという野心がないわけでもないようなのだが、彼曰く「自分はそんな器じゃない」らしい。

「いいかね、新井君！　人にはそれぞれ器ってものがあって、俺はリーダーの器じゃない。しかし、君はリーダーの器だ。だから君がリーダーになれ。俺はどっちかって言うと、補佐役の器だ。だから補佐役になる」

昔、彼はそんな風に言っていた。

そんなもんかね。

ま、とにかく後藤大輔と相沢修平の間で、基本的な和平協定内容が取りまとめられたようで、ここからは俺の仕事だった。後藤は恭しく引き下がり、代わって俺が相沢と相対した。

俺とは好対照に、万事全て自分が決めねば気がすまない独裁家の相沢は、最初から最後まで、今の場における共和国側の主役の座を占めていた。相変わらずだな、なんて思いながら、俺は思わず苦笑いした。

「いい気になるなよ」

両首脳による協定調印後の一幕。

相沢は、じろりと俺を睨み付けて、そんな風に吐き捨てた。

「別に、いい気になんてなってませんよ。ま、純粋に嬉しいんですよ。あなたに勝てたことがね」

どうせ非公式の場だ。何を言ったって構うまい。

「勝った？　のぼせ上がるな。あれは俺たちの勝ちだ」

負けず嫌いは昔から。如何にも相沢修平らしい顔を前にして、俺はクスりと苦笑いした。

「さて、どーでしたかね。ですが、結局上陸できずじまいで引き上げざるを得なかったでしょう。形は引き分けですが、実質は俺たちの勝ちですよ。何しろ、俺たちは防衛ラインを死守しえたんですか

らね。逆に、あなた方は攻略すべきポイントを攻略できなかった」
勝ち誇ったような声。侮りきったような顔。我ながら面白いぐらい、挑戦的な態度をとっていたように思う。しかし、別に悪いことだとは思わなかった。
「…よかろう。そう言うなら、再び全軍に総攻撃を命じて、今度こそ湖岸を奪い取ってやるぞ。それでもいいか？」
我慢ならない相沢は、ついに伝家の宝刀を振りぬいた。
「別に構いませんよ。ですが、そのときは二度と、あなたは御自分の国に戻ることはできないでしょうがね。…あ、そうだ。いっそ、あなたにも牢獄の辛さを味わわせてあげますよ。結構、あれ、辛いんですよ。狭苦しい、衛生も悪い部屋に一日中押し込められているってのは」
「…」
勝った！　そのときは純粋にそう思ったね。まさか今更、相沢も再び攻撃命令など下せないだろう。もしも本当に下すつもりなら、ここから生かして返さないが…。
相沢は悔しそうに「ぐぬぬ」と唸っている。
「覚えとけよ！」
なんて言いながら、部下を引き連れ、逃げるようにボートに飛び乗り、去っていく。そんな後姿を眺めながら、俺は「わっはっはっは」とこれみよがしに高笑いしてやった。
どーだ！　思い知ったか！
俺もまだまだ子供である。しかし構うものか。俺たちが勝ったのだ。笑ってやって何が悪い。勝ち誇ってなにがいけない。

その後…。
戦争がもたらした代償は、俺たちのその後に重くのしかかってきた。町は壊れるし、森は焼かれるし、畑は荒れるし…。勝利っていう名誉と誇り以外に何一つもたらしてはくれない戦争のために負った損害を考えると、戦争の無意味さというものを改めて痛感せずに

はいられなかった。
ハァ。
俺は何度目になるかしれないため息を吐いて、困ったように周りを見た。それでも、とりあえず脅威は去ったのだ。国民の目から不安や恐怖の色が取り除かれただけでも、今回の戦いには大きな意味があったのかもしれなかった。
などと思いながら、俺はとぼとぼと官邸に戻る。さて、これからどうすべきなのかな。いろいろと頭に思い浮かべながら、町のど真ん中にある官邸にたどり着いた。
すると…。

「あちゃぁ」
俺じゃない。それは平林めぐみの声だった。
「壊れちゃったね」
どうやら、官邸の近くでずっと待っていた（？）らしい。とにかく、ずっとそこに佇んでいた女は、人を小ばかにしたような笑みを浮かべて、俺の下にやってきた。
「他人事みたいに言いやがって！」
俺もまた、つい憎まれ口を叩いた。
「他人事だもん」
彼女はきっぱりと言い切り、俺は返す言葉を失って、「ぐぬぬ」と唸った。
「ところで、壊れちゃったね」
見れば、砲弾の直撃を受けたような跡がある。生々しい、戦争の跡であった。その結果として、当然のように、俺の家たる官邸は見るも無残な形となって、目の前に晒されているわけだが…。
「今夜、どーすんの？」
知らん。野宿でもするさ。
「総理大臣閣下ともあろう御方が？」
俺はしばらく「うーん」と唸り、考え、しかし結局他に答えなど

見つからないので、
「総理だろうと何だろうと、家がなければ野宿するしかないだろ」
と、言った。
「野宿ねぇ。でも、そろそろ秋だし、夜は寒いでしょ。だからさ、私の家でも来たら」
「お前の家？」
「そ！　ま、小さな家だけど」
ちなみに、俺を含む幹部たちは皆、個人の家を持っている。無論、個人の家というより、それぞれの身分に応じて割り当てられる公邸という位置づけではあるが…。一般国民が、何人かでルームシェアを余儀なくされている中、俺たちは随分恵まれた環境にいるのだ。
そして、平林めぐみも、れっきとした幹部なのだった。立場は総理次席秘書官。当然、公邸という名の個人宅を持っている。
「…うーん。そうだなぁ。お前がいいってなら、お邪魔させてもらおっかな」
空模様は、随分と危うい。野宿の最中に夜雨でも降られたらたまらん。などと思いながら、俺は勿怪の幸いとばかり、彼女の提案を快く引き受けることにした。
ちなみに…。今の俺に、年頃の女の家に出向くことが、どういう意味を持っているのか判別する精神的余裕はなかった。戦争に勝った！　っていう高揚感と、これからどうすべきかという責任感の狭間にあって手一杯の俺は、ほいほいと平林についていって、とりあえず官邸が再建されるまでの数日間、そこで過ごすことになったのだった。

その後のことを、少し言おう。
戦争に勝利し（形の上では引き分けだが）、とりあえず国家基盤が固まったことで、俺はようやく、本格的な政府作りに着手できるようになった。即ち、これにより、これまで曖昧だった副リーダーの後藤大輔や、その他の幹部たちの地位や権限、立場を確定させる

ことが出来たのだった（戦争前にやっとけという突っ込みは入れないでくれ）。

後藤は副総理兼財務大臣兼総務大臣兼法務大臣兼国防大臣になり…、って、要するに全権を握っただけの話だ。ただし、外務大臣は総理たる俺が兼任。さすがに何から何まで後藤に委ねるわけにもいかず、とりあえず外交ぐらいは俺が責任を持って取り仕切らねばなるまいと思ったのだ。っていうか、ただでさえ忙しない有力閣僚の座を全部兼ねてしまった後藤に、外相の座まで兼任させれば、過労でぶっ倒れてしまいかねなかった。だから俺が兼務したのである。実務のほうは…、まあ副大臣とかそういう幹部に任せりゃいいだろう。

えーと、ほかの閣僚はというと…。井上愛子が総理首席秘書官兼官房長官、佐川新平が厚生大臣、遠藤伸介が環境大臣兼国土交通大臣、佐藤高次が国家公安委員長になった。平林めぐみは総理次席秘書官兼外務副大臣だ。

そして…。

新たに国家主席職が新設された。っていうと、なにやら某共産主義国家のトップのような感じがするが、しかしはっきり言って、名前には余り意味はないのだ。国家が固まった以上、元首も設けるべきだろう、って議論からスタートし、いざ設置するとなったとき、大統領では相沢を真似ているようで癪だし、かといって国王とか皇帝と名乗らせるわけにもいかないだろう。で、ふと思い当たったのが国家主席だったというわけである。

ま、いずれにしても形だけの元首である。要するに象徴元首ってやつだ。ドイツやイタリア、イスラエルあたりの大統領を連想してくれるとわかりやすいかもしれない。権限こそないが、総理の上に立って、祭祀や儀礼などを司る名誉職である。任期は三年。

そして、この主席職には『神の民』リーダーのアシタメが就任した。主席選挙の結果…、っていうか、彼以外は誰も出馬していなかったのだが、とりあえず、選挙の結果、彼が初代主席に選出された

のである。ただ、全くの名誉職では、アシタメ主席の支持母体たる『神の民』の人々も怒るので、アシタメ主席には同時に国民会議議長を兼任してもらうことにした。ちなみに、国民会議ってのは、要するに国会のようなもので、法律案や予算案を審議したり、あるいは総理解任権を持つ。国民会議議員は、政府幹部に連なっていない国民の中から、くじ引きで選出する決まりにした。任期は一年。

十月。

俺はアシタメ主席より改めて総理大臣に指名された。まあ、俺以外に、今のところ総理就任適格者はいないらしいから、そんなことをする意味はさしてないのだが…。しかし、総理大臣ってのは、国家元首が指名するものだ。総理と名乗るからには、この原理原則は守らねばなるまい。だから、これでようやく俺は正式な総理になったわけである。

政府は固まる。復興も進む。

いよいよ順風満帆。向かうところ敵なし。どんな危機も、どんとこいだ！　迎え撃って、追い散らしてやる。

なんて思いながら、俺はぐびぐびと、勢いよく、平林めぐみ総理大臣次席秘書官兼外務副大臣の淹れたお茶を飲んだ。

温い！

とりあえず、後で叱っておくことにしよう。

第２０話　平和な騒動

年明けした頃。正確には神武（じんむ）四年の二月と表現すべきなのだろう。
神武ってのは、元号だ。去年十一月頃に開催された第一回国民会議で制定され、公布された代物。この島に来てから何年たったのか、とか、今は何年何月なのか、ということをより簡潔に知るためのツールとして、元号導入は国民会議開幕速攻で承認されたのだった。
ちなみに、神武の由来は、あえて言うまでもないだろうが、偉大なる日本国の初代天皇、神武天皇より拝領したものである。
神武元年は漂着した年を指すから、俺たちの歴史は、神武元年九月から始まるわけだ。そんでもって、神武二年の九月には、相沢の下から脱出して、俺たちは俺たちの新国家を作ると言う重大事件が勃発し、その翌年たる神武三年の九月には、攻め込んできた相沢の軍勢と大激突した。
そして迎えた神武四年の二月である。
新政府の基盤も固まり、国家作りも軌道に乗った。総理たる俺の政権基盤は着々と強まり、正月に行われた世論調査では、支持率９５％という異常な高値を叩き出した。
まさに順風満帆。向かうとこ、敵なし。
しかーし。
そんな俺だが、何一つ問題がなかったというわけでもない。まあ、他人から見れば至極個人的な、他愛のない問題であったろうが、俺にとっては、随分と大変な問題であった。

色恋沙汰。
それが、今の俺を悩ませる、厄介極まりない大問題であった。
まあ、俺だって、まだ二十歳近い、年頃の青年なわけで、異性ってものに興味がないわけじゃない。彼女を持ちたい。と思う気持ちは強い。けど、そんな暇じゃないのだ。俺にはやるべきことが山と

いうほどにある。恋人などに現を抜かして、それを投げ出してよいものじゃあるまい。
それに…。
今のところ、好きな人がいないのだ。まあ、気になる人はいないでもないが…、いや、これは失言だ。はっきり言おう。俺は、今のところ誰も好きではないし、嫌いでもない。
なのに…。
「閣下は、平林副大臣と付き合っておられるのですか？」
首席秘書官兼官房長官。井上愛子は、いつもの口調で、いつもの顔で、しかし、らしくない疑問をぶつけてきた。
「はぁ？」
俺の頭は、一挙にクエスチョンマーク一色に染まった。
「しかし、国民はそのように噂しておりますよ」
そう言いながら、彼女は、一枚の紙を取り出して、俺に手渡した。
そこには、
『新井総理、秘書官と交際か！』
なんて、如何にもスポーツ紙か芸能雑誌が好みそうなタイトルが、でかでかと記され、その下には、俺ですら知らないような、俺と平林秘書官の色恋を巡る騒動が、事細かに書き記されていた。
「んな、あほな」
まさに唖然。ひたすら呆然。なんて突っ込むべきか、なんてことを考えていると、
「総理！」
そこに、渦中の人たる平林めぐみが、騒々しく怒鳴り込んできた。
「これはどういうことです！」
彼女の手には、やはり例の紙があった。
「どういうことって言われても、知らんよ」
ひたすらに戸惑うばかり。どういうこと！　なんて聞かれて、はい、こうですと答えられると思っているのか。俺だって、「どうなってんだ！」と声を荒げて叫びたいくらいだというのに…。

「これは、大和日報（あいつら）の仕業だな」
とりあえず冷静を装い、ため息混じりに呟くと、
「そうですね」
いつも通りの冷静さで頷く井上愛子であった。
ちなみに、大和日報ってのは、わが国に存在するメディアである。従業員数二十人足らずの小規模メディアではあるのだが…。しかし、設立以来半年間、政府や国民議会の決定事項を国民にわかりやすく伝えたり、あるいは俺たちのような政府高官の日常、スキャンダルを面白おかしく書き連ねて、積極的に報道している。ま、俺たちにとっちゃ、天敵みたいなものだ。
で、その大和日報が、今回、俺と平林の色恋沙汰をスクープしたというわけだ。
「ま、全く、私たちはそんな関係じゃないんだからね」
平林はプイッとそっぽを向いて、その小さくもかわいらしい顔をイチゴ色に染めて、恥ずかしそうに俯いた。

全く、メディアってやつは…。
毎日のようにパパラッチにしつこく追い回されている有名芸能人の気持ちが、今の俺には痛いほどよく分かる。ほっといてくれ！俺の恋バナなんか知ってどうするんだ？　と、言ってやりたい気がしたが、考えてみたら俺はこの国の、紛れもない総理大臣なわけで…。みんなが注目するのも無理はないのかもしれなかった。まあ、もし俺が国民の立場なら、我らが総理の色恋話には興味を抱いたかもしれない。俺が日本にいた頃、総理大臣かそれに準じる大物政治家に色恋話が持ち上がれば、確かに気になってテレビ、あるいはネットに釘付けになっていたかもしれない。
だからって…。
みんな、ほかにやることはないのか？　ほかに気になるニュースはないのかよ。って、ないのか。この島には、生憎テレビもネットもゲームだってないわけで…。大和日報なるマスコミの発する新聞

（と呼べるほど紙面は充実してないが）は、国民にとって唯一無二に等しい娯楽なのだった。
「ま、結婚しちゃえよ。ファーストレディがいたほうが、お前も楽だろう」
　ある日、後藤はそんな風に言ってからかってきた。くすくす笑い、そして、「まさか、お前と平林がなぁ」なんて言っている。如何にも驚いています、といわんばかりの露骨な顔に、
「バカぬかすな」
　俺は呆れたようにため息を吐き、そして自棄酒でも呷るかのように、そこにあった水をぐびぐびと勢いよく飲み干していった。
「ま、今やお前は一国の主だ。だから、付き合う相手は選ばんといかんけど…。けどお前は、一国の主である前に一人の青年でもあるんだからさ。平林が好きなら、付き合ったっていーじゃんか。平林なら、相手としては全く問題なし！　俺が太鼓判押してやるよ」
　だーかーら、何度言えば分かるのか。俺は別に平林めぐみが好きなわけでもないし（嫌いじゃないが）、付き合いたいわけでもない。
　しかし、誰も聞く耳を持ってはくれないようだった。後藤までもが、小面憎いほど冷静な顔をして、「付き合えばいいじゃんか」と言う。
　全く、どうしたらいいのやら。

　二月。
　この、なんだかよく分からない島にも、冬という季節はやってくるようで、辺りの大自然も、随分と味気なくなった。ま、どうせ後一ヶ月もすれば春だ。そうなりゃ、また辺りは嫌でも華やかな春色に染まるはずだった。なら、今のうちに、一年に一度しかない冬って季節を堪能しておくのも悪くない。
　…とは思うのだが。
　しかし寒い。とにかく冷たい。このところ厳しさを増して、ますます凄みを増した寒さに凍えながら、俺と平林は、困ったような顔

をして、今後のことについて協議していた。
かたや総理大臣兼外務大臣で、かたや総理大臣次席秘書官兼外務副大臣。
しかーし。そんな肩書きをいくら書き連ねたところで、二人はまだ二十歳間際の少年少女に過ぎないのだった。
「どうすんの！」
まず、糾弾するような平林の声。
「全く、このままじゃ、本当に私たち、付き合わなきゃいけない破目になりそうよ」
ジトッと睨みつけるかのような視線を浴びる。
っていうか、俺のせいか？　俺の責任なのか？
「そうに決まってるでしょ。あんたが私の家に泊まったりするから、あんな記事を書かれて…」
いつだったか、官邸がぶっ壊れて、平林の公邸に寝泊りしたことがある。実際、皆の誤解はそこから始まっているわけなのだが…。しかし、泊まっていいよと言い出したのは平林なわけで、そりゃ、確かに俺も不注意だったが、全責任が俺にあるって言い方は間違っていやしないか。
だが、この際、男らしく全責任を認めて謝すべきなのだろうか。男らしくというより、俺は彼女の上司であり、まがりなりにもこの国の頂点に立っている男なのだから、自ら素直に責任を認めて、謝っちまうべきなのだろう。なんか理不尽な気がしたが、
「ごめん！」
とりあえず謝る。ま、俺と並ぶ当事者たる平林に謝ったところで、何がどうなるというわけでもないのだが…。
しかし謝る。すると、平林の態度も軟化した。
「と、とりあえず…。とりあえず、誤解を解かないと大変なことになりそうね。私たちはなんでもない。そう主張し続けることが大切よ」
恥ずかしそうに俯きながら、もじもじと喋る。時折見え隠れする

顔は、思いのほか真っ赤に染まっていた。けど、自分で言うのもなんだが、随分と鈍感な俺には、彼女の真意など分かるはずもなく、ただなんとなく怒っているだけなのだろうと思っていた。
一方の俺は、焦ってこそいたが、彼女に比べれば沈着冷静そのものだった。これといって表情に変化はない。口調もいつも通り。しかし、そんな俺の態度が気に食わないのか、
「総理は、あんな恥ずかしい記事を載せられても、案外冷静なんですね。さすがは総理大臣閣下。尊敬します」
なんて、あからさまな皮肉を吐いて、ふんとそっぽを向いてしまった。

結局。
俺たち二人は、真剣なる協議の結果、今後、ありとあらゆる報道に対し、完全にＩｇｎｏｒｅすることにした。要するに無視だ。過剰に反応するから、皆、大騒ぎするのだ。ならば、何事もなかったかのように平然と振舞っていたら、皆、自然に落ち着くだろう。
と、思ったわけなのだが…。
確かに過剰極まる報道、噂話はどっかに消えた。しかし、騒ぎの拡大を恐れる余り、明確に否定することもしなかったので、俺と平林の関係は、いつの間にやら彼氏と彼女ってことで国民たちに認識されるようになってしまったのだった。
どーすりゃいい。
ハァ。

第２１話　第２次遠征（前編）

ヤマト山とは、わが国より南方に進んで六キロほど行った場所にある山のことであった。その麓は富士の樹海やアマゾンのジャングルを髣髴とさせるような大樹林によって覆い尽されており、なんとなく太古の神秘が漲る、不可思議な大地であった。

標高は二千メートルはあるだろうか。富士山には劣るが、しかしそれに勝るとも劣らぬ美しさを誇っている。山頂のほうに、まるでリングのようにかかっている雲は、夜と雨、曇りの日以外は常にそこにあって、ヤマト山の壮大さ、雄大さをこれ以上ないほど強調していた。

ちなみに『神の民』の人々は、これを『神の山』と呼んでいた。いつもながら至極単純な名であるが、読んで字のごとく、この山には、神がいると信じられていたようなのである。ちなみに、神ってのは、随分昔に例の神殿で見た、実に奇妙な、人であって人でないような化け物のことらしい。

「あの山、神いる。万物の恵み、あの山から来る」

ある日、アシタメ主席はそう言って、俺たちに対し、山の説明を始めた。

彼曰く。

始祖神マダと結ばれて、『神の民』の先祖を産み落とした大地の女神エウアが光臨した場所こそが、この『神の山』、俺たち風に言うところのヤマト山らしかった。そんでもって、エウア神はひとしきりやるべきことを終えてしまうとこの山にお隠れになり、以後、その御姿を二度と人間界に現さなかったのだという。

よくありがちな神話ではあるが…。しかし、神話をバカにする事勿れ！　かつて、偉大なる考古学者シュリーマンは、神話と目され、伝説と見做されてきた古代トロイの遺跡を発掘し、世界の歴史学を

根底から覆したではないか。神話ってのは、要するに何らかの史実を基にして作られている場合が多いのだ。だから、もちろん神話の１００％が史実であるはずもないが、５０％、あるいはそれ以下でも、必ず史実と重なる部分があるはずなのだった。

俺はその後もアシタメ主席の下に通いつめて、彼らが代々言い伝えてきた神話や伝説の類を悉く聞きだした。始祖神マダのことや大地の女神エウアのこと…。神話って言うのは、案外面白いもので、アシタメも嬉しそうに、楽しそうに、ぺらぺらと、次から次へ数多い神話伝承伝説を話してくれたのだった。

それによると…。

まあ、とにかくたくさんあるので、全部ここで説明するのはさすがに無理なのだが…。とりあえず、二、三個ほど取り上げてみよう。それでは、まず一つ目！

この島を創造し、人間を除く動物植物を作り上げたのは『大地の女神』エウア神であったという。それゆえ、彼女は『創造神』とも呼ばれているらしい。しかーし。そんな彼女ですら、“人”だけはどうしても作れなかった。高度な知能を持ち、発達した感情を持つヒトを一人で作るのは至難の業であり、それゆえ彼女は、『神の池』より現れし『智の化身』たるマダ神の力を借りることにしたのだという。男神たるマダと女神たるエウアの間には長男エル、次男アノ、三男ナタスの三人の子が生まれたが、そのうち長子エルは神の座を引き継ぎ、三男ナタスは堕落して邪神と化し、そして次男のアノが人間の祖になったという。

続いて二つ目！

その『始祖神』とか『智の化身』と称えられているマダ神であるが、顔は人間、しかし頭からは鬼の如き角を生やし、ゴリラのような体躯と蝙蝠の羽を持つという異形であったと伝えられている。それゆえ、彼の血を分けて生まれた三人の子は、彼の特徴をそれぞれ引き継ぎ、長子エルは鬼の如き角とゴリラの如き体躯を誇り、次男

アノは人間的容姿体躯を獲得。三男ナタスは蝙蝠の羽を持って、自在に空を舞ったという。ただ、いずれにしても、この三人は強大な神力を持っており、この扱い、考え方を巡って、先に記した神の後継者、人間の先祖、邪神へと分かれることになった…、らしい。即ち、長子エルは、自らの異能の力を正しきことに使うべきだと考え、次男アノは、そんな力自体、持つべきではないと考えた。そして三男ナタスは、自らの快楽、欲望を満たすために使おうと考えた。かくしてエルは神となり、アノは人間となり、ナタスは邪神となった。

俺たちがヤマト山に出向いたのは、はっきりいえば俺の趣味。しかし後藤も反対しなかった。島の秘密を探り、解き明かすというのは、いずれ必ずやらねばならない課題の一つであったから、それなら、国家基盤が安定している今をおいて他にない。後藤だってバカじゃないし、こうと分かれば頑固ではないから、

「総理閣下自ら出向かれるのは、余りよい話じゃありませんが、それが閣下の仰せとあらば仕方ありませんな」

と言って、ため息混じりに頷いてくれたのだった。

だから俺は早速、探検隊を編成して山に出向くことにしたのだった。留守のことはアシタメ主席に一任し、実際は総理特別代理たる後藤が仕切ってくれるだろう。とりあえず、俺はアシタメの側近で、この島のことに精通している『神の民』の一人たるクシュを筆頭副隊長に指名し、次席副隊長には平林めぐみを指名した…。

いや、誤解してもらっては困る。この人事は、確かに俺が行ったものだが…。しかし平林を次席副長としたのは、ほとんど後藤だ。気心の知れた奴が一人は補佐役としていたほうがいいだろうというくだらぬ配慮のおかげで、俺はめでたく、なにやら誤解されかねない人事を強要されてしまったのだった。

これじゃますます誤解が深まるではないか。…と、俺は思っていたのだが、既に周りは誤解が深まるも何も、誤解とすら全く思っていない風なのだった。即ち、俺と平林は、もう既に出来ている。俺

たち二人の関係は、いつの間にか規定事実化されているのだ。
んな、あほな！
なーんて叫んでみても意味はない。そうなっているのだから、仕方ない。もはや誤解を解くことは不可能なんだろうなと、半ば諦めにも似たため息を吐きながら、しかし、俺の憂鬱など察する風もなく、暢気に嬉しそうに副長の座に収まっている平林を見て、俺の憂鬱は、ますます酷さを増すことになった。

隊員は三十名。余り大規模な部隊を編成しても、統率が面倒なだけであるので、ま、少数精鋭。これでも多いぐらいだ。
隊長はもちろん俺！　未知の世界に乗り込んでいくわけだから、責任は重大だ。目標は謎の解明だが、最低限、なんら成果はなくとも、死傷者ゼロで帰国を果たさなければならない。指揮官たる俺の双肩には、三十人の命がずっしりとのしかかっていた。

出国二日目。
俺たちは樹海にたどり着いた。
「ほえー。すっげぇ」
さすがに驚きの色は隠せない。壮大な森が眼前に広がっていて、これを突破しない限りは山にたどり着けないのかと思うと、さすがに頭が痛かった。
「大丈夫」
クシュは淡々と呟き、
「私、道、知ってる」
彼はにっこりと微笑んだ。
とにかく、その言葉に全幅の期待を寄せつつ、俺はすっくと立ち上がる。大将たる俺が、呆然と立ち尽くしていてよいものじゃあるまい。常に堂々として、部下に自信と安心を与えるのが、将たる者の務めなのだ。
「行くぞ！」

俺は急かすように、大声を張り上げて怒鳴ると、先頭を歩くクシュに続いて歩き始めた。
自然は壮大だ。改めて実感する。日本にいた頃も、これが自然なのだといって、いろいろな観光名所を巡ってきたが…。しかし、ここに勝る場所はどこにもないように思われた。いうまでもないことだが、土産物屋なんてあるはずもないし、舗装された道路だってない。ところどころ、見たこともないような奇妙な動物が犇いていて、そのたびに、
「あれは大丈夫」
というクシュの説明を受けながら、こみ上げる不安と闘いつつ、先へ進む。こんな経験だって、日本じゃ得られなかったろう。あそこは、サファリパークや動物園に出向いて、ライオン等、本来は恐るべき肉食獣に接近しても、さして危なくない世界だ。しかし、この世界において、そんな奴らと出くわしたら…。そいつらの腹の空き具合にもよるだろうが、もしも御腹ぺこぺこであったりしたら、まあ、一瞬で俺たちはあいつらの胃袋に納まってしまうことだろう。

暑い！
歩き始めて、およそ一時間ほどたった頃、俺は纏わりつくような蒸し暑さに、如何にもうんざりと言わんばかりの顔をして、誰にも気づかれぬよう、細心の注意を払いながら、小さなため息を吐いた。
「暑いわね」
そんな俺の努力など全く気にしていない平林は、先ほどからそんな風に言って、ため息ばかり吐いている。どうやらこいつは、自分が部隊の次席副長という立場にあることを忘れてしまっているらしい。ナンバー3だぞ。もっと自覚を持ってもらいたい。
「分かっているわよ」
俺の咎めを受けて、彼女はムッとしながらも、とりあえず理解はしたのか、以後は何も言わなくなった。
かくして俺たちはさらに進む。ま、ジャングルというのは、どこ

まで行ってもジャングルなわけで…。三時間もしたら、すっかり飽きてしまった。四時間もすると、たまらなく疲れてしまった。
「さすがに、休もう」
歩き始めて五時間になろうかというとき、俺は隊長として、そう言った。クシュのほうも異存はないようだ。この辺りなら、安全。なんて呟いている。
俺はふぅとため息混じりに腰を下ろすと、
「クシュさん。これから先、どれだけ歩くんだ？」
とりあえず尋ねてみた。
「三日ほど」
クシュは淡々と答え、きっぱりと言った。
「三日、ね」
たかが三日ととるべきか、三日もあるととるべきなのか。
ま、いずれにしても広大な森だ。一日や二日で突破しようと思うのが無理な話なのだろう。
とりあえず今は寝る！　英気を養わねばならんのだ。
だから俺は、見張り役の順番をひとしきり決めると、その場にごろりと寝転がって、目を閉じた。

第２２話　第２次遠征（中編）　―邂逅―

絶景かな、絶景かな。

山の頂上から眺め下ろす下界の世界というのは、なんともちっぽけで、しかしなんとも幻想的で、なんともいえない壮大さに溢れていた。こういうものをぼんやりと眺めていると、いくら総理とかリーダーとか、いろんな称号や権限を身に纏ってみても、所詮人間なんて、実に他愛もない存在に思えてしまうから不思議だった。

人間五十年、下天の内をくらぶれば…、なんて信長が愛した敦盛を諳んじるまでもなく、たかだか五十年（今では八十年ぐらいだが）くらいしかない生きられない人間に比べて、目の前に広がっている光景は、それこそ何千年、何万年と生き続けてきたに違いないのである。さすがに何億年はないだろうが…。とにかく、そんな光景をじっと見ていたら、人間なんて…、って思いたくなるのも自然というものだろう。

今、俺たちは山頂部分にいる。いや、正確にはその直前というべきか。ほとんど頂上なのだが、真の意味での頂上にたどり着くには、多少歩かねばならないようだ。しかし、ここから見える世界というのも、なかなかに絶景で、いっそ、もう下山してしまってもよいような気分になった。

いや、違う！

俺たちは断じて物見遊山にきたわけじゃないのだ。この島にまつわる様々な謎の解明こそが、今回の遠征の最大の目的なのである。しかし、今までの道のりの中で、これといった遺跡のようなものは見当たらなかった。もし本当に神話に絡む何らかの歴史的跡があるならば、残るは山頂部分しかない…。ほとんどゼロに近い可能性に全ての希望を託し、俺たちはえっちらおっちら、大変かつ辛い、果

てしなく面倒臭い山登りを敢行していたのだった。
「閣下、もう少しで山頂にございます」
隊員の一人が、そう報告する。
「そうか」
実際のところ、俺の体力は限界に近かった。総理なんて立場に甘んじ、彼らほどの訓練を重ねてこなかったつけが巡ってきたのだろう。ぜいぜい、ひぃひぃ。声にこそ出さないが、俺の体は先ほどからずっと悲鳴を上げていた。
「大丈夫ですか？」
国防副次官補にして、国防軍副参謀なんて要職を勤める犬山啓太郎さんという中年男（要するに後藤国防相の側近）が、先ほどからしきりに俺の下に歩みって、心配げな顔を見せていた。
「犬山さん、こんなだらしない男、気にするだけ無駄よ。先、行きましょ！」
そう言って、あてつけの如く軽快なステップで先に進むのは、平林めぐみであった。
「し、しかし…」
犬山副参謀は困ったような顔をして、しきりに俺のほうを見つめてくる。どうすべきか、本気で悩んでいるようだ。そんな様に、俺はムッとした表情を浮かべ、
見捨てたいなら、勝手にしろ！
と、心の中にてそう叫んだ。
まあ、しないがね。俺だってそれぐらいの仁義は弁えているさ。何しろ、俺を…、ってか総理を見捨てて先に進んだ、なんてことが後藤に知れたりしてみろ。次の日には犬山副参謀の首が飛んでる。首といっても、仕事をクビになるって意味のクビじゃない。正真正銘、彼の頭と体を一つに繋げている生首のことである。簡潔明瞭に言うなら、俺が告げ口をした次の日には、彼は後藤によって殺されているってことだ。
後藤は今、鬼と呼ばれている。

副総理として、わが内閣のナンバー2の座を確固たるものとし、財務相として政府の金、国防相として軍、総務相として情報、法相として法律の執行権等（ついでにわが国には現時点で裁判所なんてものはないので、最高裁長官的な権限は法相が兼務している）、ありとあらゆる権限を一手に握っている彼は、悪役に徹するかのように、徹底して厳しい政治を遂行していた。まあ、毎日のように冷酷な笑みを浮かべながら、法規に違反した奴を片っ端から処罰していく後藤の様子を見ていれば、誰だって「鬼！」と思いたくもなるだろう。まあ、今のところ彼の手によって処刑された人はいないけれど…。しかしこの前の上原騒動のときのこともある。彼がその心血を注いで作り上げた法律に違反する輩に対し、容赦をするとは思えなかった。

そうとわかっていて告げ口するほど薄情な俺ではない。犬山副参謀のためにも、後藤自身のためにも、ここは黙っておくのが得策…。っていうか、今回のことは、はっきり言えば俺が悪い。総理の仕事にかまけて、訓練を怠ってきた俺が悪いのだった。へばって情けない姿を衆目に晒しているのは、要するに自業自得である。そりゃ、普通呆れるだろう。見捨てたくもなるだろう。彼らが俺についてどう思っているのかは知らないが、しかしだ。未だ二十歳にも満たない青年…、ただのガキが総理大臣なんて大そう偉そうな肩書きを身に纏い、上司としてふんぞり返っている様を見れば、不満を抱かぬはずもないだろう。その上、こんなだらしない姿を晒している。あきれ果て、愛想を尽かすのが普通ってもんだ。もしも俺が犬山副参謀の立場だったら…。まあ、あきれて、愛想を尽かしていたろう。何でこんなやつに従わねばならんのだと、真剣に悩んでいたに違いない。

見捨てたいなら、勝手にしろ！

俺は再度そう思い、静かに小さくぼやいた。どうせ俺は若造だ。頼りない今時の若者に過ぎないさ。見捨てたければ…。そこまで思

ったとき、犬山副参謀はきっぱりと、はっきりと、
「総理閣下を置いて先には進めません」
健気な言葉を吐いて、「さあ、肩におつかまりください」と言った。
今年で三十六歳になると言う。国防副次官補兼国防軍副参謀。肩書きは立派だが、前職は警察官だったらしい。ノンキャリアながら、三十前半にして警部補にまで昇進した努力家。そんな彼が、前職高校生の俺に傅(かしず)く様は、やはり、なんとも言えず不気味というか奇妙であった。それゆえ、俺は聞いてみる。俺らみたいな未成年に頭を下げていて、嫌じゃないのか、と…。
「ははは。もし嫌なら、私も選挙に出てますかな」
犬山副参謀はからからと笑い、そして、「総理閣下や後藤閣下はお若いが、両閣下並びにあなた方のおかげで今の生活があるのですから、閣下に従うことに何の違和感もありません」と言った。

ともかく俺はこれ以上だらしない様を衆目に晒すわけにはいかぬと、必死の力を振り絞って頂上に赴いた。
そこは…、一種の天国だった。
天国というと、天使のような子供たちが色とりどりのお花畑にて楽しそうにはしゃいでいる姿…、なんてものを想像しがちだが、まさしく、それに似たお花畑が眼前に広がっていた。
「…な、なんだ、こりゃ？」
余りの違和感に、思わず目を疑う。
お花畑の中央には、やたら大きな樹木があって、そこには何やら赤い木の実がいくつか生っているようだった。
「リンゴ、にございます」
平隊員の一人が、花畑の中に休息をとっていた俺の下に駆け込んできて、そう報告した。
「リンゴ？」
平隊員が見せた木の実は、確かにリンゴだった。表面は赤く、形

もそれらしい。
「け、けど、なんでこんなとこにリンゴが？」
場違いにも程がある。山頂とは思えぬ雰囲気に、俺は一瞬で疲れを忘れた。

しばらく俺たちは、山頂部分を探索した。他になにがあるのか。どうなっているのか。
かなり期待。少し不安。
いろいろな思いが交錯する中、俺はリンゴの木の下に歩み寄り、それをまじまじと見つめてみた。すると、
「食べちゃいけない」
クシュ筆頭副長がそう言って、俺の手のひらにすっぽりと納まっているリンゴを奪い取った。
「それ、神の食べ物」
クシュはリンゴを木の幹あたりに置くと、手のひらを合わせて拝みだした。何を言っているのか、いまいち分からないが、なんとなく「祟らないでください」とでも言っているような感じがした。
俺はしばらくの間、ぼんやりとそこに佇んでいた。なんとなく、気持ちが落ち着くのだ。やはり天国のような世界だからだろうか。というよりも、やはり、花ってのには、人の心を左右する不思議な力があるのだろう。美しく咲き誇る彼らの壮大なダンスを眺めつつ、『花より団子』的考え方を少しは改めねばなるまいと思ったりしていた。
すると…。

「あ、あれはなに！」
平林めぐみの、悲鳴にも似た絶叫が響き渡る。
「な、なんだ？」
続いて犬山副参謀以下隊員たちが、あっけにとられたような顔で、呆然と空を見上げていた。

俺も「何事だ？」なんて尋ねながら、不思議そうに空を見つめる。
ピカッ！
眩い輝き。紅蓮色。真っ赤な閃光。
どこかで見た色だ。灼熱の炎の如き真っ赤色に染まった光。どこかで見た。どこかで…。確かそれは…。
しかし！
そんな俺の疑問が解消される前に、そいつはゆっくりと容赦なく、その姿を俺たちの前に現したのだった。

それは『神』だった。
眩く光る紅蓮の中から、にょきにょきっと姿を現し、そして、
「はっはっはっは」
と、楽しそうに高笑いしていた。神々(こうごう)しい雰囲気の割りに、随分と人間らしい『神様』を眺めつつ、俺たちはしばらくの間、立ちすくんだかのように、その場にずっと立ち尽くしていた。
「神様…」
そう呆然と呟き、慌しく頭を下げてしまったクシュ筆頭副長ら『神の民』の人々を除いて…。

第２３話　第２次遠征（後編）

俺はいったい、今、何を見ているんだろう。

神、だって？

確かに、『神の民（かれら）』はそう言った。そして、神とやらはそれらしい紅蓮色の光を眩く輝かせながら、天よりゆっくりと光臨してきた。

神…。

ってか、そんなの本当にいたのか？　いや、いるわけない。俺の非常に常識的感性がそう訴えている。そうさ。こんなものはトリックに違いない。紅蓮色の光なんて、そんなものいくらでも偽装できるし、空を浮いているのも、どっかにピアノ線かなんかを結びつけて、そこにぶら下がっているに過ぎないんだろう。もっと上空を見ることが出来れば、必ずヘリコプターか、それに準じたものが浮いているはずだ。俺の目は誤魔化されんぞ！

なーんて思うのだが、しかしヘリがいるとすれば、聞こえて然るべきあのけたたましいプロペラ音が一切しない。況や、ヘリでない何らかの機械を使って浮いているのかもしれないが…。けれど何の気配もしないのはやはりおかしかった。よもや、こいつは本当に自力で浮いているんじゃなかろうな…。俺の心、考え方の根本を占めている現実的常識って奴が、露骨なまでの非常識（ファンタジー）の侵略を受けて、必死のＳＯＳを張り上げていた。

俺はなんとなく、そこにいる男が『神』であることに、それほどの疑いを抱かなかった。…いや、よりはっきりと言うなら、そこにいる男が神であると認識している自分と、んなわけあるか！　と必死になって否定している自分が、頭の中で天下分け目の決戦を繰り広げているのだ。そして、どちらかというと彼が神であると認識している自分のほうが優勢に立っているというわけであった。

すると、その『神』とやらは言った。

「新井大次郎って言ったね」
俺の名を、なぜ知っている！
「神だからね」
その男は、からからと笑った。
神。
しかし、格好を見る限りにおいて、それは普通の中年男にしか見えなかった。さえない服を身に纏い、酔っ払いのようにニタニタと笑っている。天より現れ、大地に光臨した…、って言葉がべそをかいてしまいそうなほど、随分とみすぼらしき神様であった。
「この姿は、所詮、我がこうありたいと願った結果作り出された仮の容（かたち）。真の姿ではないのだよ、新井君！　わが体は自在に変えられる。神だからね」
心の中を読んだのか！　と突っ込みたくなるほど的確な答えに、俺は戸惑った。しかし、こうありたいと願った結果作り出した仮の容の割りに、その格好は随分とみすぼらしい。これがこの神のファッションセンスなのだとしたら、噴飯ものだ。
「失敬な！　これでも我なりに一流と自負しているというのに」
相変わらず見事なまでに俺の心を的確に読んでくる。ゆえに俺は少々焦った。もしも神様の逆鱗とやらに触れたら…。どんな神罰を下されるか知れたものではない。
一方の神は、むっとしたような顔をして、ぷいっとそっぽを向いていたが、しかし気がつくと、いつの間にか俺の眼前すぐ近くに迫って、ぎろりと睨み付けてきた。俺の目と神の目、その間ちょうど五センチほど。近すぎる。気色悪い。離れろ！
「神に対し、気色悪いとは、随分と恐れ知らずな男だね」
しまった！　また失礼なことを想像してしまった。俺はすかさず頭を抱え、困ったように苦笑いした。
しかしだ！　不意に頭に浮かぶ感情にまで文句をつけられたらたまらない。俺だって好きでこんな失礼なことを考えているわけじゃないのだ。それに悪いのは、俺が失礼なことを考えたことじゃなく

て、勝手に俺の心を読み取った神様のほうだろう。
そんな俺の不満を敏感に察したのか、神はにっこりと微笑み、そして一歩、二歩、ゆっくりと下がっていった。
「わが名はエル！　先代神マダより神座を受け継ぎ、この大地を治めている」
そう言ったかと思うと、エル神の体は見る見る変化し、気がつくと、実に不気味なゴリラ男に変化していた。いや、体はゴリラ、頭に鬼の角を生やして、挙句、蛇のような尻尾を生やした実に不気味な生命体であった。
「これこそがわが本性」
エル神はあっけらかんと言ってのける。
気色悪い。
としか思えない。すると、
「だから、我はこの体が嫌いなのだ」
そう言って、再び神は、先のさえない中年男に姿を戻した。

以後、エル神と俺たちは、しばらくの時を過した。
神といっても、神らしい尊大さは微塵も感じさせず、なぜだか随分と付き合いやすい奴であった。人間味に溢れているというべきか。もしも自分の体を自在に変化させたり、宙を舞ったりする特殊能力がなかったら、俺は絶対こいつを神だとは思わなかったろう。
「さて、新井君！　君は先ほど、我の紅蓮を見て、どこかで見たと思ったろう」
唐突に図星を突かれて、俺の戸惑いは一瞬で沸点を超えた。
「どこで見たと思う？」
なんて言いながら、神はその手の平に紅蓮色をした炎の玉を浮かべていた。しかし俺は気にせず考える。この灯り！　確かにどっかで見たのだ。どこかで見た。どこだっけ…。
紅蓮色。一瞬の光。
さて、どこで見た。ただでさえ悪い頭を必死に動かし、どっかに

しまいこんでしまった記憶を探し回った。あれだっけ？　これだったかな？　結局、どーでもいいような記憶ばかりが蘇ってきて、肝心の記憶はどっかにすっ飛んでしまっているようだった。
「あ、それ、墜落事故んとき見た気がする」
不意に、平林めぐみが言った。
「つ、墜落事故？」
素っ頓狂な声を張り上げた俺は、改めて、紅蓮色の光沢をまじまじと見つめてみた。
そ、そうだ！
あのときの光だ。
墜落直前の機内で見た、あの紅蓮色の閃光。断末魔の光と勘違いした、俺にとっては悪夢の象徴のような光。…もう何年も過ぎ去ったためか、すっかり忘れていたが、しかし確かに、この光はあの時見た光であった。

「そう。これはお前たちがこの世界にたどり着いたときに見た光だ」
エル神はニタニタと笑いながら、勝ち誇ったような顔をして、俺たちをまじまじと見つめてきた。
「そして、この光はお前たちをこの世界に誘(いざな)った光でもある」
そう言って、エル神はゆっくりと立ち上がった。
俺の頭はクエスチョンマークでいっぱいになった。俺たちをこの世界に誘った光？　なんのこっちゃ？
いや、なんとなくわかる。あの理由不明の謎の墜落事故及び、偶然にしては出来すぎているこの島への漂着は、この光のせい…、いやもっと厳密に言えば、その光を操る、眼前の男のせいなのだろう。即ち、俺たちはこの神を名乗る不思議な男により飛行機を墜落させられ、挙句の果てに、こんな奇妙極まりない島に誘き寄せられたのだ。
「違うね」
エル神はすかさず俺の考えを否定してきた。

「確かに、我と似た力を持つ者の仕業であることは間違いないがね。しかし、やったのは我ではない。どころか我はそなたたちを助けようとした」
「助けようと？」
何のことだ？　俺の疑問はますます膨らむ。しかしエルは、何やら悲しそうな顔をするばかりで、これ以上は何も答えてくれなかった。俺がいくら、「教えてくれ！」と言っても、「忘れた」とか「言う気はないよーん」などと、随分ふざけた物言いで、のらりくらりとはぐらかしてきたのだった。
だから俺は結局聞きそびれてしまった。しかし、疑問は募る。助けた？　ってことは、俺たちに危害を及ぼそうとした別の存在がいて…。なーんていろいろ考えていると、それまでだんまりを決め込んでいたエル神は不意にこう言った。
「我は君たちの味方であるから安心して欲しい。そして、今後何らかの不思議事件が起きるかもしれないが、もしおきたら、気兼ねなく私の下に来るといい。あのたわけが何をしでかすか…、いや、とにかく、何が起きるかわからん世界だからな。我の如き異能の力が必ず必要になるときもあろう」
ますます分からん。いったいこいつは何が言いたいのだろう。いざってとき、俺たちを助けてくれるってことは分かった。だが、いったい誰から俺たちを助けてくれるというのだ？　相沢からか？　あるいは自然災害？
いずれにしても、こいつに助けてもらわなければならぬような事態が発生するのは願い下げだ。せっかく俺たちの国づくりは軌道に乗り、順風満帆を迎えつつあるのだ。相沢だろうと、災害だろうと、それを邪魔立てするやつは許さない。
「君は面白いね」
エルはにっこりと微笑んだ。
「何の話だ？」
俺がぎろりと睨み付けると、

「おー、怖い」
けらけらと笑う神様であった。

「新井君」
エルは下山しようとする俺を呼びとめ、こう言った。
「君はかつて墜落した機内より奇妙なノートを発見したろう。それを見てみるといい。面白いことが書かれている」
「ノート？」
何のことだ？　俺の口調はますます疑問形。しかしエルは気にする風もなく、何を思ったか、不意に胸元からなにやら取り出したかと思うと、それをぽいっと放り投げた。
「メガネ？」
受け取った俺はそれをまじまじと見つめた。変哲のない、普通のメガネである。これで何を…、と思い、改めてエルに尋ねようとしたとき、既にそこにエルの姿はなかった。相も変らぬ、山頂としては実に不可思議なお花畑が広がっているだけだった。

第２４話　ノートの秘密

遠征隊を率いて無事、帰国を果たした俺は、その結果を後藤副総理以下幹部に報告した後、ひとまず官邸に戻った。

「神、ね」

はじめのうちは小ばかにしたような顔をしていた後藤であったが、平林やクシュら遠征隊幹部から同様の報告を聞くに及んで、ついには「マジかよ？」と、絶句していた。

しかし、そんな後藤たち幹部の反応なんてどーだっていいのだ。今の俺にはやるべきことが一つある。

だから官邸に戻った後、俺は家の中をひっくり返して、ノートを探した。いや、ノートっていうより、小説というべきか。あの途中までしか記されていない中途半端な未完小説。廃墟と化した機内から偶然見つけた奇妙極まりない小説。エルはそれを見ろと言った。何が書いてあるのか知らないが、見ろというからには何かが書いてあるのだろう。見つけたときには気がつかなかった何らかの重要事項が記されているに違いない。俺は大いに期待し、興奮して、とるものもとりあえず、今もなお小説探しに奔走しているというわけだった。

「閣下、何をなさっておいでなのですか？」

泥棒にでも荒らされたかのように、惨憺たる有様と成り果てた室内を見て、井上愛子はため息混じりにそう言った。

「な、なんでもない。お、お前こそ何だ？　人の部屋に勝手に入ってくるなよ」

別段悪いことをしているわけでもないのに、体中にこみ上げてくる罪悪感はなぜだろう。

「総理閣下に御食事をお持ちしただけですが…」

彼女はそう言って、静かに一礼した。俺がどんな醜態を晒そうと、

アウトオブ眼中！　そんな感じを露骨に表す井上愛子の冷静さに、少々腹が立った。
「そ、そうか。…じゃ、じゃあ、そこに置いといてくれ」
恥ずかしさの余り、俺は彼女の顔をちらりと見ただけで、すぐさまプイッとそっぽを向いてしまった。けれど、彼女のほうは、まさしく意に介する風もなく、淡々と、
「では！」
と言って、テーブルの上に食事を置くと、そのまま静かに立ち去ってしまった。

ノート、もとい未完小説を見つけたのは、それからしばらくしてからのことだった。随分と長い間、ゴミのようなガラクタの山の中に埋もれながらも、機内にて発見したときと変わらぬ新鮮さを保っているそれに、俺は改めて驚きを隠せなかった。
兎にも角にもそれを開く。
パラ、パラ、パラ。
相も変らぬ冒険小説。そして、前見たときと同様に、途中でページが途切れていた。
なーんだ。なんもねぇじゃねぇか。
大きく落胆。そして、少し安堵。
ぽいっと放り投げる。ただの小説。くだらない。
しかし…。
何も記されていない小説を、少なくとも自ら『神』を名乗っている不思議能力保持者が、あえて読めなんて言うだろうか。何か書いてあるに違いないのだ。あるいは書いてないにしても、何らかのヒントになっているに違いないのだ。何のヒントかは知らないが…。
面倒くさい。何か書いてあるのなら、直接教えてくれればいいのだ。小説を読んだりするのは嫌いじゃないが、間違い探しのように、一字一句徹底的に読み込むのは好きじゃないんだ。そんなのは、高校時代の現代語の授業だけで懲り懲りだった。

しかし、あの小説が何らかの手がかりになっているのだとしたら…。読まない手はない。目の前に手がかりが転がっているのに、それを見逃しておけるほど、俺の知的好奇心はちっぽけじゃなかった。ってなわけで、俺は再び小説を手にとり、一から読み直しているわけだが…。

「なーんもねぇ」

俺の精神は限界に達しつつある。何やら神経衰弱でもやらされているような感じがした。どこにでもありがちな、極めて平凡な冒険小説を、何度も何度も読み直しては、その文字列の中に、ほかの意味が含まれているんじゃないかとか、何らかの暗号が隠されているんじゃないのかと、目を皿にして見つめてみたが、どう読んでも、それはただの冒険小説に過ぎなかった。

やっぱ、何もないのかも…。

現代語のテストにおける小難しい論文の解読をさせられているときよりも腹立たしい気分に染まった俺は、気分転換と称して、小説を放り出し、外に出た。

タァァァァ！

何やら奇妙な掛け声が聞こえる。それも一人や二人のものではなく、何十人という大勢がいっせいに張り上げている大声に、俺は多少の興味を引かれて、そこに向かった。

「へぇ」

そこには、国防軍に属する兵士たちが、汗まみれになりながら、必死の修行に励む健気な光景が広がっていた。手にもった木刀で突きの特訓でもしているらしい。

「あ、総理閣下！」

指揮を執っていたのは、犬山副参謀であった。国防省の副次官補兼参謀本部副参謀でもある彼は、ついでに、国防軍第３師団筆頭副師団長兼同師団隷下第８大隊大隊長も兼任しているのだった。そして、ここにいる兵隊たちは、彼の指揮下にある第８連隊の兵士たち

のようであった（ちなみに一つの師団の兵数は約１００人で、四個師団編成。師団の下には三個大隊が置かれ、一つの大隊辺り約３０人が所属。大隊の下に約１０人で編成される小隊が三つ置かれている）。

とまあ、随分といろいろ役職を兼ねて、俺より忙しいんじゃないかな、と思いたくなるような彼は、相も変らぬ真面目そうな顔をして、俺を見るや否や、恭しく頭を下げて、敬礼した。

「そのままで構わんよ」

そんな様に、ただ苦笑い。しかし、犬山副参謀は「いえいえ」なんて言いながら、部下の兵士たちに眼をやると、

「閣下に敬礼！」

と、怒鳴った。すると、きれいに整列した兵士たちは、上官の号令を受け、いっせいに頭を下げた。見事なほど四十五度に統一された角度で、一糸乱れず動く兵たちに、さすがの俺も感動した。

「して、閣下。このたびの御来訪、何用にございますか？」

何用って言われても…。憂さ晴らしと気分転換を兼ねた散歩のついでに寄っただけ…、と答えるわけにもいかなそうな雰囲気を前にして、俺は果てしなく答えに困った。

「な、何用、ねぇ…。うーん。いや、そうだ。え、閲兵に来たのだよ。君たちの日ごとの特訓ぶりを、総理として一度見ておきたくてね。抜き打ちで…。とりあえず、総理ってのは君たちの総指揮官だから、皆の状況を知っておかないといけないだろう」

えらく言い訳めいた答えな気がしたが、とりあえず犬山副参謀はそれで納得してくれたようで、

「光栄です、閣下！」

と、相変わらず、恥ずかしくなるような敬語に終始していた。

全く恥ずかしい。

俺は逃げるように犬山大隊の訓練所を飛び出すと、その足で、仕方なく、とぼとぼと官邸に戻った。

もれるのはため息だけ。
俺は椅子に腰を下ろして、再び小説を読み直した。まあ、気分は落ち着いたかな。外は既に薄暗く、仕方がないので、ライト代わりのランプに火を灯して、その明かりの下、読書に励むことにした。しかしだ。もう何十回も読み直した本なんて、はっきり言ってつまらなかった。その上、未完…。一言一句、頭の中に叩き込むようにして読んできたから、既に何も見ずして語句を諳んじることだってできる。
つまらん！
一時間もたたぬうちに、俺の精神的キャパは限界に達した。これじゃ、まさに拷問だ！　地獄だ。読んでいても、ただ読んでいるだけで、意味なんて全く理解できないし、理解しようって気も起きなくなった。こりゃ、マジで限界だな。
なーんて思いながら、とりあえず布団の中に飛び込んだ。明日からは、また忙しない総理としての一日が始まる。滅多にない非番を、こんな無意味な読書で費やしてしまった自分に悔やみつつ、とりあえず目を閉じた。

何か忘れているような気がした。
なんだっけ？
頭の中に、なんともいえない引っ掛かりを覚える。何か忘れている。実に気分が悪い。
なんだったかな…。
考える。考えろ！　このままじゃ、はっきり言って眠れん！
などと必死に、疲れきった頭を働かせていると、しばらくたって、
「あ！」
俺は素っ頓狂な声を張り上げ、飛び起き、そして机のほうに駆け足で向かった。あれだ！　そうだ。あれしかない！
閃いたときの感動、思いついたときの興奮は、何にも変えがたいものがある。時価何億、何十億もするお宝を発見したときのような

感慨を胸に抱きつつ、俺はそれを手に取った。

メガネだ。

変哲もない、ただのメガネ。

視力はそんなに悪くない。右目が１．５で、左が１．０…、だったかな。視力検査をしたのは、高校時代だから随分昔だ。とにかく、メガネなんて必要ないのだが、とりあえずかけてみる。かけ方がわからない…、なんてバカは言わない。

慣れていないと、メガネってのはあまり気持ちのよいものではなかった。まあ、度は入っていないようなので、別段かけていて気分が悪くなったりはしないのだが…。

って、そんなことを気にしている場合ではない。俺は慌てて本を取り出し、メガネ越しにぱらぱらと開いてみた。

すると…。

「な、なんと…」

びっくり仰天、驚きのあまり、力なくちょこんと腰を下ろした。

目を疑う。目をこすろうとして、そこにあったメガネにぽんとあたる。

まさか？

心の中で何度も否定。しかし現実。

そこにはびっしりと文字が記されていた。白紙だったはずなのに…。何もなかったはずなのに。

最初から最後まで、ページには文字が刻み込まれていた。

そして…。

外は暗い。夜真っ盛り。

ヒュゥヒュゥと、物悲しげな夜風が窓を叩く。俺は静かに深呼吸して、改めてマジマジと、白紙であったはずのページを見つめてい

た。

第２５話　小説の中身

○　序文

私がこの島に辿りついて、いくらの時間が流れたのだろうか。
あの時高校生であったはずの私は、既に年老い、この異界の島にて空しく朽ち果てようとしている。
ゆえにこれを遺す。後世、これを手に取った諸君は、私が少なくともこの物語を記しているときまでは確実に生きていたのだということの証として、そして、あなた方が生きている世界とは、ほんの僅かに位相を異にした世界が本当に存在しているのだということを理解し、次の世代に語り継いでもらいたい。
１９００年９月６日。トーマス・Ｊ・マクスウェル。

○　プロローグ

私はその日まで、ただの高校生に過ぎなかった。その日、私は旅に出たのだ。なぜか、とは聞かないでほしい。全てが嫌になって、旅に出ることにしたのだ。
しかし。
出港より一ヶ月目を迎えた夜のことだった。突如、船内が慌しくなったので、私は何事かと飛び起き、船室より飛び出した。右往左往する乗客の群れを抜け、甲板に出ると、私はそこで、凄まじき嵐がわが船を狙い撃ちするかのように、猛然と牙を剥いて襲い掛かってくる光景に出くわしたのだった。
私はすかさず十字を切って祈った。
神よ。我らが主よ。私を、そして彼らを守りたまえ！

しかし、神はそれを聞き入れず、嵐は弱まるどころか強さを増すばかりであった。
誰もが絶望に打ちひしがれ、死を覚悟していた。そのときである。
私は確かに見たのだ。嵐の中に、紅蓮に光る眩い輝きを…。それが何なのか、その当時はさっぱりわからなかった。だが、何か不吉な感じがして、嵐よりも私の胸を締め付けたものだった。

夜が明けたとき、私たちの船は既になく、私は無惨な姿で砂浜に打ち上げられていた。
どうやら助かったようだ。しかし、あれだけいた同胞たちの姿はなく、後日、廃墟と化した船の中に、哀れな姿と成り果てた彼らを見つけたとき、私はどうすべきなのかわからなくなった。

○　第一節

島にたどり着いた私は、長い時間と努力を重ね、とりあえず寝床と食料調達の方法を確立した。
しかし、救助船は一向に来そうもない。
一年、二年、三年…。
気がつけば、既に長い間、私はこの島に滞在していた。川より水を汲み、砂浜では貝や海草を取った。森では木の実を探し、あるいは狩をして獣の肉を食らった。火を起こせるようになるまで、約二ヶ月ほどかかったように思う。獣を捕らえられるようになるまで、一年近くかかっただろう。
とにかく、食べることには不自由のしない島であった。私は島の恵みを一身に受け、辛うじて生きながらえることができたのだ。

漂流して四年目になったころだろう。
私はひょんな偶然から、原住民と遭遇した。黄色人種のような肌の色をしていたから、日本人、あるいは清国人（チャイニーズ）と思ったものだ。実

際、彼らは日本語を話していた。しかし侍の言葉とは少々違うようで、それは私にとってラッキーだった。とにかく、私は幼い頃、父の都合により日本で過ごしたことがあり、それゆえに日本語を喋る事にそれほどの苦労は感じなかったのだった。

原住民の部族長はその名をアノと言い、随分と老けた老人であった。原住民たちの話によると、年齢は八百歳に達していたらしいが、まさかそんなこともあるまい。しかし百歳以上の年寄りであることは間違いなさそうであった。

アノは特に親切な老人で、私のためにいろいろと便宜を取り計らってくれた。私はアノや原住民に対し、わが故郷のことをよく話してやった。あるいは我々の世界がどのようにして成り立ってきたのかという歴史を懇切丁寧に教えてあげた。彼らが理解してくれたかどうかはわからないが、私は何より、会話が出来ることが一番嬉しかったのだ。

それからしばらくたった後、アノは自らの死が目前に迫ったことを察したのか、私を屋敷に招き寄せ、そして自らもかつては漂流者であったという衝撃的な事実を告白した。

彼によると、八百年ほど昔、兄と弟とともにこの島にたどり着き、私と似たような漂流生活を始めたのだという。その当時、この島に人はなく、動物たちもまばらであったという。

以下はアノより伝え聞きし、彼らの大まかなる歴史である。

彼らは十年間の漂流生活を経て、既に島の動物たちの王者になっていたが、そんな彼らはあるとき、島の中央に位置する大湖を根城にして時折水害などをもたらし、動物たちを大いに苦しめていたノディエソプという水神を討伐するべく、湖を越えた先にある山に登り、原住民より『大地の女神』と崇められていたエウアに謁見したのだ。勇敢にして賢明だった彼らは、彼女が与えた試練を悉くクリアし、ついに彼女より異能の力を授けられることになった。そして、

彼らはその力を駆使しつつも、ノディエソプ神と対立していた弟神マダと共闘するなど最善の策を講じ、ついに恐るべき邪神を倒して島の平和を取り戻すことが出来たのだった。

☆　★　☆　★　☆

第一節まで読み終えた俺の頭は、？マークでいっぱいになった。

この小説はいったい何なんだ？　明らかに俺たちが今いる島のことについて書かれているとしか思えなかった。しかし…、しかしだ！　まあ、小説自体はまだほかに第二節、第三節と続くのだが、第一節の中身がいまいちわからぬ状態のまま、それ以降を読み進める気は起きなかった。

完全に忘れていたのだが、考えてみれば、この小説は相沢がくれたものであったような…。それを機内で見つけて…。って、ならば相沢はいったいこれを誰から手に入れたのだ？　貰ったのは、確か俺たちが修学旅行に出向くちょっと前。そんなときに貰った本に、俺たちが偶然漂着することになる島の歴史が載っているなんて偶然、本当にありうるのか？　いったい、奴はこの本をどこから仕入れたのだ？　くそッ。相沢がここにいれば聞けたのに…。

とにかく、この小説はいったい何なのだろう。

俺はいろいろと考えてみた。しかーし。事ここに至りて、己の頭の悪さをほとほと痛感する。もう少し、効率よく回転してくれないものなのかねぇ。俺ってのは、どーしてこうもバカなんだろう。

ただ、そんな俺にも、わかったことは幾つかある。もしもここに記されていることが真実なのだとしたら、『神の民』の人たちが受け継いできた神話は、かなり脚色が施されているとはいえ、根本部分は史実に基づいて作られた話であるということだ。アシタメ主席から聞き出した『神の民』的創世神話の中で、始祖神マダと大地の女神エウアの間には、三人の子、即ち長子エル、次子アノ、三子ナタスが生まれたとされている。確か、エルは異能の力を正義のため

に使おうとし、ゆえに神の座を引き継ぎ、アノは異能の力そのものをもつべきでないと考えた。ナタスはその悪用を考えて邪神と化した…、とあったはず。

要するに、この三兄弟が始祖神と女神の間に生まれた子…ってのは眉唾だが、少なくとも五人が存在したことは確かだ。まあ、エルとかいう奴は俺も会っているわけだし、彼が操る不思議不可思議異能の力ってのも、ほかならぬ目の前で見たわけだから、人間の常識から遥かに超越する『神』的存在がいたとしてもなんら不思議じゃあるまい。

っていうか、神…、ねぇ。

そんなもんを平気で受容しているあたり、俺のごく平凡的、常識的思考能力は随分と狂ってしまったようだ。ま、無理ないか。こんな島に漂着したことだって、明らかに常識から逸脱しているというのに、仲間割れした挙句、総理なんて奇妙な役職につき、戦争とか神とか異能の力なんてものに接しているのだ。これで昔のような平凡さを保っていられるような奴は、それこそ『神』の称号を名乗るに相応しい。

とりあえず、第二節を読み始めなければなるまい。この伝記小説を全て読めば、この不思議島の秘密がある程度わかるような気がした。兎にも角にも読まなければ始まらない。そう思って、俺は再びページを開いた。

第２６話　神からの警告

「この島の秘密。ある程度理解したかね」
本を読み終えたとき、俺はそこで信じ難い光景と出くわした。
ヒュゥゥゥと冷たき夜風が一陣の風のごとく吹き抜けたかと思うと、そこに姿を現したのは、ほかならぬエル神であった。
「違う。我は神ではない」
すかさず口を挟むエルに、
「お前たちはいったい何なんだ？」
俺はいつになく糾弾するような口調で尋ねていた。
「何だ？　と聞かれたら、人間からちょっと外れた者と答えるよりほかに仕方がないだろうね」
エルはそう言ってカラカラと笑った。
「人間からちょっと外れたもの？」
「そう。我の８０％は人間でできている。ま、残る２０％は神の力でできているがね」
くすくすと笑い、ソファーの上に我が物顔でごろりと寝転がるあたり、こいつは本当に神なのだろうかと、俺は不審を抱かずにはいられなかった。恰好は相も変らぬ貧相な中年男。姿を自在に変化させられるなら、もっと恰好いい、例えばモデルのような男にでもなればいいというのに…。
しかし彼は気にする風もなく淡々と笑うと、
「今日は君に頼みがあってきたのさ」
と、言った。

唐突に神妙な顔をした神の様に驚き、俺も仕方なく居住まいを正した。
エルはしばらく陰鬱そうな顔をして、じっと明後日の方向を睨みつけていたが、覚悟を決めたものか、ふぅと静かに深呼吸すると、

「ナタスが暴れている」
と、言った。
「ナタス？」
唐突感の否めぬエルの言葉に、さすがに俺も戸惑った。
ナタスが暴れている、だって？
ま、今さらナタスがだーれ？　なんてバカは言わないさ。散々、あの出来損ないの伝記小説にも出てきていたし、『神の民』の神話内にも登場してきたのだから。
邪神。
それがナタス。エル、アノの弟。神の力、もとい異能の力を得ながら堕落した情けない男。
「奴は途方もない遊び人でねぇ。特に神のごとき力を得てからというもの、動物たちにある程度の知能を授けて奴隷のようにこき使ってみたり、あるいは趣味と称して動物たちを変化させ、自分のペットにしたりしているんだが…。しかし最近ではますます酷さを増して、君たちのような無関係な人たちを勝手にこの島に誘き寄せたり、さらには猛獣たちを使役して軍となし、君たちの集落を襲わせようとしている」
聞き捨てならぬエルの一言に、俺はすかさず「待った！」と怒鳴った。
「猛獣を軍として、俺たちを襲わせようとしているってどういうことだ？」
俺はぎろりとエルを睨み、エルは淡々と、
「戦争ごっこを奴は見たいのだよ。本当は君と、相沢修平だったっけ？　君たちが戦ってくれていれば、ナタスも自ら戦を引き起こす真似など起こさなかったろうけどね。君たちが和平して、戦争をしなくなったものだから、つまらなくなった彼は自ら戦争を引き起こし、観戦するつもりでいるのだよ」
と、言った。
俺は呆れた。んなアホな。

観戦したい。たったそれだけの理由で戦争なんてやってられるか。あんな酷くて惨くて、何の意味もなさない戦なんてやってられるか。しかし、エルが言う通り、もしも猛獣たちが攻めてくるなら、こちらも身を守るためには戦わねばならなかった。

「ま、そんなことはどーだっていいのだ」

そんなこと、ときっぱり言い切ってしまう辺り、エルは案外淡白な人間らしかった。というより、戦争というものに対して、それほど抵抗感がないのだろう。少なくとも平和国家日本に生まれ育った俺とは根本的に考え方が違うらしい。

「アノが死して数十年。奴は本格的に、我の地位を狙って動き出している。しかし我は今の立場から離れるつもりはない」

エルはそう言って、にやりとほほ笑んだ。

「お前の立場ってなんだよ？」

俺がそう尋ねると、

「神の座さ」

彼はそう答えた。

要するに、神の座（＝この世界の主）をナタスが狙い、エルはそれを防ぎたいのだという。エル曰く、もしも神の座が奴の手に渡ったら、この世界は信じ難き地獄に染まるかもしれない、らしい。

エルの俺に対する頼みってのは、簡単にいえばナタスの野望阻止のために協力してほしいってことらしかった。具体的に何を協力すればいいのか、それについては、

「後日教える」

というだけで、今の時点では何一つ教えてくれなかった。

しかし…。

この島はいったい何なんだろう。明らかに現実世界とは異なった常識で成り立っている。ついていけねぇ…、ってのが今の俺の率直な感想。

「それとね。もしもナタスの野望を阻止することができたら、我が

力、君に授けてもよいよ。神になりたくはないかね？」
そんな風に淡々と言うエルに、
「断る」
俺はいつになくはっきりと、きっぱりと断言した。
いらんわ！　んなもん。俺の周りの世界がどれだけありえない非常識（ファンタジー）に染まっていっても、俺だけは常識の中にあり続けたいものだ。神の如き力なぞ授けられた日には、俺もめでたく非常識の仲間入りしてしまうではないか。
そんな俺の心の中を的確に見抜いたらしいエルは、「ははは」と苦笑いした後、
「もっともだ」
と言って、どこか羨ましそうな瞳を俺に向けてきた。それの意味するところ。さすがに俺だってわかるさ。こいつはこいつで、自分の身に宿る異能の力が嫌なのだろう。手放したいのだろう。だが手放せない。
「あ、そうそう。言い忘れていた」
エルは不意にそう言って、にこやかに微笑んだ。
今度は何だ？　俺は身構える。もう何を言われても怖くはないぞ。驚かないぞ。さあ、言ってみろ！　今度はどんな非常識が俺に襲い掛かってくるのだ。
「ナタスが猛獣たちを駆使して攻め込んでくるって話をしたろう。それな、一週間後だから。オーケー？」
「は？」
何を言っている。俺は呆けたように、しばらくそこに固まったまま動けなかった。
一週間後？　七日後？
アホか！　んな早くに攻め込まれたら、こっちの敗北は決定的ではないか。
「ま、勝ってくれよ。君たちが全滅したりしたら、私の計画は台無しになってしまうからね」

「…か、勝てって言われても、一週間後？　どーやって勝てっていうんだ？」
焦る俺に、
「気合いだ。さすれば勝てる！」
旧日本軍の将校のような言葉を吐いて、エルはにっこりとほほ笑んだ。
「ま、案ずるな。ある程度戦ったなら、我がとびっきりの援軍を引き連れて駆けつけてやるさ」
「…」
それまでもつのだろうか。俺の不安は尽きない。
気がつけば、すでにエルの姿はなかった。神の如き力を持った男だけに、まさに文字通り神出鬼没であった。
「ふぅ」
俺は静かにため息を吐く。
売られたケンカは買うのが江戸っ子。って俺は江戸っ子じゃないけれど…。とにかく、かかった火の粉は払わないといけないのだ。挑まれた戦いに敗北するわけにはいかないのだった。
俺は改めてため息を吐く。
そして、
「後藤副総理を呼べ。大至急！」
官邸のそばに控えているＳＰの一人にそう命じると、後はぼんやりと、夜風にひたりながら眩く輝く星空を眺めていた。

第27話　交渉

集まったのは、後藤以下主要な閣僚と国防軍の幹部たちであった。
しかし、何と説明すればよいのだろう。神がいて、そいつの弟が操る獰猛な動物たちが襲い掛かってくるかもしれない…、なんて話、ふつう誰が信じるよ。とはいえ、だからといって放置しておくわけにもいかない。攻め込んでくるかもしれない以上、早急に迎撃準備を固めて、国を守らないといけないのだった。
「我らの兵力は四個師で総勢四百人しかいない。これで戦えるのか？」
敵の戦力も漠然としていて、いまいちわからない。調べるにも調べようがないのでは、幹部たちが戸惑うのも無理はなかった。
「いや、もはやこうなった以上、何としても兵をまとめて戦うしかないだろう。攻め込んでくるのは一週間後なんだろう。だったらそれに備えて準備を整えるしかない」
勝てる、勝てないじゃないんだ！　と、俺は心の中に思いながら、幹部たちの議論に耳を傾けていた。いずれにしても俺たちが窮地に立たされていることだけは確かなようであった。
「相沢が俺たちの味方ならなぁ」
不意にそう漏らしたのは、佐川新平で、
「あいつが俺たちに味方してくれるわけねーだろ」
すかさず否定したのは、遠藤伸介であった。
「いや…」
後藤が口を挟む。
「くれるわけねーって最初から決めつけるのはよくない。相沢が俺たちに味方してくれたら、俺たちの形勢も少しは有利になる」
「だ、だけどさ、あの相沢が、わざわざ俺たちを助けにくるわけないじゃんか」
遠藤は後藤をぎろりと睨み、ため息交じりにぼやいていた。

しかし、あるいはってことも十分あるわけで、決めつけるのはよくないんじゃね…、なんて一人思っていた俺は、後藤に目配せして、とりあえずすっくと立ち上がった。
「とりあえず、相沢に援軍を要請する。今はできることから早急にやっていかないと、ほんと、取り返しのつかんことになりかねないからな。んで、相沢の説得には俺があたる。これでも外務大臣も兼ねてるからな。だから、とりあえず留守居は主席閣下と後藤副総理に一任する」

そうは言ってみたものの…。
俺は果てしなく後悔した。
格好いいこと、堂々と宣言したのはいいが、現実性を考えると、甚だ難しいと言わざるをえない相沢の説得工作であった。あの性格は、熟知している。俺と組むぐらいなら、いっそ邪神と手を結んで俺たちへの攻撃に加担しかねない。
ハァ。
俺って、どーしてこんな性格をしているんだろう。無駄に真面目で、いっつも好き好んで貧乏くじばかり引いている。相沢の説得だって、他の幹部に任せてしまうって手もあったはずだ。俺自ら出張る必要なんて、どこにもなかったじゃねーか。
と、今さら愚痴ってみても仕方ないが、これじゃ愚痴りたくもなるぜ。ヤマト湖を超え、久方ぶりに西側湖岸に上陸を果たした俺は、従者…、もとい補佐役、副使の立場で随行している平林めぐみ副外相とともに、兎にも角にも、相沢の国を目指したのだった。

「久しぶりねぇ」
平林は、なんて言いながら、呑気に浮かれている。
「でも、凄い発展ぶりじゃない？　様相もがらりと変っちゃって…」
確かにな。
「ま、いろいろあったけど、さすが相沢先生よねぇ」

否定はしないさ。
だが、今はそんな呑気なことを言ってる場合じゃねぇ。観光旅行に来たわけじゃないんだからな。俺たちはこれでも外交使節なんだぜ。こいつは、全くわかっていないようだが…。
とにかく俺たちは、大統領官邸に向かう。確かに街並みはがらりと変わって、幾らか文明的な香りの漂う街に進化を遂げていたようだが、基本的な建物の立ち位置とかは一緒らしかった。だから、官邸もあそこにあるだろうと、それなりの目星をつけることもできたというわけだった。
「…すげぇ」
さすがの俺も、そんな呆けた台詞を吐かずにはいられなかった。
一言、すげぇ。
それに尽きる。
相沢修平大統領閣下様の居城たる大統領官邸。それは、確かに官邸と名乗るだけあって、立派に立派を重ねたような、最強の建物となっていた。官邸とは名ばかりの俺の家とは、まさしく雲泥の差があった。
「誰だ！」
そこに、厳めしい男たちの大音声が響き渡る。平林などは大いに慌てて、
「え、えと…」
なんて言いながら、俺の裾をつかんで、背中に隠れてしまった。
「我らは大和国全権代表である。大統領閣下の下にお通し願いたい」
国の威厳がかかっている。ここは堂々と行動せねばなるまい。
「全権代表、ねぇ」
男たちは疑いの目を向けながら、しかし、とりあえずすんなりと俺たちを通してくれた。どうやら上の方の許可が下りたらしい。
「通れ！」
なんて言っている男たちの顔に見覚えはないから、またしてもこの島に辿りついた哀れな漂流者なのだろう。見渡せば、相沢の国の

住民はますます増えて、既に三千、いや四千、あるいは五千近くにまで膨れ上がっているようだった。

相沢修平は大統領官邸内の一室にでんと構えて、ふんぞり返っていた。

圧倒的権力を一手に掌握する大統領。彼は、常時シークレットサービスに自身を護衛させ、また逆らう者に対しては、容赦のない罰則を加えて恐怖政治を断行しているようだった。

ま、彼がどんな政治を執っていようと、今の俺たちには関係ないことだ。今は、相沢を説得し、彼が率いている強力な軍の支援がほしいのだった。

「久しぶりだな」

あの凄絶な戦争から、まもなく半年近くが過ぎようとしている。

相沢はにやりと不敵な笑みをもらしながら、

「何の用だ？」

と、言った。

「援軍がほしい」

だから、俺も単刀直入。至極率直に切り出した。

「援軍？」

相沢は当然のように不思議そうに首をかしげた。

「お前たちは、俺らのほかにも敵を抱えているのか？」

「…あぁ。だが、お前たちはって言葉は少々違う。下手をしたら、お前たちにとっても大いなる敵となるだろう」

「なんだそりゃ？」

相沢は俺をぎろりと睨みつけ、詳細を教えろ、と、その鋭い眼光で合図してきた。なので、俺はこう答えてやった。

「この世界には神がいて、神には二人の弟がいる。そのうちの一人が暴走し、獰猛な動物たちを使役して俺たちに攻撃を仕掛けようとしているんだ。わかったか？　オーケー？」

こんな説明ですべてを理解できる奴がいたら、まさしくそいつは最強だ。なんて思いながら、俺はこれからどうやって補足説明したらよいかと考えていた。
「神、ねぇ」
相沢は案外驚いていないようだった。淡々と頷き、時折にやにやと笑みなど漏らしていた。
「んで、そいつらに攻め込まれそうだから、俺に援軍を頼みに来た、ってわけだな」
「…あ、あぁ。そうだけど」
「なんだ？　そのしけた面は。外交のために来た使者なら、もっと正々堂々としていろよ。お前、総理大臣なんだろ？　一国の主ってやつは、常に威風堂々。動かざること山の如しの覚悟でいなければならないんだぜ」
ってか、なんでこいつはこんなに冷静なんだ？
俺は不思議でならなかった。普通、神なんて言葉をマジで吐かれたら、こいつは頭おかしいのか、あるいは宗教かぶれしたやばい奴と思うのが相場だろう。マジな顔をして頷き、まともな答えを返すような殊勝な奴なんているはずねぇ。
と思っていたら、相沢はその殊勝な奴であったらしい。神なんて、如何にも電波的な話を聞かされても、さして驚く風もなく、淡々と頷いていた。
「援軍、ね」
相沢は小さく呟いた。
「ま、悪くないんじゃね」
彼はにっこりとほほ笑むと、
「とりあえず前向きに考えてやろう。善処してやる。これでいいか？」
如何にも役人的答えを返して、けらけらと笑う相沢修平であった。

第２８話　非常識戦争（１）　～開戦～

敵、現る！

急報に、胸が高鳴る。体はぶるぶると震え、一言でいえば、非常に落ち着かない。

床机（しょうぎ）の上にでんと構えて、とりあえず冷静を保つ。俺は総大将なのだ。総司令官なのだ。冷静を保つことが何よりも大事…。

わかっている。わかってはいるのだ！　だが…。

冷静でいられるわけねーだろ！　俺を誰だと思っているんだ。とまあ、許されるなら怒鳴ってやりたかったが、しかしできない。俺は総理。俺は大将。これから最前線に立って死闘を演じようとしている兵士たちのことを考えれば、ここで俺が発狂するわけにはいかないのだ。

「申し上げます」

伝令将校が、慌ただしく本陣に駆け込んできて、

「斥候の知らせによれば、敵軍は南側の高原地帯に集結したとのことにございます」

という。だから、

「そ、そうか」

俺は力なく頷き、目を閉じた。

「敵の戦力は、狼が二百匹ほど、虎が五十匹、猿が三百匹、鷲だか鷹だか、ようわからんが、とにかく鳥が数百羽いるらしい」

「…そ、そうか」

後藤副官の報告に、俺は静かに目を開けた。

ってか、狼とか虎とかサルとか鷲、鷹ぁ？　実に、何とも、ファンタジックな軍勢でありやすね。俺の目の前に広がる光景だって、如何にも時代劇風の本陣って感じで、タイムトラベルでもしたかのような感覚を抱かずにはいられなかったが、それよりもっと不可思

議、不気味な存在とこれから戦おうとしているのだ。
俺の人生って、いったいなんなんだろう。
ふと思う。
俺は本来普通の高校生で、普通の十七歳で、普通の…。何の変哲もない、ただの常識人だったじゃないか。それが何の因果で…。俺がリーダーの座に収まったのは、単純にテニス部主将の座にあったから。たったそれだけの理由で、俺は今、ここにいるのだ。普遍的な私立高校の一クラブ主将が、今や総理で、一軍の大将で…。
既にわが軍の布陣は終わっている。後は戦うだけ。負けるわけにはいかないから、勝つしかない。

にしても、大将ってのは本当に面倒な仕事であった。
あくまでこうやって、本陣にでんと構えていなければならないらしい。いっそ、俺自ら部隊を率いて戦うことができたら、どれだけいーだろう。そりゃ、死に物狂いの乱戦に自ら乗り込むなんて、できたらしたくないが、しかし、味方の悲鳴、絶叫を聞きながら、微動だにせず本陣でじっとしているというのも、実に辛いものがある。
けれど、
「大将ってのは本陣にいるもんだ」
後藤はそう言って聞かないし、
「お前にもしものことがあったら、それで俺たちは敗北だ」
と、あくまで問答無用。俺はどこまでも置物のように、本陣に座っていなければならないようだった。

こっちの戦力は主力の常備軍四個師団四百人を中核に、臨時でかき集めた兵力が三百人で、総勢七百。武器や食糧のほうは、これまでに量産を重ねてきたこともあって不足はないが、しかし相手は獰猛な猛獣たちを中核にした最強軍だ。戦力差は歴然としている。
俺たちに勝算があるとするなら、相沢修平の援軍だ。しかし、これはまだ来る気配もない。要するに、相沢軍が到着するまでの間、

俺たちは獰猛な敵軍を単独で迎え撃ち、防がねばならないのだった。
「負けんよ」
実質的な作戦指揮の全権を握っている後藤は、にやりと笑って、そう言った。どこから湧いてくるのか、常に自信に満ちている彼の顔は、この日も変わらず絶対的な自信に漲っていた。

戦いが始まる。
攻めてきたらしい。伝令が駆け込んできて、そう告げた。
俺たちの作戦は以下の通りだ。
敵は俺たちの国より南側の高原に集結しているらしいから、北上するような形で俺たちの国に進軍してくるだろう。であるからして、俺たちは主力軍を悉く南側に配置し、その上で、落とし穴や地雷をはじめとする様々な罠を仕掛け、そして馬防柵を張り巡らせることで防御力を確保する。柵の後ろには、銃兵部隊を配置。その後ろに銃兵の補完戦力として弓兵を配備し、さらに礫（つぶて）を投げる専門部隊も同時に配置しておく。この三部隊による遠距離攻撃で敵軍の出鼻をくじくのだ。
無論、歩兵部隊もいる。万一、柵が突破されたときのためだ。そして、そのときに備え、柵のこちら側にも落とし穴以下様々な罠を仕掛けておいた。
これが、今の俺たちにできる最低限の策だ。後は、相沢の援軍部隊が到着するのをひたすらに待つ。これ以外に俺たちが取りうる手はない。少なくとも俺たちはそう思っていた。
「申し上げます！　敵の先陣は狼たちだそうです」
伝令の報告。俺は目を閉じたまま、静かに頷く。どーやったら、威厳に満ちた大将を装えるか。いろいろ研究した末に、ようやくたどり着いた答えがこれであった。
その後もいろいろ報告が入ってくる。優勢、劣勢？　どうとも判別の付きにくい戦況に、俺の心臓は煩いほどぶるぶる震え、がたがた音を立てていた。

まず狼たちが猛然と襲い掛かってきたらしい。
獰猛にして、森の覇者とも称えられている彼らは、まっしぐらにわが軍の陣地に押し寄せ、そして壊滅した。俺たちが張り巡らせていた罠が功を奏したものらしい。ひたすら突撃するしか脳のない彼らは、落とし穴にはまろうが、地雷を踏んづけて爆死しようが、あるいは無数の銃弾や矢を撃ち込まれても、礫をぶつけられても、構わず突撃してきたのだった。
しかし、何の策もない、無謀な特攻だけで俺たちの堅い陣地を突破できるはずもなく、柵に到達する前に、二百匹の狼たちのうち、八割相当の百六十匹近くが戦死してしまったらしい。
続いてサルたちだった。が、これが随分と奇妙な部隊であったらしい。
何しろ、彼らは馬に跨り、さながら人間のように上手く馬を操っていた。その上、無駄に賢いので、罠にもかからない。
かくして、ついにサル部隊は柵近くにまで到達したのだが、しかし！　その程度で突破されるほど俺たちも甘くはない。
「やれッ！」
前線指揮官の一人たる佐川新平が大音声を張り上げると、その瞬間、柵のちょい前に突然、火柱が立ち上がった。
そ！　こんなこともあろうかと、俺たちが仕掛けていた奥の手の一つであった。柵のちょい手前に溝を掘り、そこに油を垂らしておいたのである。んで、火をつける。さすればそれは一挙に燃え広がって一本の線をなし、そして火の盾となってサルたちの猛攻を防いだというわけだった。
サルたちが退却して、戦線は膠着状態。
しかし、敵の戦力はまだまだ豊富だ。狼たちを完膚なきまでに叩き潰したからといって、俺たちの勝利が確定的なものとなったわけじゃないんだ。

早く来い！
俺は願う。手を合わせ、念仏でも唱えるかのように、
「はやく来い！」
と、呟き続けた。
援軍。
相沢修平。
彼が来れば、とりあえずこの劣勢を覆すことができるかもしれないのだ。少なくとも、現時点、我らの兵力的劣勢は致命的だ。もしも敵が再び総攻撃を仕掛けてきたら、間違いなく俺たちは壊滅する。既に罠も使い果たしてしまったし…。
早く来い！
祈る。願う。
相沢観音菩薩様！　早く来てください。

敵に動きがあった。
再び攻撃を仕掛けてきそうな気配だという。
「そうか」
俺は静かに頷き、小さくため息を吐いた。
これからが正真正銘、本当の戦なのだ。負けてたまるか。負けられん！

ドォォォォォン！

砲撃音が響き渡る。最後に残った唯一の奥の手。相沢国から輸入した、最新兵器の一つたるロケット砲！
戦いが始まったのだろう。
俺は再び目を閉じ、忙しなく戦う味方の勝利を祈りながら、静かに深呼吸した。

第２９話　非常識戦争（２）　～捕虜～

敗退！　敗北！　壊滅！

相次ぐ凶報。頭が痛い。胸が苦しい。

既に死者数三十。負傷者八十。このままいくと、俺たちは壊滅的打撃を被りかねない。戦況は明らかに不利だ。

ってか、はなから勝ち目のない戦なのだ。確かに俺たちは近代兵器を幾らか保持している新式軍ではあるけれど…。しかしそれとて大量装備じゃない。相沢から輸入したロケット砲など最新兵器も、一個や二個じゃ、大した戦力にはなりえなかった。ま、なんで相沢がロケット砲なんて持ってるのか、なんてこと、俺にゃさっぱりわからんがね。

そんなこんなで、俺たちの劣勢は極まった。防衛ラインはついに突破され、陣地内での激しい死闘が繰り広げられているという。本陣に残してあった遊軍部隊も悉く投入して、まさしく総力戦の様相を呈している。それでも兵が足りないというので、後藤などは、疎開している国民の中から、比較的戦えそうな女子供までも動員する非常策を打ち出してきたが、今となっては、そうするより他に打つ手はなかった。

「負けたら、どーなるの？」

青ざめた顔で、呆然と呟いているのは、平林めぐみであった。

「ねぇ、負けたら…」

既に本陣には、大将たる俺、副将たる後藤のほかには、平林と井上愛子の二人と数名の護衛兵がいるだけだった。他は全員、最前線に乗り込んで死闘に死闘を重ねている。

「煩いッ！」

そのとき、後藤が怒鳴った。日頃冷静で、露骨に怒る、なんてことしたことがなかった男の怒声に、平林はがっくりと腰を落とした。

夜になる。
開戦から数えて二度目の夜だった。
とりあえず保ち切った。敵も、さすがに夜には攻撃を仕掛けてくる気はないようで、日没とともに、潮が引くかのように撤退していった。無論、そんな敵に追い討ちをかけるような卑怯な俺たちじゃないよ。ってか、そんな余力はどこにもない。
ぞろぞろと幹部たちが本陣に戻ってくる。戦況報告が主であった。
「あれ、遠藤は？」
俺はふと尋ねてみる。姿が見えない。すると、佐川新平や上原勝正ら幹部たちはどれも重苦しそうな顔をして、
「あいつは…」
と、声を詰まらせた。
聞かずともわかる。俺だって、そこまで鈍感じゃないさ。
「そう、か…」
俺は力なく頷き、そしてがっくりと項垂れた。
遠藤伸介が死んだ。戦死。
同じ高校、同じテニス部出身。親友であるとともに今まで必死に生きてきた同志だった。けれど、そんな彼の死を受けても、不思議と涙は漏れなかった。悲しみよりは、いずれこのままだと、自分たちもまた彼の如くなりかねないという恐怖のほうが先に立っていたからかもしれない。
とにかく、今の俺たちは絶体絶命だった。生き延びた幹部たちを見ても、基本的にどれも満身創痍だった。ぴんぴんしているのは、本陣にあって戦っていない俺や後藤たちぐらいなもので、他は何かしか傷を負っていた。
「明日、相沢が来ないと負けだ」
俺と後藤は二人きり。彼の言葉に、俺も静かに頷いた。
「これはゲームじゃねぇ。負けたら、それこそ徹底的にやられる。

少なくとも、眼前の敵に、俺たちがこうと信じる戦争のルールなんて一切通用しない。なんせ、獣だからな」
「…」
「あいつらは俺たちを徹底的に虐殺するだろう。だから、断じて負けられない」
後藤はフゥと、小さく息を吐くと、
「そこでだ」
と、ようやく本題に入った。
「明日の戦、あんたにも前線で戦ってもらう」
「…いーのか？」
思わぬ後藤の言葉に、俺は興奮の色を隠せなかった。そりゃまあ、怖くはあるけれど、安全圏たる本陣にひたすら立てこもって、味方の悲鳴を聞いているだけの立場よりは幾らかマシだ。このままずっと本陣にいたりしたら、それこそ死に物狂いで戦っている兵士たちに合わせる顔がないってもんだろう。
だが、
大将ってのは本陣にいるもんだ！
って、事あるごとに言っていた後藤からそう切り出されるとは夢にも思っていなかった俺は、まじまじと彼の顔を見つめて、本気か否か、確かめずにはいられなかった。
「ああ。こうなった以上、総大将に出向いてもらって、全軍の士気を鼓舞するしかない。その間、全軍の指揮は俺が執る」
その間もなにも、開戦からこのかた、全軍の指揮権なるものは、はなからずっと後藤が握ってきたのだから、今さら、
俺が執る！
なんて言わなくても、お前以外に全軍を仕切れる奴なんていないさ。俺が静かに、そしてはっきりと頷くと、後藤大輔は嬉しそうににっこりとほほ笑んだ。
捕虜がいた。

ま、俺たちも無能じゃないから、如何に劣勢でも、捕虜ぐらいは幾らかひっとらえていたのだった。
俺は総司令官として、彼らと会ってみることにした。とりあえず、彼らの考え方など、聞くべきことはいろいろある。
離せ！　噛み殺してやる！
どうやら虎のようだ。ガゥッ、ガゥッと見張りを威嚇しながら、そんな言葉を叫んでいる。
「これだけか？」
と、尋ねると、
「はい。本当はもっと捕らえたのですが、捕らえた瞬間、どれも悉く自決してしまいました」
見張り役の兵はそう答えた。
「自決？」
「はい。舌を噛み切るか、さもなくば爪で自らの喉を掻き切ったりして…」
「なんと」
壮絶な死にざまだ。生きて虜囚の辱めを受けず、って精神なんだろう。
「こいつらは、死ねないように猿轡を噛ませ、手足を縛ってあります。ま、そこで人語を喋っている奴は、死にそうもないので猿轡だけは外してありますが」
「…そう、か」
人と違い、動物は自ら死なないものだと思っていた。自殺、なんて行為は人間だけの専売特許だと信じていたのに、彼らは捕虜になった途端、自ら命を絶ったという。それは俺にとって、衝撃的な事実であった。
いや、それはともかく…。
俺はとりあえず、目の前でガゥガゥ煩い虎の面前に歩み寄って、
「貴様らは何で俺たちの国に攻めてきた？」
と、尋ねた。

「煩いッ！　離せッ！　噛み殺してやるッ」
先ほどから、この虎はそんなことしか言わなかった。透き通るような白い肌に、不気味なほどの巨体が特徴的なこの動物は、ぎろりと俺を睨み、牙を立てていた。
「捕虜の分際で、なんだぁ、貴様のその態度はッ！」
当然、反抗的な捕虜は叩きのめされる。監視役の兵士たちが、こん棒片手に、思い切り虎を殴打した。もはや、動物愛護の精神などかけらもない。
「き、貴様らに勝ち目はないぞ。くっくくく。人間など、この世から悉く消し去ってくれるわ！　はっはっはっは」
勝ち誇ったように高笑いしながら、その瞬間、何を血迷ったか、この虎は思い切り自らの舌を噛み切って、自決してしまった。まさしく一瞬の出来事であったから、止める暇もない。
さすがに慌てる。驚く。何しろ、獣とはいえ、紛れもなくこの世に生きていた生命体が、自ら命を絶つ瞬間を間近に見てしまったのだった。気持のよいものではない。
「これ、戦い」
そこに、アシタメ主席がやってきて、そう呟いた。
戦い…、ねぇ。トラが平然と喋り、動物たちが自ら次々と自決していく。これが、戦い、ねぇ…。
非常識極まりない。
「仕方ない」
主席閣下はにっこりと微笑むと、俺の肩をぽんと叩いた。

第３０話　非常識戦争（３）　～逆転～

え、え、援軍だぁぁ！

この言葉を、どれだけ待ち望んだことか。

俺は既に血塗れ。初めて、戦場で戦った。初めて、人…、じゃなくてサルとか虎とか、そういう生き物を斬った。猛然と襲い掛かってくる獰猛な野獣たちは、もはや恐るべき敵以外の何者でもなかったが、とにかく辛うじて生きている。

それにしても、改めて見回してみると、戦場というものは、実に凄絶なものであった。人に虎に、狼にサル。ばかりではなく、鷲だの鷹だの、いろんな動物の死骸が、ゴミのように散らばっていた。大地は真っ赤に染まって、こういうのを地獄の景色というのだろうな、なんて思いながら、俺は呆然と立ち尽くしていた。

援軍到着！

これによって戦況は一挙に好転した。

相沢軍は総勢一千を超えていたようで、まさしく文字通り、瞬く間に猛獣たちを蹴散らしてしまった。まあ、獰猛なる肉食獣たちも、ジャングルの覇者たる威厳にかけて立ち向かってきたが、多勢に無勢だった。相沢軍にも多数の死傷者が出る激戦となったものの、結局、動物軍は撤退を余儀なくされることになった。

「閣下、お怪我は？」

そこに、犬山副参謀がやってきて、そう言った。

「特にない」

不思議なほど、無傷な体を眺めて、俺は思わず苦笑いした。

「で、犬山さんは怪我とかは？」

「いえ、私もおかげさまでぴんぴんしております」

確かに、犬山副参謀にも怪我といえそうな怪我はなさそうであった。お互い、不思議なくらいぴんぴんとしている。こんな激戦だったにもかかわらずだ。神の御加護でもあんじゃねーのか。なんて思いたくなる心境だった。

しかし、そうもいっていられないのが、味方の惨憺たる有様だった。俺たちは、運よく何ともなく助かったが、しかし仲間のうち、何十人かは死んでいるし、あるいは大怪我を負って歩くことすらままならぬ有様なのだった。

戦い。

余り思い出したくない。とりあえずかすり傷を水に浸して、消毒だけ済ませ、本陣に戻った俺は、援軍司令官たる相沢修平と会談したわけなのだが、そこで相沢より、「戦はどーだった？」と問われたのであった。はてさて、どー答えたらよいものか。余り思い出したくはないのだ。しかし、問われた以上、答えぬわけにもいくまい。何しろ相沢は俺たちを窮地から救い出してくれた恩人なのだから。

「まさに地獄っすよ」

俺は渋々話してみた。

そう。まさに地獄。これ以上の地獄があるというなら、逆に見てみたい。そう思わずにはいられないほど凄惨な地獄であった。

乱戦中、何度殺されそうになったかしれない。特に、獰猛な肉食獣たる虎が、牙を立てて猛然と襲い掛かってきたときは、マジでやばかった。そのとき、俺の手元には、激戦を重ねているうちに刃毀れした剣だけで、これじゃ、どー足掻いたって虎には勝てねぇ！と、思っていると、不意に、

ダァァァァン。

なんて銃声が響き、虎は息を失ったまま、俺の体にのしかかってきたのだった。

「大丈夫か？」

撃ったのは佐川新平だった。

「あ、あぁ。ありがとう」
くそ重い獣の死骸をはねのけて、俺は再び戦場に戻った。途中、戦死した兵士の持っていた剣を掴むと、それをもって両軍の攻防が熾烈さをましている激戦区に、自ら飛び込んだのだった。
「我こそは、大和国総理で、新井…」
如何にも源平合戦時代風の大音声を張り上げながら突撃すると、今度はサルたちが猛然と襲い掛かってきた。『総理』って言葉に反応したらしい。サルのくせに賢すぎる。
しかし、虎だの狼だの、そういう肉食獣に比べれば、サルたちは一人当たりの戦闘力は果てしなく弱かった。まあ、その分、奴らより何倍も賢くて数が多いのだが、それでも、まあ、虎とかよりは幾らかマシってもんさ。
ってなわけで、俺はあらゆる激戦を勝ち抜いて、今ここにこうやってぴんぴんしているわけだが…。
「ふーん。ま、君も相変わらず悪運が強いね」
相沢はニタニタ笑って、しまいには「はっはっは」と高笑いしだした。
「ところでさ、新井君。君に一度見せておきたいものがあるのさ。ちょいと来てみろ」
そう言って彼はてくてくと歩きだす。仕方がないので、俺や後藤らが、その後にぞろぞろと続いた。
「これだよ」
そう言って彼が指し示したのは、ヤマト湖湖上に浮かぶ大量のモーターボート及び、それに搭載されている山のような最新兵器であった。何十丁かのマシンガンやライフル銃、消音機（サイレンサー）のついた拳銃…、あるいは小型ロケット砲、数百発に及ぶだろう手榴弾、挙句の果てには暗視ゴーグルなんてものまであった。

な、なんだ、こりゃ？
俺だけじゃない。後藤以下幹部たちは皆、絶句していた。こ、これじゃ、まさに、本当の軍隊みたいではないか。
「くっくくく。そうだよ、まさにこれぞ本物の軍隊からせしめたものなのさ」
相沢は勝ち誇ったように言う。
彼がパンパンと手を叩くと、数十名の外国人たちがぞろぞろと集結した。迷彩服に大柄な体…。如何にも米兵らしい格好をしている。っていうか、ハリウッド映画かなんかでよく見る米兵そのものだった。
「そう。彼らは紛れもないアメリカ人さ」
相沢は淡々と言って、にやりと不敵な笑みを漏らした。
「半年ぐらい前だったかな？　いや、もっと前か？　ま、とにかくわが領内に軍艦が漂流してきたんだよ。ま、こいつらの話によると、アメリカの太平洋艦隊に属する戦艦で、極秘任務を遂行中に難破して、この島に辿りついたらしいんだよ」
「…」
「んでもって、こいつらの物資を俺が分捕った。こいつらも俺の国の住民に加えて、兵士として雇ったというわけさ」
あえてこんなものを見せびらかしているのは、相沢流の嫌がらせに違いない。というより、自分たちにはこれだけの武力があるのだから、金輪際逆らうなよ、という意思表示に違いなかった。
俺は呆れたように、いや、戸惑いを隠せないような顔をして、しばらく呆然とそこに突っ立っていた。まさか…。おそらく、相沢の軍事力はこれだけじゃあるまい。もっともっとすさまじい新兵器を隠し持っているに違いないのだ。これじゃ、もし次に相沢と戦うようなことになれば、敗北は必至だ。
「そうそう。この島は資源が豊富だぞ。この前なんか、原油が出たもんな。他に鉄鉱石も、石炭も、とにかくなんだってある。もしかすると金鉱とかウランとか、そんなもんも見つけられるかもしれん

なぁ。いずれにしても、もし俺たちが故郷に戻ることができたとしたら、大金持ちになること間違いないね」
ひとしきりけらけらと笑って、相沢修平は部下とともに立ち去ってしまった。そんな様を眺めながら、俺は相変わらず呆然と立ち尽くしていた。

「さてさて困ったね。どーしようか」
夜。俺一人。
そこに現れたのは、エルであった。いきなり、唐突に現れ出る不思議な神様であった。
「貴様か」
俺は小さくため息を吐くと、苦笑いしながらその場に腰を下ろした。
「なぜ、相沢とか云う男があんな最強兵器を手に入れたか、君にはわかるかね？」
エルが問う。
「貴様のバカな弟が手引きした…、とでも言うのか？」
だから俺も答えてやった。なんとなく頭に思い浮かんだ答えを、自棄気味にぶつけてみただけなのだが、
「御明答！」
エルはパンと手を叩いて、「ははは」と楽しそうに笑った。
「ま、それはとにかく、君はよくナタスの差し向けた、非常識な軍隊に勝利したね。見事だよ。君の戦いっぷりは特によかった」
「…見てたのか？」
「当然！」
「助けてはくれなかったのかよ？」
「助けたさ」
エルはにやりと笑って、ふんわりと宙に浮かびあがった。
「お前の存在こそが一番非常識だ」
俺が糾弾するように言うと、「確かに」彼はにこりと笑った。

「ま、いずれにしてもナタスの阿呆はそれなりに満足はしたろう。だから、おそらく、猛獣どもに講和を呼びかけたら、応じるに違いない。っていうか、講和しろ。おそらく、相沢とかいう男は、あの新式兵器を使いたくてうずうずしてるはず。んなことをしたら、この島は壊れちまう」
「…確かに」
ロケット砲とか、随分物騒な武器がいろいろあった。米海軍太平洋艦隊所属の軍艦をそっくりそのまま頂いたらしいから、トマホークみたいなミサイルとか大砲とか、もっと恐ろしい武器をいろいろ所持しているに違いない。そんなものを使用されたら、確かに島が吹っ飛ぶ。
「とにかく、君は勝利した。即ち、君たちは我が味方と恃むに申し分ない存在だということだ」
「味方？」
「そうだよ、新井君。君たちはこれから、我とともにナタスを倒さなければならないのだよ。あれも、今のところは大人しいが、いずれ必ずもっともっと恐るべきことを起こすに違いない。そうなる前に叩き潰す。災いの芽は早急に断ち切らんといかんからね」
「…災いの芽、ねぇ」
圧倒的に現実的（リアル）な新式兵器を見た後で、凄まじく非現実的（ファンタジック）な話をされても、困惑するだけであったが、とにかく俺に、エルの要求を断る理由はなかった。ま、ナタスって邪神が何を考えているのか知らんが、何の罪もない動物たちを操って、こんな凄惨な戦を仕掛けてきた黒幕だ。悪い奴には違いない。
しかーし。
なんとなく、ただエルとナタスの兄弟喧嘩に巻き込まれているだけな感じがした。神の座ってのがどういうものなのか、いまいちよくわからんが、とにかく余り楽しい話ではなかった。
「んで、具体的に、俺たちは何をすりゃいーんだよ」
と、俺が尋ねると、

「うーん。さて、何をすればよいのでしょーかねぇ」
すっとぼけたような顔をして、くすくすと笑うエル神様であった。

第３１話　非常識戦争（４）　～決着、そして～

全権代表として動物たちの陣に赴くと、そこにはエルが言ったように、如何にも講和に応じそうな、何とも言えない厭戦気分が広がっていた。
動物たちの代表は、サルのようで、一匹の偉そうなボス猿が、周りにトラや狼たちを護衛として侍らせて、全軍の頂点に君臨していた。
ま、非常識な空間ではある。しかし気にしていられる余裕はない。相手が誰だろうと、とにかく話をつけて、講和に導くしかないのだ。

「そこに座れ」
ボス猿は厳かにそう言って、俺たちをぎろりと睨みつけた。
「そなたたちが代表か？」
相変わらず偉そうなサルである。トラやら狼、そしてサルたちを傅かせ、一段高い上座にふんぞり返っていた。
「はい。私が全権代表の新井です。隣にいるのは…」
と、俺が言えば、
「全権副代表の平林めぐみです」
まず彼女がそう続け、次いで、
「同じく全権副代表の古谷亜子です」
少し年長、お姉さんという言葉が実によく似合う美女が、そう言ってぺこりと頭を下げた。
「ふむ。わしはジーネリアス。一応、将軍である」
ボス猿は相変わらず上座に腰を据え、露骨なまでの上から目線で、そう名乗るのだった。
ま、気にするようなことでもない。要は和議さえ結べればいいのだ。ジーネリアスとかいうサル将軍がどういう態度に出るのか。彼の機嫌を損ねるわけにはいかない。

「で、今回、そなたたちがわざわざ出向いてきたのは、和平を結びたいからだろう。違うかね？」
　ボス猿はニタニタ笑う。サルの笑い顔というのは、あまり気持ちのよいものじゃない。
「それとも何かね？　改めて戦争しようって話かな？　なら話は早い。こちらにはまだまだ無数の戦力がある。見てみると言い。ここにいるだけでも何千という兵があるのだ。必要とあらば、もっと集められる。ゆえに、君たちが再度の宣戦布告をしにきたというなら、喜んで受けて立つがね」
　ボス猿は驕っている。俺にはそう見えた。
「違います」
　とりあえず、きっぱりと否定しておく。なんでわざわざ宣戦布告しに、敵軍本陣に出向かねばならないのか。戦うつもりなら、そんな面倒なことするはずがない。一方的に攻撃を仕掛けてそれで終わりだ。
「ほぉ。違うと。ならばなんぞね」
　ボス猿は俺の顔をぎろりと睨んできた。どっちかっていうと、睨み顔のほうが様になっている感じがした。
「和議です」
　俺ははっきりと答えた。
「和議？」
「和議です」
　繰り返す。どうやら、このサル将軍は好戦的な御方のようだ。和議だ。くどいほど念押ししておかないと、変な風に話が変わっていきかねない気がしたからだ。
「和議ねぇ。ま、構わんが、条件次第だな。そちらが無条件降伏するというなら、こちらも検討するにやぶさかではない」
　ボス猿は相変わらずの態度であった。
「閣下」
　さすがの俺も、堪忍袋の緒が限界に近い。

「閣下は、やはりどこまでもサルでございますな」
俺の挑戦的な言葉に、そばに控える平林・古谷両副代表の顔が青ざめた。それは駄目！　平林は目で訴えてきた。しかし気にしない。
「さ、サルだと？」
その言葉の中に、小馬鹿にしたニュアンスを感じ取ったのだろう。ボス猿は激怒し、そして彼を取り巻く側近たちもいきり立った。
「そうです。外交に関する礼儀を一切弁えておられないようで、これでは、我らヒトより数段知能の劣る、ただのサルにすぎませんな」
「な、なにぃ」
「何より、我らはお互い対等の立場であるはず。上座にふんぞり返って、外交特使たる我らを見下ろすとは、何たる非礼。特に私は全権代表であるばかりでなく、一国の総理。これを侮るは、最大の失礼にあたるはず」
俺も随分と度胸がついたものだ。そう思わずにはいられない。
何しろ、周りには俺の言葉によって殺気立ったトラやら狼たちが、ガゥガゥ唸って、攻撃態勢をとっている。それなのに、さして動じることもなく、堂々としていられるのだ。
ま、俺も散々いろいろな目に遭ってきたからなぁ。度胸がつくのも当然か…。なんて一人悦に浸りながら、俺は改めて、ボス猿をぎろりと睨みつけてやった。
「もし私に、唯のサルなどとバカにされたくなければ、そうでない証をお見せあれ。少なくとも、降伏しにきたわけでもない相手に、いきなり無条件降伏か？　などと切り出す無礼を詫びよ！」
ボス猿は黙り込み、平林などはきょろきょろ落ち着きなくあちこちを見まわしている。殺気立った狼たちが、今にも襲い掛かってきそうな気配だ。まあ、総大将たる将軍をバカにされたのだから、無理もなかろうが…。
しかし、肝心のボス猿は、しばらくの間、じろりと俺を睨んでいたが、すると、不意ににやりと笑って、
「それもそうだ」

と、言った。
そして一段高い上座からすっくと立ち上がり、俺たちと同じ目線に降り立った。
「改めて名乗らせていただく。私はジーネリアス。わが軍の指揮を担う将軍だ」
そう言って、彼はぺこりと頭を下げた。
「私は新井大次郎。全権代表にして、大和国総理です」
俺も改めて、そう答えると、深々と頭を下げて、先ほどの無礼な物言いを謝した。
「それと一つ、私はサルではない」
ボス猿はそう言って、にやりと笑う。そして、
「ところで、和議だったね」
と、向こうから切り出してきた。

和議交渉はすぐにまとまり、結果、両軍が引き上げるということで決着を見た。全権代表たる俺と、ボス猿の間で覚書が締結され、サインもした。
全てが終わって引き揚げる途中。
ボス猿は俺を呼び止め、誰もいない一室に招き寄せてきた。
何だろう？
不思議そうに首を傾げながらも、俺はそこに入って、ぐるりとまわりを見回した。そして、「ここはなんだ？」と、ボス猿に尋ねようとしたときのことである。
あれ？
ボス猿の姿がない。
人の気配など全くしない、何とも寂しい、いや何となく不気味な空間。よ、よもや！　俺をこんなところに呼び込んで、殺す気じゃあるまいな。いや、あのボス猿のことだ。そんな卑怯な真似はするまい。それに、そんな卑怯な殺し方をせずとも、俺を抹殺するやり方なら、他にもいろいろあるはずだ。

なんて考えていると、
「ここだよ」
どこからともなく声がした。

ヒュゥゥゥ。
風が吹く。それは扉を激しく叩き、家全体ががたがたと震えた。
「ここだよ、わからんかね。上だ、上」
声色は、確かに上から聞こえてくる。
だから俺は上を見た。素早く首を振り上げたのだ。
すると…。
ボス猿がそこにいた。ふわふわと宙を舞い、そしてゆっくりと降りてくる。リンゴが落ちるさまを見て、ニュートンが発見したという万有引力の法則を悉く無視する彼に、俺は言葉を失った。
「わからんか？　まあ、わからんだろうな」
降り立ったボス猿は、そのとき既に、ボス猿ではなくなっていた。
それは…、ヒト。っていうか、俺自身。鏡でも見ているかのような感覚に、俺の動揺はますます強まる。
「私はサルではない。先ほど言ったろう」
俺であって俺でないものは、そう言ってにやりと笑った。
「そう。私は神だよ。正確には、これから神になろうとしている者だ」
「…か、神だと？」
なんだそりゃ…、とはなから神の存在に疑問符を抱くほど、俺も狭量じゃない。この世界にやってきてから、散々非常識な目に遭ってきたのだ。神と名乗る奴には、他に心当たりがあるしな。とにかく、こんな程度の発言でびびったりする俺じゃない。
「兄とは、親しい関係らしいね」
彼はそう言って、いつの間にか俺の背後に回っていた。

第３２話　移民たち

国に戻った俺は、今回の戦争にて散っていった同志たちの葬儀に着手することになった。

今回の戦いでは、遠藤伸介以下大勢が死んだ。とりわけ遠藤の死は、俺や、他の幹部たちにとっても大きな衝撃であり、葬式の挙行が決まったときなど、平林を筆頭にした幹部たちの中には、悲しみのあまり涙を流す者も多かった。

平然としていたのは、後藤大輔副総理ぐらいなものである。

「今回の葬儀は、政府の力を思い知らせるきっかけにするんだ」

帰国したばかりの俺に、彼はそう言って、にやりと笑った。

「盛大に執り行う。喪主は…、そうだな、主席閣下に任せよう。葬儀実行委員長は総理閣下がやってくれ。俺が副委員長になって実務を取り仕切るよ」

神聖なる葬儀までも政治と絡める。そんな後藤の冷静冷徹な考え方に、ついていけない。特に、遠藤は親友じゃないか。そいつの死を悼む場を、政治に利用しようとする後藤の神経が、どうしても理解できないのだった。

しかし後藤はやる気満々だった。彼としては、これをきっかけに、サークル活動にも似た中途半端組織に過ぎない政府を、強力な政府へと発展させるつもりらしい。まあ、先の戦争などを通じて、政府体制は大幅に固まってきていたが、彼としては、それだけでは不足だと考えているらしい。

「ま、全ては俺に任せておけ。盛大壮大な葬儀をしてやれば、遠藤らも冥土から喜んでくれるに違いないよ」

彼はそう言って、けらけらと笑った。

先の戦争及び和議をきっかけに、俺たちの国も一挙に膨張した感がある。

何より国民数が膨れ上がった。確か、戦前は千数百人ぐらいだったはずだが、今では四千、五千以上は確実にいる。大半は、人間並みの知識と能力を持った動物たちであった。

昨日の敵は今日の友、とはよく言ったもんだ。改めて実感する。何しろ、あの戦いから一週間と過ぎていないのだ。お互い、血で血を洗うような大決戦を演じておきながら、今では同じ国民として、平然と同じ空間に暮らしているのだった。

だから街を歩けば、動物たちが平然と二足歩行で歩いていた。まさしく、これ以上ないほどファンタジーだ。少なくとも、現実世界にいたころには絶対にありえなかった世界。

無論、一般国民は、そんな様を疎ましげに、腹立たしそうに眺めていたが、総理たる俺の決定だから、だれも逆らえない。っていうか、後藤が逆らわせないのだった。もしもそれに異議を唱えよう者なら…。実際、俺たちの国は、民主主義国家ではないよなぁ、と素直に思う。何しろ、政府方針に公然と異議を唱えたりしたら、後藤の指揮下にある情報機関にマークされる。それ以上過激に行動したら、何らかの制裁を受けるのだった（よーするに、逮捕されて、へたすりゃ処刑）。

「独裁は悪いことじゃない」

彼は平然とそう言っていた。

「特に創業期の政府には強力な権限を握った指導者が必要なんだ。いらん雑音はねじ伏せないといかん。そんなの、いちいち気にしてたら国家なんて千年たってもできやしない。新国家の草創期ってのは、どこだって独裁政治から始ってるだろう。あるいは指導者に権限が集中してるはず。戦後初期の日本を主導した吉田茂首相だってワンマン宰相って異名がついたほどだし…。

民主国家ってのは、それなりに成熟した国にだけ通用するやり方だ。俺たちのやり方に反発する奴は徹底的に排除するし、事によっては見せしめのために処刑したっていい。国の基盤が固まって、政治体制も整ったら、そこから順次、民主国家へ衣替えしていけばよ

いのだよ」
それが後藤の考え方らしい。
後藤大輔が歴史的に敬愛する人は、土方歳三、織田信長、そしてケマル・アタテュルクだという。ケマルはトルコ共和国の建国者で、そして現代のトルコ共和国の基盤を強引に固めていった独裁者だった。しかし彼はよい独裁者の典型例として引用されることが多い。
俺はケマルのような土方になるのだ。
というのが、最近の後藤の口癖であった。土方ってのは、幕末日本にその名を轟かせた新撰組において鬼の副長と恐れられた男で、まあ、日本史上、最も名高い補佐役、副官といっていいだろう。自分や上司である近藤勇局長の示した方針、決定に反対する者、あるいは自分が定めた法度に違反した者を片っ端から切腹に追い込んで、烏合の衆に過ぎなかった新撰組を強力な軍事組織としてまとめ上げて言った生粋の組織人。
独裁者ケマルと鬼の副官土方を徹底的に尊敬している後藤大輔という男が全権を握っている国なのだ。民主主義国家であるはずがない。
「しかしだ。あんなの受け入れて、本当にいーのか？」
俺の意を受けて、半ば強引に動物たちに市民権を与えた後藤であったが、しかし彼なりに疑問ではあったらしい。
「構わん。それに、強力な国を作るには、住民の数が多い方がいーだろう」
と、俺は淡々と答える。
「ふーん。ま、お前がそれでいーってなら、俺は別に構わんがね。それに、あの獣たちの強さは嫌ってぐらいに分かったから、あいつらも早速軍隊に加えてやろう。そうしたら、まさに最強軍が完成するぞ」
後藤は楽しそうに笑い、俺はそんな彼を危なっかしそうに眺めていた。

とまあ、そんな事情がある。
後藤法相より正式に市民権を与えられ、平然と街中を歩いている人化動物たちを見ていると、いろいろ、複雑な思いを抱かずにはいられない。
っていうか、これは現実なのか？
まずこれが第一。
何しろ、マンガかアニメ、あるいはファンタジー大作映画でも見ているかのような感覚だ。明らかに違和感がある。まあ、飛行機事故にあって、偶然辿りついた島でこんな国を作り、自ら総理大臣なんて立場に収まっている時点で、既に非常識極まりなかったが、その上、人化した動物たちが堂々と闊歩しているとなると…。

「お前にあいつらは託すよ」
あの男は、そう言った。
俺であって、俺でない男。自らを神になろうとしている男と定義した、珍妙なる神もどき。
「いずれにしても、こいつらにかけた人化の術は永遠に解けん。俺だって、いつまでもジーネリアス将軍と名乗って、サル顔のままあいつらの頂点に君臨してるのはめんどいんだ。だから、お前に預ける。そーだな。市民にでもしてやってくれよ。あいつらもそれを望むだろう。形は野獣だが、心はヒトそのものになってるからなぁ。
嫌なら、別に構わんよ。こいつらを再び嗾けて、お前たちの国に攻め込ませてやる。全滅したらしたで、俺があいつらを統率する手間が省けるし、また面白い戦争を見物できるから、一石二鳥さ」
そいつはそう言って笑う。
「さ、どーする？　総理たる君次第だぜ」

全く、俺も随分とお人よしなことよ。
結局、そいつの言葉に応じる形で、何千って動物たちをそっくりそのまま受け入れてしまったのだった。そのことを後藤に話したら、

先の通りの結果になった。他ならぬ総理の意向だからっていうので、後藤は強引に推し進めた。逆らう者は容赦なく罰し、そして強引に市民権を与えてしまったのである。

かくしてこの街には動物たちで溢れるようになった。今思えば、こいつらは皆、あの神であって神でない、奇妙な男のスパイであるようにも思える。だからといって、今さら追放するわけにもいかないし、一人ひとり取り調べていくわけにもいくまい。

俺の判断は吉と出るのか、凶と出るのか。

「なんか、気味悪い」

平林などは、そんな風に言って不満を述べている。無論、後藤の前じゃ絶対に言わないが…。言ったら、如何に平林といえど、あいつは容赦なく罰する。そういう男だ。

「仕方ないだろ。そうするしか、他に道がなかったんだから」

とりあえず、そうやって反論しておくしかない。そうさ。俺はこの街を救ったのだ。あいつらを移民として受け入れることで、この街を救ったのさ。だったら、誰に恥じる必要がある。誰に謝る必要があるんだ。後ろめたいことは一切していない。…まあ、若干の不安はあるけれど。

葬儀が始まった。

ヒトにトラ、サルに狼。あるいは鷹やら鷲やら、いろんな奴らが入り乱れての、壮大なるファンタジック大葬式。

喪主はアシタメ主席閣下。

彼の片言挨拶が終わると、今度は葬儀実行委員長たる俺が演壇に立つ。葬儀の参列者は、国民の大多数。即ち四千人以上がこの場に集結していることになるのだった。緊張の度合いは果てしなく大きい。

カンニングペーパーは一切ない。演説するのに、下を向いてちゃ威厳がでねーだろ、ってのが後藤の理屈。俺は後藤の言いなりだ。

だから俺は、ひとしきり考えた原稿を頭の中に叩き込んで、壇上

に上がったのだった。しかし、気がつけば、緊張のあまり頭の中は真っ白だ。何を言えばいいのか、さっぱりわからん。

仕方がないので、思いついたことをすらすら言ってみる。途中から、何を言っているのかさっぱり分からなくなっていたが、その脈絡のなさが、逆に聴衆の涙腺を刺激したらしい。皆、故人を思い出しては涙し、そして、そんな様を見ていると、演説している俺自身が泣きたくなってきた。

かくして、大和国を挙げて行われた大国葬はここに終わったのだった。

第３３話　とある騒動

改めて周りを見回してみると、だいぶわが国も立派になったものだと思う。

変な感じがする。何しろ、自分たちがこの島に辿りつくまで、この島はただの島だったのだ。無人島ではなかったけれど…。

俺たちがこの国を作った。一から十まで全部俺たちが作ったんだぜ。誰でもいいから誇りたい。もし、救出されて故郷に戻ることができたなら、この体験談を伝記本に纏めて出版したっていい。出してくれるかは知らないが…。

しかし、まぁ、よくこんな国を作れたもんだ。我ながら感心するね。しかも俺は総理大臣だ。リーダーだ。少しは褒めてくれたっていいんじゃないかな。けれど…。

俺の支持率は、このところ急勾配の坂を転げ落ちるように、見るも無残に急落していた。後藤副総理の目を盗んで、ひっそりと反政府的活動を続けているわが国唯一のメディア、『大和日報』が行った世論調査だと、前月比１０ポイント以上ダウンの３５．５６％らしい。

こりゃやばい。

このままじゃ、３０％の大台を割り込むのも必至だ。そんなことになったら…。ま、総理の座を降りられるんなら、それはそれでいーかもしれない。リーダーなんて、好き好んでなるべき代物じゃないしな。大手を振って降りられるなら、俺はいっそ降りてやるさ。投げ出し、なんて文句は言うんじゃないぞ。お前たちが俺を支持しないから、俺は降りるのだ。

俺がいくら開き直ったかのような態度をとっていても、俺を支えて政権を仕切っている後藤は不満だったようで、

「これじゃいかん」

と、いつもの彼らしくもなく焦っているようだった。
ま、支持率急落の理由は明らかだった。要するに、動物たちにも市民権を与えたことが、国民（ヒト）の不満を買っているのだ。まあ、動物といっても、基本的に彼らは平然と人語を喋るし、道具だって器用に扱った。外見は怖いけれど、中身はヒトそのものなのだ。
実際、俺は何で動物たちの受け入れ政策が不興を買っているのかがよくわからなかった。ここ数カ月、町は飛躍的に発展を遂げたが、その原動力となっていたのは彼らだ。彼らに感謝こそすれ、なんで排斥運動なんて起こすんだ？　別に彼らは犯罪行為だって犯してはいないし、法律だって破ってない。
「そういう問題じゃないのさ」
政権内で、比較的受入れ反対派の佐川新平厚相がそう言うと、
「なんでさ」
俺は真剣な顔をして尋ねてみることにした。
「なんでって、わかんないかな。要するに、皆恐れているのさ。あいつらに自分たちの役目を奪われるんじゃないか、ってね」
「ハァ？」
その意味が俺には分からない。役目を奪われるって、別にあいつらは何もしていない。懸命に働いて、国の発展に力を尽くしているじゃないか。
「それだよ」
佐川はきっぱりと言い切った。
「いいかい。奴らは俺たちよりはるかに強い力を持っている。そりゃ、動物なんだから無理もないけどさ。家畜として利用するなら、別にいい。けど、あいつらは立派に自我をもってて、知識もあって、知恵までもってる。外見はともあれ、中身はヒトだ。中身はヒトのくせに、動物と同等の力まで発揮できるんだから、皆が不安がるのも無理ないだろう」
「分からん」
なんのこっちゃ？　確かに彼らは凄い力を持っているけれど、だ

からって傷つけたり、乱暴を振るったりはしていないだろう。必死になって、この国、社会に順応しようとしているのだ。
「要するにだ。今はいいさ。俺たちの国も、発展過程にあるからな。俺たちの力とあいつらの力を足しても、まだ足りないぐらいだから。けど、発展が終わったらどうする？　ひとしきり開発が終わって、経済成長がストップしたらどうなる？　あいつらより格段に力が劣る俺たちは、お払い箱だろ？」
「……」
「皆、怖いのさ。失業者になることがね」
なるほど。そう言う考え方、感じ方もあるのか。
俺は今さらながらに納得したような気分になったが、ちょっと待て！　だからってあいつらを排斥して言い理由になるもんか。確かにあいつらは俺たちよりはるかに強くて、逞しくて、その上賢いけれど、俺たち人間が全く役立たずになる、なんてこと、あるかよ。確かにあいつらは器用だ。けど、細かな作業は絶対できない。彼らの体の構造を見りゃわかるだろう。彼らはまだ四足歩きしかできない。手だって細くないから、自然、細かな作業はヒトがやらないといけないことになる。
簡単に言っちまえば、あいつらはただ喋れる動物ってだけ。目くじら立てて毛嫌いする必要がどこにあるのだ。
「ま、総理の気持ちも分かるけどね。しかし、よくよく考えた方がいいぜ。昔から移民問題ってのは、下手に打つ手を間違えたら、その国の根幹を揺るがす大事件になるもんだ。愛すべき故郷にだって、在日の人たちをどうするかって議論が未だに続いているだろ？　アメリカでもヒスパニックの人たちをどうするかって議論が未だに続いてる」
「……」
確かに、そうかもしれない。だけどさ。だけど……。外見が違うから、能力が違うからって、それだけの理由で排斥するなんて、どーかと思うぞ。

しかし、感情論が先に立っている民衆を説得するのは難しいんだろうなぁ。佐川を見てりゃすぐわかる。…こんな状況がもしずっと続くようなら、いずれ両者は激突するに違いない。仲間割れの挙句に戦争なんて、最悪の極みだ。

俺はしばらく官邸に閉じこもっていろいろと考えてみることにした。

困った。まじで困った。

どうすりゃいーんだよ。

支持率下落で逃げ出し退陣！　なんて一人考えていた俺だったが、考えてみると、いや、考えてみるまでもなく、ここで逃げ出すわけにはいかなさそうだった。少なくともこの問題をひと段落させるまでは、総理の座から離れるわけにはいかん。もし変に強硬派の新総理が誕生したら、それこそ内乱だ！　俺は総理として、いや、こんな事態を招いた責任者として、最期まで責任を完遂する使命があるのだ。

とは思うものの…。

どーすりゃいーのさ。

全く、俺みたいなひよっこには肩の荷が重すぎる。

「あんまり難しく考えないことです、閣下」

そこに、井上愛子がすたすたとやってきて、俺の前に、いつものようにお茶を置いた。官房長官とか首席秘書官とか兼任している割に、やっていることは俺のお茶くみ。ちょっと悪いかな？　とは思うのだけれど、まあ彼女も好きでやってるらしい。ならやらせておくに限るのさ。

「閣下は総理なのですから、やりたいように政治をやればよいのです。反対されようが何されようが、任期が終わるまで、あなたは総理大臣閣下なのです」

感情のこもり切った物言いが、いつもの彼女らしくない。いつもは冷静で、淡々として、生気の感じられぬ敬語を駆使した言葉づか

いしかしなかったのに…。
いや、彼女の態度なんてどーだっていい。彼女の言葉通り、確かに俺は総理大臣。任期が終わるまでは、誰が何と言おうとこの国の最高権力者なのだ。支持率が下がろうが、どれだけ非難を浴びようとも、徹底的に俺のやりたいようにやるだけ。

明日、俺は閣議を招集した。
そこで、
「移民受け入れ政策は絶対にやりとおす。そして、それができるまで、俺は絶対に総理の座から辞めない」
と、言った。
「それ、いい」
すると、アシタメ主席が頷いた。もし俺が総理の座から降りたら、次期総理の最有力候補と目されていた人だった。
「お前、総理。私、主席。それしかない」
彼の言葉に、俺の方針に反対姿勢を強めていた佐川たちも、
「総理に辞められたらかなわんからな」
と、言って、取りあえず俺の方針に賛意を示すようになった。
後藤副総理は、俺の方をまじまじと見て、にっこりとほほ笑んでいた。「よく言った！」とでも言いたげな顔をして、彼は常になく楽しそうな顔をしていた。

第３４話　神の野望

「獣たちを国に入れたのは失敗だね」
ある日、俺の下にやってきた神様は、そう言ってけらけらと笑った。
「なぜかわかるかい？」
物知り顔で、俺の顔を覗き込むように見つめてきた。
みすぼらしい中年男が、目と鼻の先にいる。気持ち悪いから離れてくれ！　俺にそんな趣味はねぇ。
「失敬！」
心の中を読んだらしい神が頭を下げると、
「だが、獣たちは国に入れるべきではないよ」
と、排外主義者のようなことを言った。
「お前、神だろ？　狭量な愛国主義者みたいなこと言うなよ」
「…愛国主義者？　残念ながら、私に君の国への愛国心なんてないよ」
神は相変わらず楽しそうにからからと笑っている。
「ふん。じゃあ、なんで彼らを国に入れるのが駄目なんだ？　あ、そうか。愛国主義者じゃねぇってことは、俺たちの国を潰しに来たんだろう。そうだろう。あいつらと俺たちを激突させれば、おのずから俺たちは滅びるからなぁ」
「違うね。そんな面倒なことをしなくても、君の国はおのずから滅びる定めにある。私が助言し、私の助言を受け入れれば、話は別だけれどね」
神、即ちエルはにこりとほほ笑んだ。
「私の忠告を受け入れるか否かは、総理大臣たる君次第だ。受入れるもよし、受入れぬもよし。だけれど、君たちの力が是非ともほしい私にとっては、是非受入れてほしいがね」
「…受入れるも何も、なんで俺たちの国が滅びるんだ？　だいたい、

なんであいつらをお前たちは目の仇にするんだ？」
　なんで、皆、皆、揃いも揃ってそう好戦的なんだ？　もっと仲良くできないものなのか？　見てみろよ。あいつらはただの動物だぜ。喋るだけの動物だぜ。賢いだけの…。子供の頃夢見なかったのか。あの頃、夢に描いたメルヘンチックな世界が、ここにはあるんだ。絵本とか、童話の中にしかなかったような世界観がここにそっくりそのまま描き出されているんだぜ。
「そんな甘いことを言っていていいのかい。総理大臣閣下？」
　エル神はくすくすと、呆れたような笑い声を出した。その噛み殺したような笑みに、俺はムッとした。
「まあ、別に君がどれだけメルヘンチックな男だろうと構わんが。だが、これだけは言っておいてやろう。彼らは、スパイだ。いざとなれば、わが弟が意のままに操ることができるだろう」
「…」
「最後の忠告だ。獅子身中の虫たる奴らを排除しなければ、君たちは必ず滅びる」
　滅びるって、いったい何の話をしているんだろう。別に俺たちは、ナタスとかいう邪神と敵対しているわけじゃない。要するに、あいつと戦わなければいいんだろ？　誰が好き好んで戦争なんてするものかね。例えエルとかいう眼前の神が、邪神と戦えなんて言っても、俺は応じないね。ま、俺たちの力で、仮にも邪神たる彼を倒せるとは思えないが…。
「君の考えはよくわかるがね。しかし少し考えてみたまえよ。動物たちを平然と軍隊に作り変えて、君たちに戦争を吹っ掛けてきたような男だよ。異能の力で好き勝手しているあいつが、もし俺を倒して神の座を得たら、どうなると思う？」
　どうもなるもんか。ってか、神の座ってなんだよ。ナタスとかいう邪神も、普通に異能の力を持ってんだろ。もし奴が変なことをしようと思ったら、もうとっくにこの島は変なことになってるはずさ。そうなってないってことは、彼にはそうする気がないってことだろ

う。まあ、俺たちにとっては迷惑千万だが、戦争を吹っ掛けたりして遊んでいるだけ。
「違う。奴の力は制限されている」
エルは神妙な顔をして言った。
「制限？」
俺が尋ねると、
「これを見ろ」
そう言って、彼はその懐から、手のひらサイズの赤い物体、見れば明らかにリンゴのようなものをとりだした。
「これはね、神の実と言う」
いや、リンゴだろ。どー見ても。
「確かにリンゴだ。味もリンゴだけれどね。だが、これを食べれば、奴は完璧な神となれるのだ」
「…なんだそりゃ」
「このリンゴは、私の山の山頂にしか実らない。今の奴は、これが喉から手が出るほどにほしいのさ」
確かに、あのお花畑が広がる違和感ありまくりの山頂部分に、そんなリンゴがあったような気がする。そのリンゴに、そんな力があったとは…。いやはや、ファンタジックもここまできたら、立派なものさ。
「だが、既に奴は力を持っているんだろ。制約されてても…。それ以上の力を求める理由ってなんだよ？」
動物を奴隷のように使役したり、俺たちをこの島に招き寄せたり…。いろいろその特殊能力を使って暴れまわっている男が、これ以上さらに何を求める？
すると、エル神は困ったような顔をして、こう言った。
「奴はこの島から出たいのだよ」
島から出たい？
そりゃまあ、俺だって出たい。出れるものならね。故郷には家族

だっているし、友人だっている。無事な姿を見せてやりたいさ。特に親には見せてやりたい。
「この島は君たちがいた世界とは、異なる次元にあるのだ」
エルは悲しげな顔をして、そう言った。
「だから例えば君たちが船を作ってこの島を出ようとする。だが、出られないのだよ。ある程度行くと、必ず嵐に出くわし、島に戻される。嵐は必ず起きるようになっていて、我らを島から出してはくれないのだよ」
なんだそりゃ。ってか、異なる次元？　なになに？
じゃあ、俺たちはこの島から永遠に出られないのか？　どうりで、救助船とかが来ないと思ったぜ。
「異能の力を持った私やナタスのような奴は、外の世界、即ち君たちがいた世界だけれど、そこから別の人間を呼び寄せることができる。けれど、私たちを含めて、誰も外に出ることはできない」
「…」
「ただし、例外がある。このリンゴの木の実を食べた場合さ。さすれば、次元の壁を飛び越えて、かつての世界に戻れるのさ」
じゃあ、食べさせてその物騒な邪神とやらを俺たちの世界に戻せばいいじゃないか。そしたら、この島も平和になる。
すると、エルはますます物憂げな顔をして、
「そうもいかんのさ」
と、言った。
「なんで？」
俺はいつの間にか、エルをぎろりと睨みつけていた。
「奴の目的は、この異能の力を使って、君たちの世界を征服しようと企んでいるからさ。どんな生物だって奴隷のように使役できるし、そのほかいろんな特殊能力を俺たちは持っている。君たちの世界には、どうやら凄まじい兵器があるようだけれど、残念ながら、それでは私たちには勝てないのだよ」
せ、世界征服！　頭が変になる。子供向けのアニメーションでも

あるまいし。せ、世界征服って…。
「ま、あれが外の世界に出向きたい理由は実に最悪なものだからね。私としては断じて彼をここから出したくない。この島は、奴の檻とするにもってこいなのさ」
まあ、理由は分からんでもない。確かにあれだけの力があったら、世界征服ができるできないは別としても、かなりの災厄を巻き起こすだろう。
「だが、この島にはこの島の世界があって、ついには君たちみたいな人間まで世界を作ってしまった。この島を奴の檻にするといっても、だからってこの島の世界が破壊されていいことにはならない。だから君に頼むのではないか。奴を倒し、この世界に平和を取り戻そうと。そうすれば、私だって、無駄に疲れる『神の実』番をしなくてもすむ」
なるほど。確かに、あっちの世界が破壊されるのも困るが、こっちの世界が破壊されるのも大いに困る。既に俺たちはこっちの世界の住人になっているんだからな。
だけれども…。
だからって、動物たちを追放してよい理屈にはならない。彼らは確かに潜在的にナタスに使役される可能性があるといってもだ。しかし、今は普通に暮らしている。ってか、もし追放しようと思ったら戦になる。
「指導者は冷酷であるべきだよ」
エルは淡々と言って、にやりと笑った。
冷酷ねぇ。確かにそうかもしれないが…。しかしだ。
「ま、近日中に答えを出してくれればいい。君が英断を下せば、その時は私が必ず力になる」
そう言って、エルはふんわりと宙を舞い、その瞬間、跡形もなく消え去った。俺はただぼんやりと椅子に腰かけると、これからどうしようかと、本気で必死に、頭が痛くなるほど悩み考え迷うのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9855h/

十五少年開拓記

2010年10月10日16時23分発行